



＜満洲文学＞について ー長谷川濬の作品を中心にー

魏, 舒林

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2013-03-25

(Date of Publication)

2013-08-21

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲5727

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005727>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博士論文

平成二十四年二月七日

〈満洲文学〉について

―長谷川濬の作品を中心に―

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

魏 舒林

博士論文

〈満洲文学〉について

―長谷川濬の作品を中心に―

魏 舒林

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻
二〇一二年一月七日提出

【凡例】

※ 本稿においては、歴史的用法として「満洲／満州」の表記はすべて「満洲」に統一した。ただし、引用文献などで「満州」を用いるものについてはもとの表記にしたがうことを原則とした。

※ 引用文中、旧漢字はすべて新漢字に改めた。ただし、固有名詞に関しては、その限りではない。また、適宜、句読点を補った場合がある。

※ 単行本は発行年度を、雑誌は発行年月まで、新聞は発行年月日までを示した。

※ 年表示は、元号表記にした。場合により満洲国の年号（大同、康德）を○内に併記した。

※ 単行本・雑誌・新聞の書名・誌紙名は『』で示し、作品・論文の表題は「」で示した。

※ 引用部分は「」で示した。◇内は特別に強調したい用語を示すものである。

※ 「新京」などの地名については当時の呼称にしたがった。

序論―はじめに―……………7

第一節 明治・大正期に描かれたへ満洲へ……………10

第二節 満洲国における日系作家の活動……………11

第三節 へ満洲文学への研究状況……………13

第四節 長谷川濬に関する先行研究……………14

第一部 小説から見える満洲国……………19

第一章 満洲国における恋愛と建国 | 長谷川濬「烏爾順河」をめぐって……………21

序……………21

第一節 友情・愛情と建国運動……………22

第二節 建国精神と大同学院……………24

第三節 建国精神と風土憧憬……………28

結……………33

第二章 国境線としてのアルゲン河 | 長谷川濬「蘇へる花束」をめぐって……………37

序	37
第一節 「蘇へる花束」における国境線	37
第二節 同時代の他の作品における国境線	44
結	46

第三章 満洲国における民族協和 —長谷川濬「寛城子」をめぐって—	49
----------------------------------	----

序	49
第一節 友情とイデオロギ―	49
第二節 民族協和の建前と本音	54
結	57

第二部 文学者としての歩み	61
---------------	----

第一章 長谷川濬と『偉大なる王』 —バイコフの翻訳をめぐって—	63
---------------------------------	----

序	63
第一節 『偉大なる王』との出会い	63
第二節 『偉大なる王』訳業のいきさつ	66
第三節 『偉大なる王』翻訳から得たもの	69
結	73

第二章	満洲国に生きる文学者の一側面	―長谷川濤「海と湖と人間と」をめぐって―	77
-----	----------------	----------------------	----

序		77
---	-------	----

第一節	満洲ジャーナリズムと文学環境	77
-----	----------------	----

第二節	満洲国における専業作家の問題	80
-----	----------------	----

第三節	芸文統制への抵抗と加担	84
-----	-------------	----

第四節	長谷川濤が志向した文学	87
-----	-------------	----

結		89
---	-------	----

第三部	同時代の他の作品	93
-----	----------	----

〈満洲文学〉のある一面について	―日向伸夫「第八号転轍器」をめぐって―	95
-----------------	---------------------	----

序		95
---	-------	----

第一節	登場人物の設定と植民地のメタファー	96
-----	-------------------	----

第二節	異民族に対する視線と姿勢	100
-----	--------------	-----

第三節	植民地システム下の「一個人」	103
-----	----------------	-----

結		105
---	-------	-----

結論―おわりに―……………109

付録 長谷川濬略年譜（付・著作目録）……………115

初出一覧……………131

序論 ―はじめに―

序論 ―はじめに―

満洲国は昭和七年三月に建国宣言がなされ、昭和二〇年八月に崩壊を迎えた。つまり、満洲国は実質、一三年間しか存続しなかったことになる。満洲国の元首は、清朝最後の一二代宣統帝であつた愛新覺羅溥儀で、最初は執政、昭和九年に皇帝となつて帝政をしいた。しかし、実質的な権力は政府を牛耳る日本人官僚と、日本人官僚の任免権を持つ関東軍司令官にあり、満洲国は、日本の対満事務局を通じて日本軍の軍事的、行政的支配を受けていた(1)。このような背景もあり、満洲国を独立国として認めたのは、日本の他には、バチカン市国、サンサルバドルなど数カ国に過ぎず、その他のほとんどの国からは独立国家として認められていなかった。

日本が支配した一三年余の間に、多くの日本人達が大きな夢を抱いて、この(日本の生命線)、満洲へと移り住んでいった。満洲に移り住んだ日本人の中には、多くの日本文学者が含まれており、さらに、他の日本文学者も旅行者として満洲の地を訪れ、独特の(満洲文学)を創作し始めた。(満洲文学)の定義については、先行研究において諸説ある。まずは、この点を整理しておくこととする。

福田清人は「満洲文学」に限って言えば「民族の理念」を主題とした文学という(2)。一方、尾崎秀樹は、『満洲文学』というのは、

主として満洲国成立前後からその終焉までの、一五年戦争期の文学をさす(3)と述べている。また、川村湊は、「満洲を旅行し、その印象や感想や取材したことがらを紀行や創作として発表した文学者たち」、「満洲に移住し、移住者として生活しながら文学に携わった人々」、「満洲に生まれ、育ち、そして戦中、戦後において日本列島に引き揚げて来た人々、およびその家族」などによって書かれたものが、(満洲文学)であると述べた(4)。田中益三はそれに対して、「支配言語としての日本語文学」、「被支配者による被支配言語の文学」、「(日本語化)された被支配者の文学」と、満洲の植民地性に重点を置き、使用言語としての日本語の問題に着目して(満洲文学)を定義した(5)。また、天野真美は「昭和時代において『満洲』という歴史的事実としての植民地で書かれた日本人、中国人、朝鮮人、ロシア人、蒙古人といった様々な『民族』の書き手による様々な文学のうちに、日本人によって書かれた日本語文学」(6)といったように(満洲文学)を定義した。

このように(満洲文学)の定義は様々である。ここでは、(満洲文学)を満洲(関東州・満洲国)に在住する日本人による文学と定義する。本論文においては、長谷川濬の作品を視座として、当時の文学者たちが志向した(満洲文学)とは何かという問題について検討したい。

一、明治・大正期に描かれた〈満洲〉

日清戦争の時期に「満洲」をとりあげた作品はいくつかある。特に注目しておきたい作品として、国木田独歩の『愛弟通信』(7)が挙げらる。「支那大陸!、満洲の遠山眉の如きを見よ!」と、従軍記者として戦争に参加する独歩の目に映った満洲の壮大な風景は、古典漢詩の中で描写された浪漫的な中国像と重なっているように読み取れる。この重なりは、明治時代の漢文堪能な文学者たちに共通の、大陸に対する尊敬感から生まれたものといえよう。しかし独歩の満洲に対する観察は遠くから眺めるだけに留まり、彼の中国に対するイメージは中国の古典經典文章からもたらされた幻想を出ていない。一方、日本軍の少尉と、ある中国人老人との筆談を見た独歩は「自国の存亡より、寧ろいち早く自己の米櫃を懸念したる也」と慨嘆した。つまり、独歩が描いた中国像は分裂している。一方では、中国の大陸に詩的な描写を行って、憧れの気持ちを表した。もう一方では、中国民衆の愚昧を軽蔑している。日本人の中国蔑視は日清戦争以後よりはじまったと言われるが、独歩『愛弟通信』においても、明治維新以後の脱亜論の影響の下に大陸に赴いた日本文学者が見た中国大陆と、古典漢文の中で描かれた浪漫的なイメージとの間のギ

ヤップを明白に見て取ることができるのである。

日清戦争から日露戦争にかけて、この中国に対するイメージの分裂はより一層深化していった。森鷗外『歌日記』(8)では、「血の海や 枯野の空に 日没して」と満洲の赤い太陽は歌われていた。ここに見られる、戦士の血に染められた赤い夕日のイメージは、後の日本文学者に強い影響を与え、満洲の代表的なイメージとして定着していく。日露戦争の戦場としての満洲に対して、戦死者への哀悼と満洲大陸への憧れとが、この「血色の夕日」に集約されているのである。

日露戦争時の満洲を描いた作品は他にも、田山花袋『第二従軍征日記』(9)と『一兵卒』(10)、そして桜井忠温『肉弾』などがある。『一兵卒』においては、満洲の民衆を「蟻の群」とする把握があり、桜井忠温の『肉弾』(11)では、日本軍上陸地付近に集まってきた「幾百の土民」は「人か、獣か、彼等は底気味の悪い面構をして」と描かれている。桜井は中国人を単に愚民視、動物視するだけではなく、金銀だけに目が向く存在として見ている。これらの描写から読み取れることができるのは、当時の中国人からは、物質的なものの他に、節操とか理想といった精神的なものを見出すことは出来なかったという認識である。かつての孔孟の国への尊崇は影も形もなくなり、侮辱の視線を深化していく傾向があると考えることができ

る。

日露戦争後の作品では、夏目漱石『満韓ところどころ』（12）の中に「残酷な支那人」という描写を見出せる。「残酷な支那人」とは、痩せ馬に鞭を加える御者、老爺を負傷させた馬車であり、老爺の傷を黙って眺めている群衆を指している。叙述する漱石は、明らかに先進国知識人の意識に支えられている。街の汚さ、人々の「残酷さ」は、曲がりなりにも近代化を推し進めて行った日本の都会人漱石の目には厭わしいものとして映っている。貧相な満洲を鏡として映されたのは、近代化の途上にいる日本の姿である。〈満洲〉とは何かという問題を探ることよりも、それを鏡として映された〈日本〉とは何かということを漱石は重視していると言えよう。

大正から昭和にかけてのプロレタリア文学の中に描かれた満洲の人民像は、平林たい子『敷設列車』（13）によって確認できる。労働者に対する繊細な描写、中国人の生活を観照する作者の姿勢は、むしろ、プロレタリア階層の人たちをいかに立ち上がらせるかという問題を重視していたと考えられる。

これらの作品の延長線上に、満洲国成立後、「満洲」がどのように日本文学者の目に映ったのかをいう問題を考えていきたい。そのためには、満洲における文学活動の歴史を確認しておく必要がある。

二、満洲国における日系作家の活動

満洲における日本文学者の活動は、初期においてはほとんど関東州の大連を中心にした小規模な集団のもとで営まれていた。北川冬彦や安西冬衛らの詩雑誌『亜』が大正一三年一月に創刊され、昭和二年一二月まで続いた。さらに、昭和二年一月には、雑誌『大陸生活』が創刊され、文芸欄を広く読者に解放した。昭和五年には安西冬衛、瀧口武士、加藤郁哉、城小碓じょうおうすらの『塞外詩集』が刊行されている（第一集は昭和五年六月、第二集は昭和八年六月、いずれも自費出版であった）。のちに大連詩書倶楽部を主宰した城小碓は、昭和四年以来、『戎克』、『東行』、『新大連派』などの同人詩誌を刊行し、満洲における最初の文学賞であるG氏文学賞を創設した。また、八木橋雄次郎や三好弘光らの詩誌『鵠』が誕生したのは、昭和九年一二月である。

これらの小規模な文学グループは、満洲国成立後、本格的な同人誌の結成へと動きはじめる。昭和七年、大連において『文学』が創刊され、第三集以後は『作文』と改題した。この雑誌は昭和一七年末まで続き、『芸文』が創刊されるまで満洲における日系文学の有力な拠点としての役割を果たした。部数も二〇〇部から始まり、最盛

期には二〇〇部を超えている。

しかし満洲国の建設が進むにつれて、文化の中心は徐々に首都の新京へと移り始めた。昭和一二年八月、満洲文話会が大連で創設され、会員数は四三三名、九月には、機関誌として『満洲文話会通信』を創刊した。この会は、文化・文芸に関心を抱く在満文化人の総合団体であり、会員相互の連絡を密にし、親密さを図るとともに、満洲におけるあらゆる文化活動を積極的に助成・促進する目的で発足した。本部ははじめ大連におかれたが、まもなく新京に移転し、大興ビル三階の満日文化協会に事務所を置いた。この時期に、新京に移住した「日本浪漫派」の作家北村謙次郎は、満洲国弘報処の役人をしていた木崎龍と相談し、満日文化協会の杉村勇造の力添えもあって、『満洲浪漫』を創刊した。昭和一六年三月に満洲国弘報処によって「芸文指導要綱」が公布され、満洲国における芸文統制が一举に推し進められることになる。それに基づき、文話会の発展的解消の後、各種文化団体の一元組織「満洲芸文連盟」が発足した。『作文』は、芸文連盟が成立した年の一二月に終刊となり、『満洲浪漫』は昭和一六年春、春季作品集『僻土残歌』を刊行した以後、文庫本スタイルの「満洲浪漫叢書」を数点続刊しただけで自然消滅した。

満洲における文芸政策については、岡田英樹の研究がある（14）。

以下、岡田の研究に従って見てみると、昭和一五年ごろ、満系（中国人）の雑誌・新聞の編集者の間に、「八不主義の恐怖」がよく語られていたという。「八不主義」とは「時局に対し逆行的傾向を有するもの」、「国策の批判に当って誠実を欠き建設的ならざるもの」、「民族意識の対立を刺激するもの」、「建国前後における暗黒面の描写のみを目的とせるもの」、「頹廢的思想を主題とせるもの」、「恋愛情事に関しては刹那的、三角関係、貞操輕視等の恋愛遊戲、愛欲描写、変態性欲、或ひは情死、乱倫、姦通等を描写せるもの」、「犯罪の描写に当って殘虐或は深刻なるもの」、「媒酌婦、女給等を主題として歡樂街方面特有の世相人情のみ誇張描写せるもの」などに関する描写を全面的に禁止したものであった。これが検閲の基準だったとすれば、書き手や編集者たちに緊張感が生じて不思議ではないと考えられる。

弘報処の「芸文指導要綱」は政府の基本的文化政策を提示したものであり、上からの文化人の組織化、思想・文化統制につながるものとして、在満日本人の間でも大きな論議を呼んだ。満洲文学のさまざまな形態は、ひとつに収斂され、文化諸団体の統制・統合が急速に行われたのである。

満洲文学と日本文学についての論争は昭和一二二年頃から活況を呈しはじめ、昭和一二二年八月の『新潮』に掲載された浅野晃「国民文

学論の根本問題」に端を発し、昭和一五年あたりを頂点とする〈国民文学論〉の流行と一種パラレルな構図を形成している。『新潮』を主な舞台として展開されたこの論争の波紋は満洲にも及んだ。在満日本人作家は『満洲日日新聞』や『満洲浪漫』などの満洲での出版物において、「満洲文学の独自性」を強調した。すなわち、満洲文学が、単なる日本文学の延長、一地方文学にとどまることを否定し、日本から独立した、新しい独自の文学が創造されなければならないと主張したのであった。

三、〈満洲文学〉の研究状況

日本人の満洲体験を文学研究の側面から問い直し、これらの作品を含めた、文学活動を〈満洲文学〉という視角から考察したものとしては、尾崎秀樹『満洲国』における文学の種々相¹⁵が先駆的な研究をしている。この論文は、雑誌『文学』の特集「戦時下の文学」に発表され、その後、台湾文学や大東亜文学者大会についての論考を含めた一連の旧植民地文学研究の成果をまとめた単行本、『旧植民地文学の研究』(15)に収録された。この尾崎の著書は、いわゆる満系作家(中国人)による中国語の作品(日本語訳されたもの)も取り扱った総合的な満洲国の文学に対する考察であり、満洲文学及び

日本の旧植民地文学についての、初めての研究であった。『満洲浪漫』や『作文』をはじめとした同人雑誌と同人らの作品に触れると共に、彼らの満洲観を分析し、満系作家の満洲国についての考え方、感じ方と対照させていく方法は、その後の満洲文学研究の指針となった。また、大陸文芸懇話会、農民文学懇話会など、当時の〈大陸文学〉〈開拓文学〉と満洲の関係を明らかにし、プロレタリア文学、農民文学から大陸文学や開拓文学へ、さらに、植民地文学としての満洲文学へ至るという筋道を示したのである。

満洲文学が日本の昭和文学の異端児ではなく、むしろ近代文学の正当な継承者であることを主張したのが、川村湊『異郷の昭和文学』(16)である。川村は、満洲文学を日本の近代文学史、昭和文学史の中に正當に位置づけることからポスト・コロニアリズムの文学研究が始まることを示そうとした。

これらの研究に続いて、杉野要吉『昭和文学史における「満洲」問題』(17)がある。これは早稲田大学の大学院生が中心となって、近代文学に登場した「満洲」の問題を作品論、作家論としてまとめたものである。また、文学研究のリトル・マガジン『朱夏』では、満洲で発行された日本語文学の文献の整理や分類を行い、詳細な目録、年表作りを行うことで、この分野の基礎調査を進展させた。さらに、昭和文学会では機関誌『昭和文学研究』第二五号において、

初めての試みとして「昭和文学とアジア」という特集を組み、樺太、朝鮮、満洲、台湾、南洋の日本文学者の足跡を追う作業を行った。

このうち、満洲文学については、岡田英樹、田中益三、西原和海などの論文が収録されている。さらに、平成四年から刊行された岩波講座『近代日本と植民地』(18)では『文化の中の植民地』としてまとめられており、「満洲文学」を含む旧植民地文学と、植民地の文化、教育、芸術、芸能についての論文が収録されている。また、『批評空間』(福武書店)においても「植民地主義と近代日本」という座談会の記録が掲載されている。また山田敬三、呂元明編『十五年戦争と文学』(19)のような日本と中国が共同で編集を行った研究書も出版されている。

また、平成一三年一〇月に、植民地文化研究会が創立されて、毎年フォーラムと国際シンポジウムが行われている。研究会は「近代日本の歩みを地球的視点から、すくなくともアジア・太平洋の視野から見ていく」(20)という趣旨で開催され、『植民地文化研究』という機関誌を毎年発行している。その機関誌には、満洲文学に関する本や雑誌の情報が多く掲載されており、満洲文学を研究するための重要な資料ともなっている(21)。さらに、植民地文化研究会のメンバーによって『満洲国』文化細目』(22)という著書も出版されている。今後の満洲国研究に新たな手掛かりを与えるものとして貴

重である。

また、植民地文化研究会より規模は小さいが、満洲文学を中心に研究する『満洲国』文学研究会』が平成一三年四月に発足した。この研究会では主に近代中国東北部に生まれた言語文化(テキスト)を追跡しており、特に中国語によって書かれたテキストや中国語を母語とする作家を扱っている。機関誌『中国東北文化研究の広場』を不定期に発行している(23)。

植民地文化研究会(現在は植民地文化学会に改称)や「満洲国」文学研究会も含めて、現在行なわれている満洲文学に関する研究では、当時の満洲国に在住して文学活動に専念した文学者に関する研究や作品分析などは、いずれも十分に行われてはいない。本研究は、当時の満洲国に渡って、満洲国の内部からその時代を凝視した文学者の小説を分析対象とする。特に長谷川濬という、満洲大陸の風土に憧れた作家が執筆した作品を中心に、職務を持ちながら創作活動を行った一人の日本人インテリのまなざしを通して、満洲国の多様な側面を見出ことを目的とする。

四、長谷川濬に関する先行研究

明治三九年、北海道の函館で生まれた長谷川濬は、昭和七年、満

洲国に渡った(当時二五歳)。中学時代には漁船に乗りこみ、カムチヤツカ半島ペトロパウロスクで漁師の経験をしたこともある。船を下り、大阪外国語学校露語科に入学したが、卒業した直後、父の知人である大川周明の助力を受けて満洲国に赴いた。満洲国に渡ってから、当時の満洲国官吏の育成機関である(大同学院)で学び、建国運動を担う地方県参事官たるべく訓練を受けた。卒業後は満洲国外交部に入って領事館に勤めている。また、辺境調査の仕事に携わっている。

昭和一二年、長谷川濬は関東軍の辺境調査から新京に戻って、弘報処に配属された。しかし、まもなく満洲国政府の仕事を辞し、満洲映画協会に入った。昭和一三年、北村謙次郎や仲賢礼らと雑誌『満洲浪漫』を発刊した。その時から『満洲浪漫』を拠点にして、「烏爾順河」や「鷺」などの小説を発表し、様々な文筆活動を展開した。発表した作品には、いずれも満洲国建国に対する情熱と風土への憧れが底流している。濬は当時、満洲国の文壇の新星と呼ばれていた。彼の名が世に広まったのは、バイコフ「偉大なる王」を翻訳してからである。

昭和一五年、長谷川濬によって訳されたバイコフ「偉大なる王」は、『満洲日日新聞』に六月から十月にかけて連載された。翌一六年一月、満洲日日新聞社・大連日日新聞社から「虎」というタイトル

で単行本として刊行された。また同年三月、日本の文藝春秋社によつて「偉大なる王」と改題されて出版された。同書は日本内地でも人気が高く、ベストセラーとなった。

「偉大なる王」を翻訳することをきっかけとして、濬自身も満洲の密林、虎、自然風景により一層の関心を持ち、満洲国の風土を描こうと決意する。昭和一七年、コサツクの小説を執筆するために、満洲国の大興安嶺の西麓の三河^{さんか}地方へ取材に行くことを希望して、満映の理事長である甘粕正彦に願ひ出た。

濬は満洲国の中心地である新京を離れ、北方へ出掛けた。現地人と同じように、大きく分厚い毛皮外套と長靴に身を包み、人間か動物か区別出来ないような格好をして辺境へと旅立った。厳寒と戦いながら、彼は夢を追いかける快感を味わっていたと推察できる。三河での体験を紀行文「或るマクシムの手記」などの作品に記している。

長谷川濬に関する先行研究はあまり多くない。この作家に関する参考書として挙げられるのは、川崎賢子『彼等の昭和』(24)と最近出版されたばかりの大島幹雄『満洲浪漫——長谷川濬が見た夢』(25)である。川崎賢子の著書は、長谷川濬の父親の長谷川淑夫、兄の海太郎、湊二郎、弟の四郎を含めた、長谷川一族の経歴についてまとめている。同書第四章には、長谷川濬に関する情報が掲載されてい

る。また、大島は、長谷川濬が渡満する以前の経緯、渡満した際の経験、戦後引き揚げた後の生き方について詳しく紹介している。

これら二著が著される以前の先行研究としては、例えば、尾崎秀樹『満洲国』における文学の種々相¹⁾や川村湊『異郷の昭和文学』の中で、長谷川濬に触れることはあった。しかし、いずれも作品を紹介する程度に留まっていた。一方、川崎や大島の著書においては、長谷川濬の経歴について詳しく紹介されているものの、作品についての分析はほとんどなされていない。本研究は、これらの先行研究をふまえて、長谷川濬が満洲国で発表した作品に着目し、それらに反映されている満洲国の多様な側面を再検討する。

本研究は三部で構成している。第一部は、官吏を務めた長谷川濬が、満洲国内部ならではのまなざしで観察したさまざまな問題を、どのように小説に取り入れたのかという問題について検討する。主に三章に分けて論を展開する。

長谷川濬は渡満してからすぐに、現地の少壮官僚を育成する大同学院に入っている。そして、卒業後、大同学院を背景にした小説「烏爾順河」を執筆した。第一章では、小説「烏爾順河」を取り上げ、「烏爾順河」に描かれている〈恋愛〉と〈建国〉の様相を見ていく。

そして、当時の大同学院の実態と対照しながら、満洲国初期の建国運動が「烏爾順河」にどのように取り入れられているのかを検証す

る。

国境調査の仕事に参加した長谷川濬は、満洲国とソ連の国境となっている河を背景にした小説「蘇へる花束」を執筆した。第二章では、長谷川濬が国境問題をどのように考えていたのかを探ってみる。

「蘇へる花束」は、二人の子供が相次いで国境の河で遭難する物語である。小説を通して、一本の河が〈自然の河〉と〈国境の河〉という二つのイメージを持つことを見ていく。自然の河であると同時に国境の河としての厳しさ、人間のテリトリー争いが自然に加えた社会秩序の残酷さを、作品を通して検討する。

第三章は、満洲国の民族問題に焦点に当て、小説「寛城子」を分析する。作中に描かれた民族問題を同時代の資料と照らし合わせながら考察する。満洲国のスローガンとして〈民族協和〉が唱えられたが、建国運動をめぐる日本人と中国人の間にどのような齟齬が存在したかについて検討する。

第二部は長谷川濬が目指す〈満洲文学〉とはどのようなものかを検討する。二章に分けて論を展開する。昭和十五年、バイコフ「偉大なる王」を翻訳することによって、長谷川濬の名が世間に広く知られるようになった。第一章においては、長谷川濬がどのように「偉大なる王」と出会い、どのようにこの作品の翻訳に取り組んだのかを検討する。「偉大なる王」の翻訳を通して、長谷川濬がさらに満洲

の野性味溢れる大自然に憧れ、まもなくコサツクの小説を書くために辺境へ赴く、その動機を理解することを目的とする。また、翻訳を通して長谷川が動物文学に興味を持ち、戦後まで動物に関わる文学作品を執筆し続けたことを資料によって跡づける。

第二章は、小説「海と湖と人間と」を採りあげ、在満作家たちが直面した文学状況を具体的に見ていく。小説の内容と当時の資料を照らし合わせながら、満洲国の中に存在する（専業作家がいない）問題や（原稿料が安い）問題について考察する。長谷川濬は当時の創作環境の困難を乗り越え、満洲国の自然の中に溶け込んだ独自の満洲文学を作ろうと努めた。その願望が作品の中にどのように取り入れられているのかを明らかにする。

第三部は補論として、長谷川濬と同時代の作家である日向伸夫を取りあげる。日向がどのように満洲国の民族問題を取り扱ったのかを検討する。日向伸夫が執筆した小説「第八号転轍器」は中国人を主人公とした作品である。当時の資料と「第八号転轍器」を対照しながら、作者の日向が中国人の立場に身を置いて、北鉄（中東鉄道）譲渡による列車ダイヤの変更や鉄道勤務の内実の変化、あるいは従業員の問題などを作中に取り入れていく様相を検討する。満鉄底辺の中国人社員を主人公とした点をめぐって、異民族に対する日向の思想の在りようを考察する。

また、長谷川濬の年譜は『彼等の昭和』『満洲浪漫——長谷川濬が見た夢』『作文』第九六集、長谷川濬追悼号（26）などに掲載されている。ただし、十分なものとは言えないので、今回、新たに判明した事実を大幅に取り込んだ年譜を附録として掲載する。

付記

序論をふくめて、長谷川濬に関する履歴は『作文』第九六集（長谷川濬追悼号、作文社、昭和四九年八月）、『彼等の昭和』（白水社平成六年）、『満洲浪漫——長谷川濬が見た夢』（藤原書店 平成二四年）などの資料に拠る。

なお、調査にあたり実に多くの方々の協力を得た。とりわけ西原和海（満洲文学研究者・文芸評論家）、大島幹雄（早稲田大学非常勤講師）、及び長谷川濬のご次男・長谷川寛には多くの貴重な資料をお貸しいただいた。また神戸大学附属図書館人文図書館の方々には何度もお世話になった。記して深謝申し上げる。

【注】

1. 川村湊『文学から見る「満洲」——「五族協和」の夢と現実』（吉川弘文館 平成一〇年）。

2. 福田清人『大陸開拓と文学』（満洲移住協会 昭和一七年）。
3. 尾崎秀樹『満洲国』における文学の種々相（『旧植民地文学の研究』勁草書房 昭和四六年）。
4. 川村湊『異郷の昭和文学』（岩波書店 平成二年）。
5. “日本語化”された「満洲」の作家／日中文学シンポジウム「近代日本と“満洲”」報告集追加資料（日本社会文学会 平成五年七月）。
6. 天野真美「変容する『文学』——『満洲文学』論争をめぐって」。杉野要吉編集『昭和文学史における「満洲」の問題』（叢刊『文学史』研究第一 平成四年七月）に拠る。
7. 国木田独歩の『愛弟通信』は明治二七年一〇月二一日〜明治二八年三月一二日の『国民新聞』によって登載された。本文の引用は岩波書店昭和一五年三月版による。
8. 森鷗外の『うた日記』は明治三七年より同三九年までの日露戦争従軍中に制作された。『心の花』『明星』などに発表した作品もあり、妻子・兄弟、知友あてに送ったものもある。本文の引用は岩波書店昭和一五年版による。
9. 田山花袋『第二従軍征日記』（博文館 明治三八年一月）。
10. 田山花袋「一兵卒」明治四一年一月『早稲田文学』に初出。
11. 桜井忠温『肉弾』明治三九年四月、丁未出版社より刊行。
12. 夏目漱石『満韓とくるところ』明治四二年一〇〜一二月、「朝日新聞」に初出。
13. 平林たい子『敷設列車』（日本評論社 昭和四年二月）。
14. 岡田英樹『文学にみる「満洲国」の位相』（文研出版 平成二年）。
15. 尾崎秀樹『旧植民地文学の研究』（勁草書房 昭和一六年）。
16. 注4に同じ。
17. 杉野要吉『昭和文学史における「満洲」の問題』（叢刊『文学史』研究第一〜第三 平成四年七月〜平成八年九月）。
18. 大江志乃夫『近代日本と植民地』（岩波書店 平成四年一月）。
19. 山田敬三、呂元明『十五年戦争と文学』（東方書店 平成三年二月）。
20. 本会機関誌『植民地文化研究』創刊号（平成一四年七月）所載の「創刊の辞」に拠る。
21. 植民地文化研究会編。平成一四年六月に創刊され、以後、毎年七月に刊行。本年（平成二四年）までに第一一号まで刊行されている。
22. 『満洲国』文化細目（不二出版 平成一七年）本書は、満洲国で出版された書籍四六〇点、及び同国居住者によって書かれ、日本で出版された書籍一〇五点についての個別の書誌と解題の集大成である。
23. 平成一九年九月に創刊され、平成二二年三月に第二号、平成二四年八月に第三号が刊行された。
24. 川崎賢子『彼等の昭和』（白水社 平成六年）。
25. 大島幹雄『満洲浪漫——長谷川瀧が見た夢』（藤原書店 平成二四年）。
26. 『作文』第九六集、長谷川瀧追悼号（作文社 昭和四九年八月）。

第一部

小説から見える満洲国

第一章

満洲国における恋愛と建国

―長谷川濬「烏爾順河」をめぐる―

序

満洲国が建国されてから一三年余、多くの日本人が満洲に赴き、そこで文学活動を行った。長谷川濬はその中の一人である。彼は昭和七年五月に満洲に渡って、すぐ満洲国資政局自治指導部訓練所で地方県参事官たるべく訓練を受け、大同学院を一期生として卒業した。その後外交部に入りチタ領事館に勤務したが、間もなく弁事処通訳官として綏芬河に赴任した。同地で三年間過ごしてから新京に移り、弘報処勤務を経て満洲映画協会に入社した。昭和一三年北村謙次郎、仲賢礼らと雑誌『満洲浪漫』を創刊する。当時の文芸雑誌『満洲浪漫』(1)と『作文』(2)を中心に、長谷川濬は多くの文筆活動を行ったが、長谷川の名が広く知られるようになるのは、昭和一六年にベストセラーとなるバイコフの『偉大なる王』を翻訳してからである。戦後は通訳などの仕事をしながら同人誌に詩・エッセイなどを寄稿した。

本稿で問題とする長谷川濬の小説「烏爾順河」は、初出が『満洲作家選集 満洲浪漫特輯』(昭和一四年)(3)。後に『満洲国各民族創作選集』第一巻(昭和一六年版)(4)に収録された。また昭和一

九年に「烏爾順河」を書名として、数篇を加えた短篇集が刊行された(5)。さらに戦後、『昭和戦争文全集1 戦火満洲に挙がる』(昭和三九年)(6)にも収録されている。

この作品は次のように評されている。同時代の満洲国で活躍した作家緑川貢は「これ『烏爾順河』を読んだとき、私は北天に新星の誕生が近いのを感じた。文芸時評で推賞した」(7)と述べている。そして同じ満洲国にいる日本人の作家である大野沢緑郎も「傑作『烏爾順河』とバイコフの『偉大なる王』(8)が、満洲での彼の文学の二大支柱だったことは、何人も首肯するところであろう」と評している。さらに、『満洲浪漫』をどう評価するかという座談会において、西田勝は『烏爾順河』、これなどは一番、この雑誌の意図を体現している作品のように思います」と評している(9)。また、緒方昇氏は『日本未来派』第二号(10)所載、「逸見猶吉」という追悼文の中で長谷川濬の作品集『烏爾順河』に触れ、「これも立派なもので、満洲文学の最高線をゆくものである」と絶賛した。

以上のように「烏爾順河」の従来の評価をまとめることができる。「烏爾順河」に関する先行研究として、川村湊の『異郷の昭和文学』(11)や川崎賢子の『彼等の昭和』(12)の中に登場人物の三角恋愛について述べた記述がある。しかし、作品論としてこの一篇を正面から論じているのではない。本稿ではこの小説を取り上げて、満洲国建国初年に渡満した若者の間で盛り上がった〈建国精神〉とは何かについて、満洲国の若手官吏を育成する大同学院の動向と対照しながら探してみたい。また、当時の時代精神がどのような手法で小

説の中に取り入れられたのか、長谷川濬が志向した文学とはどのようなものであったかを検討していきたい。

一、友情・愛情と建国運動

「烏爾順河」は「建国」の理想に燃える〈私〉と竹村が先輩天海の義妹である信子に恋をする話を主軸として展開する小説である。二人の青年が同じ女性に恋することによって生じる、様々な心理的葛藤が描かれている。以下に梗概を記す。

満洲国建国初年（昭和七年）、〈私〉は渡満して、首都・新京の官庁に務める。同じ職場の一年先に渡満した竹村と出会って、友達になった。その後、先輩の天海の義妹である信子を見初め、彼女に愛情を覚える。信子に対する気持ちが高まるにつれて、〈私〉は竹村と信子の関係が気になり、竹村のことを恋のライバルと考えるようになった。竹村は〈匪賊〉を討伐するために地方に赴任し、〈匪賊〉との戦闘で死んでしまう。数ヶ月後、信子は竹村を追って自殺した。

に酒をすすめた」。その動作が「友情に溢れ、温かく、学生らし」と描写されている。二人のお互いに対する好感は相性が良いかどうかの問題ではなく、満洲国建国に対する共同的な思いを持つところから生まれた感情である。しかし、信子という女性の登場によって、二人の友情に亀裂が生じてくる。〈私〉の竹村に対する態度の変化は以下のように描写されている。

三年後、〈私〉は公用で満洲国の辺境ホロンバイルへ赴く。その時、竹村の憧れた烏爾順河を通過し、竹村を思い出して、「荒涼」を感じるといふ小説である。

まず、作中の〈私〉と竹村と信子の間の感情の変化を見てみると、〈建国運動〉という要素が登場人物の感情を左右していることが分かる。

作品の冒頭部において、〈私〉と竹村は初対面にも関わらず互いに友情を覚えていた。竹村に対して〈私〉は「青年同志の直感力で私は彼に並々ならぬ好意を感じた」。先輩の天海の家から帰宅する道で「私は竹村のたくましい肉体や、革新的な意見に魅力を感じ、渡満した第一の友として彼を信頼出来る男と信じた」。一方、竹村は「真正面から私に向つてき」て、出会いの翌日、速達の手紙で「率直に私との交友を喜び、満洲国の発展の為に私との交際が固く、且つ大きく、広くなる事を信じたい」と、〈私〉への友情を示した。天海の家で〈私〉の歓迎会を行ったとき、竹村は「器用にかんをつけて私

私は竹村が好きだ。男性として信頼し得る友だ。しかし信子さんの問題に限り、別個な存在だ。あ！何たる冷然たる、無気味な彼の態度！石のような舌！（中略）

徹底したエゴイストであらうか、鋼鉄の鎧を着た男であらうか、私には判断出来ないが、信子さんに関する限り、私に取っては決して味方ではなく敵である。これだけは確然たる判断であつた（13）。

友情と愛情の間の矛盾を意識したのは〈私〉だけではなく、竹村も同様であった。

俺は君に心から友情を感じるし、君に踏まれても何とも思はない、だが、信子さんだけはどうしても渡せない。

右のように、竹村は地方へ赴任する前に〈私〉に自分の気持ちを打ち明けた。

満洲国に渡って満洲の建国運動に身を捧げた二人の青年は共に同じ理想を持つことによって深い友情で結ばれた。しかし同時に一人の女性に恋心を抱くことによって、築かれた友情に破綻が生じてくるのである。

それに対して恋の相手である信子の態度はどうであろう。作中では、信子の二人に対する態度の描写はない。しかし、天海の家での宴会の場は注目される。そこでは、竹村が満洲の自然をイメージした自作の歌を披露する場面があり、その歌に対して信子が次のように反応するのである。

歌が終わった時、天海さんは拍手して竹村に君の歌はセンチだと云った。信子さんは単なるセンチではない、大きな願望を想像させますと云った。竹村は我が意を得たりとばかりに同意した。

先輩の天海は竹村の自作した歌を「センチだ」と評した。それに対して、信子は「単なるセンチではない、大きな願望を想像させます」と竹村の感情を十分に理解し、彼の歌を高く評価した。その「大きな願望」とは、竹村が言った「日本内地で感じられない、巨大な地貌の中に自分が溶け込んで行つて、理想の国を作るという願望と結びついているのである。

竹村は「××県」に赴任した一週間後、自ら匪賊（14）討伐に赴き、不意に包囲されて殉職したと報道された。竹村の死後、「死はすべてを浄化させる。恋も憎しみも届かない絶対の意志が私を抑へ付けた」と、〈私〉の心情描写がある。つまり、信子への恋心、三角恋愛から生まれた竹村への憎しみなどのような個人的な感情は、建国運動のため犠牲となった命の前ですべて微塵となったわけである。「恋も憎しみも届かない絶対の意志」とは、竹村の「匪賊」を討伐する行動によって示された〈献身的な建国精神〉と理解できよう。満洲国の治安と県自治の仕事のために、竹村は最愛の信子を新京に残して単身赴任した。竹村は自分だけを守る生活と「挺身赴難」（15）の建国運動を比べ、後者を選んだ。竹村の死は満洲国建国のためである。竹村にとって、建国精神は個人の感情より優位にあった。そして、竹村の死は〈私〉を「浄化させた」。つまり、個人的な感情と比べ、建国精神を優先するべきだと、竹村の死は〈私〉にあらためて考えさせたのである。この建国精神は、私の信子に対する恋心を抑えつけたのである。信子は竹村が死んだ一ヶ月後、自宅で自殺し

た。信子は自殺することにより、建国のために身を捧げた竹村への愛情を示したのである。

以上述べたように、登場人物の恋愛や友情に関する事柄がすべて「建国精神」という基盤の上で誕生したものであり、物語の構造、人物の関係などいずれも「建国精神」の影響下にある。

二、建国精神と大同学院

「烏爾順河」に底流している「建国精神」とは何か、この問題を考えるために長谷川濬の履歴を踏まえながら、満洲国の建国運動と密接な関係を持つ「大同学院」について考察していきたい。

長谷川濬は、満洲国成立の昭和七年に大阪外国語学校を卒業して、同年五月一五日に満洲に渡った。渡満した直後、満洲国資政局訓練所に入り、地方県参事官となるための訓練を受け、大同学院第一期生として卒業した。資政局訓練所の前身は自治指導部自治訓練所であって、後に資政局訓練所から大同学院へと改名した。

大同学院が設立された昭和七年から昭和二〇年までの間、一期から一九期まで約四千名の学生が学院の訓育を受けた。時代に応じて大同学院の教則も変化している。大同学院同窓生の記録をとりまとめた本『碧空緑野三千里』（16）の記述によると、大同学院は主に四つの時代に分けることができる。一番目の建国草創時代（昭和六年（昭和八年）は、第一期生と第二期生が入学した時期である。主として治安と民生の安定のため、「挺身赴難」、「治乱興産」を唱導した。

二番目の整備時代（昭和九年（昭和一二年）は、第三期生から第八期生までが入学した時期である。「法制企画」、「実務処理」を重視して満洲国の財政、法律、行政の整備に必要な人材の養成が成された。三番目の発展時代（昭和一三年（一六年）は、第九期生から第十三期生までが入学した時期である。「分業動員」、「総力集結」を目標とし、高等文官制度を施行し、多くの技術者を採用すると共に、特殊機関の人材をも入学させた。四番目の戦争時代（昭和一七年（昭和二〇年）は、第一四期生から第一九期生までが入学した時期である。「戦力増強」のため、日本の学生を動員し、軍隊に入るものが多かった。

長谷川濬は大同学院の第一期生であった。大同学院の卒業生の中で、文学上の仕事に従事しているのは、第四期生の麻川透（本名・浅川淑彦）、第五期生の別役憲夫などがある。さらに、同じく満洲文壇で活躍した女性作家である牛島春子の夫、牛嶋晴男は大同学院の四期生であった（17）。

これまで確認してきたように、大同学院は様々な改組を経て成った機関で、全体像を把握することは難しい。ここでは「烏爾順河」と大同学院によって形成された思想との関係を検討するために、特にその前身である「自治指導訓練所」と「資政局訓練所」を見ていくこととしたい。

自治指導訓練所は自治指導部から派生した組織である。満洲事変直後の昭和六年一月に自治指導部は発足した。満洲事変によって満洲各県政府をはじめとして警察などの治安組織が混乱し、無政府

状態に陥った現状を改変するために設けられた組織である。

自治指導部の本部は奉天城内同沢女学校に設立された。自治指導部条例第一条に「善政主義に拠り、各県の県政を改善し、完全なる地方自治制の確立に任ず」（18）とあり、その具体的な方法としてまず省中央（奉天）に自治指導部を設け、自治訓練所を付設して、自治の執行に当たるべき人材を教育訓練し、各県に派遣する。県においては、従来の県政府あるいは治安維持会を廃して、県自治指導委員会及び県自治執行委員会を設ける。指導委員会を県自治の指導監督機関、執行委員会を県自治の執行機関とする。本部の人事については、とりあえず満鉄沿線附属地に居住する先覺的居留民の国策研究推進団体である満洲青年連盟（金井章次理事長）と満鉄の中堅職員が集まりである大雄峰会によって推薦された人達が中心となって、満洲国の自治の推進を当面の目標として活動を開始した。

昭和七年七月五日、満洲国の自治県制及び県官制が公布され、県自治指導員はすべて参事官として県公署の組織の中に入り、満系の県長を補佐することに改められた（19）。つまり県の治安や宣撫の仕事をして、県政に直接に参与する。

自治指導部発足当初は青年連盟・雄峰会等からの推薦者を選抜派遣することができたが（20）、当時自治指導員を派遣できた県は、「昭和七年三月一日の時点においても、奉天省を中心に僅かに三七県に過ぎなかった。全国に指導員を派遣するとすれば数百名の指導員を必要」（21）とする、と指導員の人数が足りないことを示している。自治指導員を育成するため、自治指導訓練所が誕生する。自治指導

訓練所の第一回学生募集時、所長の中野琥逸の指導私案には以下のように述べられている。

自治指導部訓練所は、その制度上自治指導部の派生的存在となりと雖も、多数の指導員を実質的に統制する自治指導部の事務は、実際上指導員訓練所を活用することにより初めて実効を得るもの多かるべし。されば自治指導部と自治指導訓練所とは、実際については一身体同体の關係に置くを要す（22）。

この指導私案によれば、自治指導訓練所は実質的には自治指導部と一致する。そして、自治指導員の精神的な拠り所としての役割を荷っていたことがわかる。自治指導訓練所は昭和六年一月第一回訓練生の公募を行った。その結果、志願者は日系九八名、満系五五名であり、採用者は日系一二名、鮮系一名、満系七名、計二〇名であった。昭和七年に入り、満洲国建国運動高揚のため、一方には上意下達、自治指導部布告第一号の精神を全満に徹底するため、もう一方には下意上達、民意の存するところを問うために、自治指導部員全員が総出勤して全満に建国運動を展開することとなった。

自治指導員は「自治指導部布告第一号」と「自治指導服務心得」を身に付け、命ぜられた各県城の混乱の中に乗り込んでいったのである。この「自治指導部布告第一号」とは笠木良明によって立案され、于冲漢の決裁を得て十一月一日遼寧省下に広く宣布したものである。「自治指導部ノ真精神ハ天日ノ下ニ過去一切ノ苛政、誤解、

迷想、紛糾等ヲ掃蕩シ竭シテ極楽土ノ建立ヲ志スニ在リ」(23)と、その冒頭に建国の基本理念を明示し、善政を施すことによる楽土建設を目的とした点を明らかにしている。次に「住民ノ何国人タルヲ問ハス胸奥ノ大慈悲心ヲ喚発セシメテ信義ヲ重シ共敬相愛以テ此ノ画時代的天業ヲ完成スヘク至誠事ニ当ルノ襟懷ト覚悟アルヘシ」と、指導員の根本的心構えとも言うべき、大慈悲心と、民族の協和に至誠をもつて当たるべしと説き、更に「指導部ハ前途幾重ノ難関ヲ前ニ大理想ノ実行者トシテ無我ノ一道ヲ万進ス。(中略)本部ヨリ漸次各県ニ指導員ヲ派シ善政ヲ行フ、県民ハ安シテ其ノ指導ヲ受クベシ」と、どんな困難も障害も物ともせず、一途に大理想実現の実行者たるべしと教えて、各県民に指導員派遣の趣旨を明らかにしているのである。この「自治指導部布告第一号」にしたがって、当時多くの指導員は命を失うことも余儀なくされ、そのため犠牲者の数も甚だしかった。

昭和七年三月一五日、満洲国が成立すると、自治指導部は使命を完遂したことにより解散と決定、満洲国国務院資政局がその任務を継承することになり、自治訓練所は資政局訓練所と改称された。資政局訓練所は、自治指導部自治訓練所の施設、学生を引き継いだものであり、その設立の趣旨、教育方針については変わることはない。ところが政局訓練所はわずか四ヶ月しか存続しなかった。七月五日、資政局の解散により、同訓練所は大同学院に引き継がれた。初代院長は駒井徳三である。駒井徳三は大同学院の設立について次のように述べている。

南嶺に起居する青年諸君は青春の意気に燃え経綸雄図を描いて遙々朔北満洲までやって来た人々である。彼等を無下に帰国せしむることは私の本意とするところではない。私はなる可くその全員を採用すべき旨を予め内命してをいた。かくしてその青年諸君を訓練する学舎を大同学院と命名し、それ等青年諸君が将来満洲国政府の中央及び地方の官吏となるに必要な訓練を與ふることを約束し、同時に私自ら大同学院の院長に就任し、学生監として藤井陸軍大佐を招聘して直接その訓育に当つて貰ふことゝした。

駒井徳三によると、当時の大同学院は資政局訓練所の学舎をそのまま使用し、もと訓練所の訓練生をほぼ全員採用し、大同学院一期生とした。資政局の廃止から大同学院創設への移行の経緯については、笠木良明と駒井徳三の葛藤から見える「精神主義と法治主義との不融合」、「地方自治と中央集権との重点のおき方の相違」(24)が存在するが、本論ではこの問題に立ち入らない。ここでは、建国初年、自治指導訓練所の青年の中で盛り上がった、献身的に満洲国の地方へ赴く、その精神に関しては始終一貫したものであったことを確認しておきたい。

「自治指導部布告第一号」と「自治指導服務心得」を携帯して、若手参事官は満洲国の首都を離れ、各地の県に赴いたが、建国運動の中で様々な困難に出会った記録が残っている。当時の自治指導部

鉄嶺県の指導員の体験は以下のように述懐されている。

私は指導員の石垣良隆とともに鉄嶺県入りを命ぜられ、満人と苦楽をともにすべきだ、との考えで、二人とも満人服を着換えて赴任した。駅には出迎人もなく、まっすぐ県公省に直行した。折から開会中の治安維持会に出席して自治指導部の任命書と布告を一同に示した。その席にいた三名の日系住民代表はこちらを無視してなんら反応を示さない。頼るところは布告第一号の精神と指導員服務心得の二つだけで一切は未知の世界である(25)。

右の資料によれば、自治指導員達は何も具体的なことが分からずに県に派遣され、どのように県政を指向するのか、誰が教え、誰が指導するのでもなく、指導員自身が県民のことを考え、措置を講ずるよりほかに道はなかったことが分かる。資料に示されているように、指導員たちが頼れるのは指導精神の原典として与えられた「自治指導部布告第一号」そして「自治指導員服務心得」だけであった。また、昌図県に派遣された自治指導員は次のような記述を残している。自治建設に挺身し、建国運動に殉ずるという気風を行間に垣間見ることができる。

一月五日昌図県入りを命ぜられ、自治指導部布告の一卷を手渡された。その内容を一読して天与の使命感に感激、勇躍死

地に赴く決意を固めた。(中略)

私は着任以来「服務心得」を復誦しつつ、何よりもまず一日も早く治安を回復し、如何にして民衆を帰農させるかについて考え続けた(26)。

では、ここまで整理してきた大同学院の性格をふまえて作品を検討してみたい。まず、主人公竹村と〈私〉の造形は当時の県に赴く〈参事官〉をモデルにして描かれたのではないかと想定できる。竹村と〈私〉は共に官庁に所属し、先に渡満した天海の下で働く。〈私〉といるとき、竹村はよく地方の治安や、宣伝工作について熱心に語っていた。竹村の発言には、「地方へ出るつもりだ、満洲国は県にはいらなくては実態が掴めない、中央は抽象的なイデオロギーにとらはれ易い」といったものも認められる。竹村の「地方へ出る」、「満洲国は県にはいらなくては実態が掴めない」という考え方は、初期の大同学院が唱えた「挺身赴難、治乱興産」の精神に類似している。また、渡満した青年の情熱は竹村の送別会での次のような〈私〉の心理描写によって示されている。

満洲国にはすばらしい仕事があるんだ。日本内地の青年が夢想不到にしない血涙で成し遂げねばならぬ問題が山積してる。渡満した日本青年はその激しい渦の中へ自ら飛び込んで行くのだ。竹村だつて日本に居るならば、善良な小市民として、ささやかな家を持ち、自分だけを守るサラリーマンになつていたかもし

れない。満洲国と云ふ新しい歴史的事実に来てこそ、新しい眼を開き、その知性を大きく広げ、血涙と情熱の坩堝へ飛び込んで行くのだ。これは新日本の武士道であり、アジアの全体を貫く日本の悟性であらうと私は思つたし、そんな事を私は話した。竹村が心から私に同意した。

右の引用文には、「日本内地の青年が夢想だにしない血涙で成し遂げねばならぬ問題」に対して、「日本の青年はその激しい渦の中へ自ら飛び込んで行く」べきだという考え方が示されている。ここには、自治指導部が唱えた「天日ノ下ニ過去一切ノ苛政、誤解、迷想、紛糾等ヲ掃蕩シ竭シテ極楽土ノ建立」をするために、「各県ニ指導員ヲ派シ善政ヲ行フ、県民ハ安ンシテ其ノ指導ヲ受クベシ」という思想を垣間見ることができる。また、竹村は送別会で、「元気に溢れて見るからにぴちぴちして」いて、「平気な顔で死ぬかも知れない」と淡々に言つた。竹村の人物造形を通して、自治指導部布告を渡され、それを「一読して天与の使命感に感激、勇躍死地に赴く決意を固め」た自治指導員の姿を連想できよう。

三、建国精神と風土憧憬

「烏爾順河」は満洲国の参事官をモチーフにして、満洲国の建国運動を描いた小説である。この作品には、地方へ赴いて自治を実現するという建国の情熱が漂っていると同時に、満洲の風土に対する

憧れも散在している。風土への憧れは主に〈烏爾順河〉とのイメージによつて示されている。以下、本文の中に出てくる〈烏爾順河〉（ウルシュン河）のイメージを整理しておく。このことにより、作中に秘められた風土への憧憬を抽出してみたい。

タイトルのほかに文中においては三箇所の記事がある。一箇所目は〈私〉の歓迎会における竹村自作の歌の中にある。

竹村は自作の歌を太いバスで歌つた。蒙古の沙漠や、ウルシュン河や、アジアの民を思ふと云つた意味で、高校の寮歌のやうな節でもあり、或節廻しはもつと憂鬱であつた。

歌詞は記されていないけれども、〈私〉の視点から竹村の歌の内容が間接的に描かれている。「蒙古の沙漠」や「アジアの民」と共に〈ウルシュン河〉は歌われており、高校の寮歌よりも憂鬱な節回しであったという。そこに大陸ロマンチズムの匂いが窺える。しかし、別の箇所は、この歌には、ロマン（夢）を追う情熱と、それに伴う困難を乗り越えようとする悲愴感がまざりあっているようである。

二箇所目は〈私〉が満洲国官庁に採用され、その祝賀会における竹村の歌の中に出ている。

天海さんは私達に何か歌へと云つた。竹村が坐り直して、例の自作の歌を太いバスで歌つた。ウルシュン河の一章句を歌ひ出すとき、私は何となく広漠たる大陸の涯を想見して民族的な不

思議なノスタルヂャーを感じてならなかった。日本で感じられない巨大な地貌の中に自分が溶け込んで行くやうに感じた。竹村が歌ふ間、信子さんは身動きもせずに聞いてゐた。ふくよかな指が固く握られてゐるのを私はじーと見つめてゐた。その指が妙に私には暗示的であつた。歌が終わつた時、天海さんは拍手して竹村に君の歌はセンチだと云つた。信子さんは單なるセンチではない、大きな願望を想像させますと云つた。竹村は我が意を得たりとばかりに同意した。私は竹村の肉体やバスに羨望を感じた。

ここでは、〈私〉が〈ウルシユン河〉に関する歌の章句を聴いて、「広漠たる大陸の涯」、「民族的な不思議なノスタルヂャー」、「巨大な地貌の中に自分が溶け込んで行く」と感じた。竹村の歌は広漠の風景を歌つただけではなく、聞き手に日本民族のノスタルヂャーを喚起させ、満洲の自然との一体感を感じさせるのである。また、信子に〈大きな願望〉を想像させるのである。

三箇所目は、小説の最後の場面である。〈私〉が自分の目で見た風景として登場している。次のように描かれている。

竹村と信子さんが死んでもはや三年たつた。私は夏に公用で蒙古へ旅立つた。アムクロを経てタラガンホアを過ぎ、バルガ草原を横断した。午後のうす陽が、淡く草原にそそぎ、道ない草原を自動車で疾走してゐる時、突然運転手の露人が左手をか

ざして私に呼びかけた。

「レカー・ウルシユン！」

「ウルシユン？」

私は左側を眺めた。鈍く光つた河が草原の彼方にうねうねと流れてゐた。大陸の河だ。

「ウルシユン河」……私は竹村を思ひ出した。あの太いバスを……。あの声が自動車の後をつけて来る。

私は振り返つた。広漠として人煙のない大草原が悲しい風の音にひろがり、荒涼たる空の涯へ連なつてゐた。

小説の最後、実際に満洲国の辺境に流れている〈烏爾順河〉が描かれた。歌の中のイメージと対照してみると、「荒涼たる」雰囲気溢れる。実際の〈烏爾順河〉を眺め、私は竹村の太いバスを思い出し、三年前のことを思い出したのである。

竹村が実際に〈烏爾順河〉に行つたのかどうかは小説の中に明言されていないし、自作の歌詞の内容についても具体的に書かれていない。作者はあえて「烏爾順河」のイメージを直接的に描かず、歌を聞く人の感覚によつて描写したのである。「アジアの民を思ふ」と云つた意味、「広漠たる大陸の涯を想見して民族的な不思議なノスタルヂャー」、「日本内地で感じられない、巨大な地貌の中に自分が溶け込んで行くやうに」と〈私〉は歌を聴いて感じた。信子も「單なるセンチではない、大きな願望を想像させます」と言つて、「目に涙が湧いて」いた。小説の最後にウルシユン河の姿が初めて登場し、「草

原の彼方にうねうねと流れてゐる「鈍く光った」大陸の河であると描写されている。そして河を眺めながら、「私」は竹村の「太いバス」を連想するのである。このような描き方によって、「烏爾順河」のイメージと竹村のイメージが重なってくる効果がある。

作者があえてこのように描く意図とは何か、小説の中にある「烏爾順河」はどのような機能を果たしたのか、次に探ってみよう。

そもそも「烏爾順河」とはどのような河であり、当時においてはどのように認識されていたのであろうか。同時代の資料に拠りつつ検討していくこととしたい。

「烏爾順河」が流れているホロンバイルという地域は、ソ満国境の広漠たる内モンゴルの大草原地帯であり、そこには放牧の民、革命と同時に亡命してきたカザツクの農民達、それに、漢民族など多数の民族が雑居していた。この地の行政を行うために興安北省公署がおかれていた。大同学院第一二期生の安達為也は、興安北省殖産科事務官としてホロンバイル地域に赴任した経歴について以下のよう

うに言っている(27)。

この家は、ロシア人街の真中であつたので、夜が明けると澄んだ空気の中でロシア寺院の鐘がひびきわたってくる。間もなく、何百という牛群が砂塵をあげながら怒濤のような勢で道路を通過していく。これは朝、各戸から集まってきた牛群が草原の放牧地に行く姿であるが、夕方また騒然と帰ってくる。ハイルならでは見られない風景である。

当時、ハイルに赴任してきた青年達はこの美しい素朴な環境の中で、蒙古をこの上なく愛し、民族闘争の歴史から民族協和への夢を、官吏もそうでない者も均しくもっていた。それは蒙古という素朴な人種や風土関係があづかつて力あったものようである。白系ロシア人には白系ロシア人としての夢があったし、蒙古人には蒙古人としてのひそかな夢があった。

引用文から確認できるように、「烏爾順河」が流れるホロンバイル地域は、満洲国建国初めの時期には素朴な牧民生活にふさわしい穏やかな雰囲気が出ていた。そしてその地域は、各種の民族が共存する地域であり、「民族協和への夢を」持ちつつ、人々が生活してきた場所であつたと確認されている。

さらに、烏爾順河は同時代の人にとのよう認識されていたのかを確認しておく。昭和一八年に米内山庸夫が書いた『蒙古及蒙古人』(28)に次の記述がある。

ウルシユン河は大草原の間を真直ぐに北に流れること約八十哩、ホロン湖の東南の隅から湖に入る。ウルシユン河の河床は可なり広く、河流はその河床をS字に曲りくねつて流れてゐる。この河の流れは緩やかであり、水の少いときは家畜や牛車などはそのまゝ河を渡る。河畔はバルガ族の夏の大放牧地であり、その時期には幾百千といふ蒙古人の天幕の家屋がこのあたりに立ち並び、幾百といふ馬群、幾千幾万といふ羊群が至るところ

に放牧され、まことに蒙古草原の繁栄を思はせる。

引用文中に記されているように、烏爾順河は南から北へ流れホロン湖に注ぐ河である。その流域は草原が繁栄し、大放牧地が広がる。さらに、烏爾順河が流入するホロン湖の歴史に関して、同じ資料で次のように述べられている。

ボイル湖は支那の書物には普通貝爾湖と書いてゐるが、また布育里湖、捕魚児湖なども書いてゐる。呼倫貝爾ホロンバイルはこの湖名をとつたものである。ボイル湖の水が溢れ、ウルシュン河となり北に流れてホロン湖に入る。このホロン、ボイルの二湖はこのあたりの肥沃なる草原の中心をなす。故に、この二湖の名をとつて呼倫貝爾ホロンバイルといひ、清朝時代には、黒龍江將軍の下に海拉爾に呼倫貝爾副統を置いてこの地方を統治せしめてゐたのである。

ボイル湖のボイルは蒙古語で「いつもある」といふ意味の文語だといふ。

すでに確認したように、烏爾順河は南にある（ボイル湖）から北の（ホロン湖）に注ぐ河である。そして、ボイル湖とホロン湖は草原の中心地であつて、絶好な放牧地なのである。

以上のように、烏爾順河は満洲国と内蒙古との国境に近いところ

にあり、付近は資源が豊かな地域である。そして、「主なるとして、漢人、ダホル人、ロシア人、タール人、ユダヤ人並に近年新たに進出発展した日本人及び朝鮮人が」共に生きている地域として認識されていた（29）。つまり、烏爾順河の周辺は資源豊富で各民族が共存する地域であつて、まるで満洲国の（理想郷）のように考えられていたのである。

竹村が（烏爾順河）を歌うということは、日本では見られない無限の満洲の草原、自然風土、そしてその地域にある人々のライフスタイルに憧れていたからであろう。その憧れを歌で表現し、満洲国の地方に赴く勇気を与えてもらう。またその歌は、（私）と信子に無限の幻想を与え、満洲国の未来図を想像させる。

烏爾順河が歌の中に現れるという設定は、満洲国成立のころ、建国運動に挺身した若者たちの動向と繋がっている。

昭和七年三月一日、満洲国宣言が發布される前日に、自分たちの寮歌が欲しいという気運が自治訓練所において盛り上がった。早速自治指導部の名において全満に歌詞募集をしたが、国情が不安定な時期であつたため、集まる歌は少なかった。結局、編集委員会のメンバーの一人、鯉沼じぬま昵が命ぜられて早急に作成することになった。

寮歌発表は昭和七年四月二六日から五月一四日にかけて、自治指導部訓練所卒業旅行の途次、各県城で発表会を行うことになった。作詞者の鯉沼は資政局訓練所の第一期生で、彼は自身の自治指導員としての経験を基にし、満洲の大自然の中に身を投じ、建国精神を情

緒的に捉え、暗さから明るさに抜け出して理想を目指す行進という構想で寮歌をまとめた(30)。歌詞は三番から成り、第一番は、広大無辺の美しい満洲の自然を讃え、この恵みに満ちた大自然が無我至純なる若者を呼んでいると謳う。第二番では、自然豊かでは農民達が勤勉に働いているが、政治の乱れと腐敗は未だ収まらず、自らの責任によって自治の精神を自覚させるほかないと歌う。第三番は、自治の精神に従って挺身難に赴けば、必ず民族協和の旗がはためき、王道楽土が建設されるであろうと謳う。

この寮歌の作曲は満鉄沿線の中学校の音楽指導をしていた村岡楽童である。当時、満洲国国歌はまだ制定されていず、この寮歌の普及の速度は速かった。大同学院一期生の長谷川濬にとつても、当時この寮歌は心の中に響き渡ったであろう。戦後、彼は大同学院を回想して「王道夢幻」という文章を書いた。その一部分を抜粋する(31)。

大濤寮の朝……

勃起男根に輝く太陽、ふんどしのはためく寮歌合唱、議論、ストーム、また議論のすべて、満洲ナロードニクの熱き目差し、空を彩る大夕焼、柳に滲む夕陽の残光、一文字に暮れゆく地平線の黒き沈黙。王道の在るべき相を……(中略)

「ああ若者よ、行け、辺境の地へ！大地をよこぎって、農民の魂を求めよ。(略)」

右の引用文によれば、大同学院にいた時期、寮歌が毎日合唱されていたことがわかる。寮歌を歌って、満洲国の空、夕焼け、陽の残光、黒い地平線をイメージしながら「王道の在るべき相」を想い、「辺境地へ」赴く情熱を燃やしている。

また、卒業生の任地行の模様について、長谷川は次のような詩を綴っている(32)。

「自ら治むる精神」の連帯される処、眉涼しき若者は歌う、肩を組んで歌う、王道の起重機よ、吊り上げられる革新の鉄材、吾等よくぞ海を渡れる！この大地を愛し、民と共にその愛を分つ為に……僕は聴く、駅頭の激励の叱咤と渦巻く歌声を、再び還らない首都を去る同志の人々よ。(中略)未知の大地の果てへ只一人で去る。

この詩で学院卒業生は、自治精神に徹して、辺境の農民と連帯すべきだということがた高らかに唱えられている。

大同学院の寮歌でも、長谷川濬が執筆した文章と詩でも、満洲の風土に対する憧憬と「民族協和、王道楽土」をモットーとする建国精神とが結び付けられている。つまり、風土への憧憬＝建国精神＝辺地赴任という思考の傾きが見えてとれる。満洲国の若者たちの中で広がった建国運動に対するこの考え方が、小説「烏爾順河」に取り込まれ登場人物に投影しているのである。当時の大同学院を含め、若者の間で盛り上がった建国精神を理解したうえで再び小説に戻る

と、信子が竹村を選択する理由がより鮮明になる。

文学少女である信子と文学部出身である〈私〉との接点は、ロシア文学である。〈私〉もロシア文学が好きで、信子に「ソログープの訳本」を貸した。それに対して、「日本内地で感じられない、巨大な地貌の中に自分が溶け込んで行」って、「広漠たる大陸の涯を想見して民族的な不思議なノスタルヂヤ」を歌に詠み込み、堂々と歌う竹村がいる。つまり、満洲国に渡ってきたばかりで、ロシア文学を媒介として大陸を理解しようとする〈私〉が存在する一方、満洲の独特な自然風土に憧れ、より満洲国の内部を知ろうとするため、自ら辺境へ赴く志を持つ竹村がいる。〈私〉と比べ、竹村はより情熱的、献身的である。信子の竹村を追って自殺した行為は、明らかに竹村の持つ建国精神に同調していた。信子が恋人を選ぶ基準は建国精神に結び付いていると前述したが、さらに言えば、竹村の歌は、彼をライバル視している〈私〉に、「巨大な地貌の中に自分が溶け込んで行」くという満洲風土への憧れと建国精神を想起させるものであった。そうであれば、竹村に愛情を抱く信子は、竹村の建国の情熱に共感し、竹村を選んだと解釈できる。

結

「烏爾順河」は満洲国に渡った日本人青年を主人公にして、建国運動の最中に生きる若者たちの間の友情、愛情をめぐる相を描いた小説である。彼らの友情、愛情の背景に、満洲国成立直後〈地方自

治を実現するため辺境へ赴き〉、〈建国のため身を捧げる〉という時代の鼓動が存在する。その風潮の発生地を探ってみると、当時満洲国の若手官吏を育成した機関である大同学院が浮上する。作者の長谷川濬は大同学院の一期生であり、学院の教育に大きく影響されていたことが想像される。満洲国建国初年、日本の青年の中に、自治指導部訓練所、後の大同学院を経てから満洲国の官吏となつて活躍した人は少なくない。その時代に生きる人たちの面影を長谷川濬はよく観察し、小説の中に取り入れている。「烏爾順河」を読むことによって、満洲国建国初期に渡満した青年たちの考え方、生き方を理解することができる。また、登場した人物たちが満洲国の自然を憧憬しながら、放浪の野望を持ち、動いたり衝突したり、恋する夢を抱いて、その中で迷走し、よるめいたりする姿も、在満の日本人読者に多くの共感を与えたのであるまいか。文壇でも好評だったようである。

小説の最後の場面で、親友も恋人も失った〈私〉は、「鈍く光」つて「草原の彼方にうねうねと流れて」いる〈烏爾順河〉を振り返って眺める。竹村の歌の中の〈烏爾順河〉は、信子に「大きな願望を想像さ」せ、〈私〉に建国運動に挺身する勇気を与えるものであった。そして、竹村の死から三年後に〈私〉が目にした実際の〈烏爾順河〉を、「悲しい」、「荒涼たる」と作者は形容した。歌われた河のイメージと実際の河のイメージには大きな隔たりがある。つまり、〈想像〉と〈現実〉の間にすれ違いが生じているのである。〈烏爾順河〉を対照的に描く意図とは、作者が満洲国の建国において〈理想〉と〈現

実」の間にすれ違いが存在することを読者に想起させたかったからであろう。しかし〈理想〉と〈現実〉のすれ違いの原因は何なのかを追究できないまま、作者は小説に終止符を打った。

長谷川濬は満洲国の内部に身を置きながら満洲文学を創作し続けた希有な作家である。しかし、〈民族協和〉のスローガンと各民族の間に存在する齟齬、〈匪賊〉と〈抗日運動〉との違いなどをどれほど認識していたかどうか、本稿の検討だけでは明らかではない。今後は他の作品を綿密に分析することによって、長谷川濬という満洲国が生んだ作家を通して満洲国を理解し、それと同時に、同様の立場にいた他の文学者たちの考え方、生き方をも探っていきたい。

【注】

1. 『満洲浪漫』は康德五年（一九三八）一〇月二七日に第一輯を発刊し、康德七年（一九四一）一月五日に第六輯を刊行。翌年以降、『満洲浪漫叢書』として作品集一冊と文庫本四冊が刊行された。同人は北村謙次郎、木崎龍、長谷川濬などであった。

2. 『作文』は同人誌として、昭和七年一〇月に創刊された。初め、『文学』の誌名で発刊し（一輯——二輯）、ついで『作文』と改称し（三輯——一五輯）、次に、『一家』（一六輯）と改称し、さらに『作文』と改称したのである。

創刊時の同人は竹内正一、城小碓、落合郁郎、島崎恭爾、町原幸二、安達

義信、青木実である。

3. 『満洲作家選集』（『満洲浪漫』特輯・康德六年一二月 満洲文祥堂）。

4. 『満洲国各民族創作選集』第一巻（昭和一七年 創元社）。

5. 長谷川濬『烏爾順河』（康德一一年 国民画報社）。

6. 『昭和戦争文全集1 戦火満洲に挙がる』（昭和三九年 集英社）。同書の「解説」は橋川文三が担当し、『烏爾順河』の特徴をよく把えて紹介している。

7. 『作文 第九六集 長谷川濬追悼号』（昭和四九年八月 作文社）。

8. 引用は注7に同じ。ちなみに、『偉大なる王』の作者はバイコフ。この作品は昭和一五年に長谷川濬によって日本語に翻訳され、「虎」という表題で『満洲日日新聞』に六月から一〇月にかけて連載。昭和一六年一月、満洲日日新聞社から単行本として刊行された。同年三月、文藝春秋社によって日本で『偉大なる王』という書名で出版された。出版されてすぐ日本でベストセラーになった。

9. 『植民地文化研究』創刊号（植民地文化研究会 平成一四年六月）。

10. 『日本未来派』第二号（日本未来派発行所 昭和二二年七月）。

11. 川村湊『異郷の昭和文学』（岩波書店 平成二年）。

12. 川崎賢子『彼等の昭和』（白水社 平成六年）。

13. 「烏爾順河」の引用はすべて『満洲作家選集 満洲浪漫特輯』（康德六年一二月 満洲文祥堂）に拠る。また、作品名は「烏爾順河」と表記し、河の名称を指す場合は（烏爾順河）、（ウルシュン河）と表記する。

14. 関東軍や満洲国の治安機関は、政府に敵対する集団（抗日団体）を盗賊と同じ意味をもつ「匪賊」と呼ぶ。

15. 「挺身赴難」は当時の大同学院の学院精神を示すスローガンの一つであると

認識されている。言葉の出典は『大いなる哉 満洲』（大同学院同窓会 昭和四一年）。

16. 『碧空緑野三千里』（大同学院同窓会 昭和四七年）。

17. 西原和海「大同学院と満洲文学」『彷彿月刊』八月号・論創社 平成二二年七月）。

18. 『満洲国史』総論（満洲国史編纂刊行会 昭和四六年）。

19. 注18に同じ。

20. 注18に同じ。

21. 注16に同じ。

22. 注16に同じ。

23. 注18に同じ。

24. 注16に同じ。

25. 注18に同じ。

26. 注18に同じ。

27. 注16に同じ。

28. 米内山庸夫『蒙古及蒙古人』（目黒書店 昭和一八年）。

29. 米内山庸夫『蒙古草原』（改造社 昭和一七年）。

30. 注16に同じ。

31. 『大いなる哉 満洲』（大同学院同窓会 昭和四一年）。

32. 注31に同じ。

第二章

国境線としてのアルゲン河

―長谷川濬の「蘇へる花束」をめぐって―

序

昭和一二年に長谷川濬は関東軍の軍政部が行った国境全線にわたる兵要調査にロシア語通訳として同行し、アルゲン河を三ヶ月に渡り調査した(1)。小説「蘇へる花束」は長谷川濬が兵要調査後に執筆した作品である。長谷川濬が満洲にいる間、数多くの小説や詩を創作したが、今の段階では、筆者はまだ彼の当時の作品を掘り出しているところである。長谷川濬の作品についての研究、とりわけ本論文で取り扱う作品「蘇へる花束」に関する先行論文はまだ空白な状態である。

長谷川濬の「蘇へる花束」(2)は満ソ国境のアルゲン河(3)沿いの寒村を舞台にして、そこに住む少年「狗剩子」^{ゴシシ子}一家の物語を描いたものである。

主人公「狗剩子」一家は国境河であるアルゲン河の近くに住んでいる。ある冬、「狗剩子」の兄「黒小子」^{ヘシヨウ子}は愛犬を追いかけて遊んでいた際に、無意識のうちに凍った国境線の河を越えてしまい、ロシア

兵に射殺されてしまう。以来「狗剩子」は両親に「河には恐ろしい魔物が居る」と教えられて育てられることとなる。やがて春が訪れ、河の氷が溶けたことで、「狗剩子」は兄の死という教訓を忘れてしまい、河へ遊びに行ってしまう。しかし彼が漕いだ古い船は、船底の板が腐っていたため解体してしまい、「狗剩子」は河に落ちて溺れてしまう。しかし結局村の人に助けられて「狗剩子」は一命を取りとめる。

二人の子供が相次いで溺れてしまうアルゲン河は普通の河ではなく、国境の境目を示す河である。島国から大陸の満洲に渡っていった文学者長谷川濬にとつて、両国の境目であるアルゲン河という大陸河はとても刺激的だったのではないであろうか。作者の長谷川濬は滔々と流れているアルゲン河という国境を小説の舞台にした。本稿では、「この河をはさんで二つの国が対立している」アルゲン河について、同時代の史料と照合しながら、作中、「国境」の河がどのように描写されているかを論の端緒とし、そこに人間と自然の対立的要素を見ていく。

一、「蘇へる花束」における国境線

日本は四方全てを海に囲まれており、日本人が持つ「国境線」の「線」のイメージは、それほどはっきりしたものではないかもしれ

ない。これに対し大陸に位置する中国は海だけでなく陸地にも囲まれ、陸地部分は多くの国と接している。小説「蘇へる花束」で取上げられた国境の河「アルグン河」について、歴史上においてどのように述べられているかを確認しておきたい。大正十一年に出版された『満蒙全書第一巻』(4)には、以下のような記述がある。

満洲と露国との境界は北京条約(咸豊十年十月二日 露曆一八六〇年十一月十四日)にて規定する所て、即ち同条約第一条に拠れば、露支両国の東方境界はシルカ(什勒喀)河アルグン(額爾古納)河との合流点より初まり、黒龍江の下流に沿ひ烏蘇里江との合流点に至る間の黒龍江北辺の地は露国に属し、南辺の地は支那に含まれ、又烏蘇里江口より興凱湖に至る迄は烏蘇里、松阿察二河を以て交界とし、其河東の地は露国に属し河西の地は支那に属する、又松阿察河の源よりは興凱湖を越ゐて白稜河に至り、同河口より山嶺に順つて瑚布図河口に至り、更に同河口より琿春河と海との中間嶺に順ひ豆満江(図們江)に至る線の東は露国に属し、西は支那に属するものである、又露支両国の交界線と豆満江との会合点は該江口を距ること二十支里を越ゐない。

北京条約によって規定された国境であるアルグン河を「蘇へる花

束」において長谷川がどのように描写したのか。そしてそれぞれの自然描写はどのような機能を果たしたかについて検討していきたい。まず、本文において長谷川はアルグン河について次のような描写をしている。

太陽はもう高く上つた。垣のように幹を並べてゐる白樺の林に夏の陽はさん／＼と照り、丈高く伸びた夏草の間には黒百合やその他の野生の花が点々と綴られて美はしい花園を作つてゐる。赭土を露出した崖の頂には緑色のテーブル掛けをかけたやうに青草が密生し、鮮やかなコバルト色の蒼穹にくつきりした線を書き、時々千切れ雲が浮いたり消えたりした。かうした繁茂した自然の中をアルグン河は悠々と流れてゐる。其は沈黙した動きであり、静かな流である。夜も昼も岸を洗ひ、砂土を流し小さい渦を作つて動く水は夏の陽を一杯に受けて満々と流れてゐる。

さゝやかな茂みと白樺川柳の疎林を持つた中洲になべ鶴のがひが下りて長い脚を持てあますやうに動かし乍ら時々嘴を浅瀬に突込んでゐる。

この河をはさんで二つの国が対立してゐる(5)。

引用した内容は主人公の「狗刺子」が丘の上に座つて朝のアルグ

ン河を眺めている場面である。ここで作者は非常に細かい筆致で河岸の自然風景を描いた。作者は「白樺」「黒百合」「赭土」「青草」「コバルト色の蒼穹」など様々な色合いに注目し、同じ場所に存在する色の変化を丹念に描いた。作者は「繁茂した自然の中を」悠々と流れているアルグン河の周辺がいかに魅力的な場所であるかということとを強調し、生物の生命力を描写した。一見調和しているかのように見える自然の河であるが、しかし「この河をはさんで二つの国が対立してゐる」と、人間の秩序によって河が国境線として存在しているということが強調されている。作中の緩やかに推移する時間が、この一文によって急に緊張感を持って読者に訴えかけるのである。向こう側のソ連軍の兵舎、シャツに長靴の兵士、乗馬した武装兵の姿が自然の生物と共に国境河周辺の風景として描かれる。春の朝の国境河に対して厳冬の国境河は以下のように描かれている。

先刻父が出立する時に注意深い目付きで河を指差して河には恐ろしい魔物が居る。兄さんは魔物に凭かれて死んで了つたのだ、河へ行つちやいけなと云つたその言葉を思ひ出し乍ら静かな流れを見守つてゐた。(河には恐ろしい魔物がゐる)と狗剩子も信じてゐる。

主人公の「狗剩子」はこの川に対して、河岸の自然の風景を楽し

んでいながら一種の恐怖を覚えている。その原因とは、「先刻父が出立する時に注意深い目付で河を指差して河には恐ろしい魔物が居る。兄さんは魔物に凭かれて死んで了つたのだ。」と言われ、河には恐ろしい魔物がいると「狗剩子」も信じているのである。ここで魔物というイメージが登場したが、しかし具体的に魔物というものはどんなものなのかについては描かれていない。兄の「黒小子」の死んだ場面には以下にある。

国境には冷酷な厳寒が天地を凍り付けてゐた。地も空も神々の息に震へ、河面は白銀の盤と不動の氷原となつて陸に続いてゐた。無人と荒涼が凍結した自然の中に氷雪の衣を着て彷徨してゐた。河岸の人々はせつせと薪を集め床下を暖めては長い夜を送り、短い日中には山や谷に野獣を求めた。

季節が冬に変わると、もともと流れていた河は不動の氷原となつて陸に続き、さらに雪の衣に覆われ、どこまでが陸で、何処までが河であるか全く見分けられず、まるで一つの平原になってしまう。『満蒙全書第一巻』の記録によると、アルグン河に近いシルカ河の結氷期間は、一〇月中旬から翌年の四月下旬までである。つまり河はおよそ半年程凍っている状態になる。河が凍ってしまうと、流れる河が氷原に固まって、陸地と変わらなくなる。したがって橋や船

などの交通手段を利用せずに河を簡単に越えられる。しかし河が流れるか静止するかに関わらず、河の上に構築された〈国境線〉という役割は変わることはない。自然の陸と河の境界線が雪の下に隠されてしまったからこそ、「黒小子」は愛犬を追い駆けるため、ついつい河面を渡ってしまい、向こう側の駐屯する軍隊に射殺されたのである。

黒小子も犬につづいた。

「おい、黒子、何処へ行くんだ、向ふはロシアだ、おい！」

黒小子は大声で叫んで愛犬の跡を追った。

狗刺子は本能的の危険を感じて、立止った。

そして大声を上げて黒小子を呼び止めた。

「兄さん、危い、兵隊が居るぞ、兄さん」

しかし黒小子は黒犬をつかまへやうとするらしくどん／＼走つてゐる。

向ひ岸にバラ／＼と人影が動いた。長い外套を着たロシア兵だ。狗刺子はびっくりして「兄さん！危い！」と叫んだ時だった。パンパンと銃声が白煙と共に静寂を破った。狗刺子は本能的に腹這ひになった。「あつ！」と叫んで前方を見ると黒小子はバツタリと倒れた。犬はもうロシアの岸に躍り上つてゐた。（中略）

広漠たる大地の氷原に横る黒い一点は黒小子の亡き骸であつた。

本文には、兄の「黒小子」と弟の「狗刺子」は同じく愛犬を追いつけたが、途中「狗刺子」は「本能的の危険を感じて、立ち止った」とある。「狗刺子」は本能的に軍隊の存在イコール死を意識していると考えてよいであろう。「黒小子」も「向こうはロシアだ」とわかっているが、しかし自分が危険なところに向かつていくという認識がない。「狗刺子」は兵隊のことを意識して立ち止まるが、「黒小子」はそこまで認識できず、愛犬を追い駆け続け射殺された。犬はロシアの岸に躍り上がったが、兄の「黒小子」は射殺された。射殺の対象は河の場に潜む国境の線を越えた人間に限定される。犬が対岸に辿り着き、子供が射殺されるというかなり対照的な描き方によって、〈国境〉は人間社会の秩序であることを示しているのではないかと考えられる。広々とした「大地の氷原」と「黒い一点」の人間の亡き骸は対照的に描かれている。季節の移り変わりとともに結氷した河はもはや何の障碍もなくなり、渡ることは簡単になる。しかし〈自然の河〉を渡るのは簡単になるが、同時に〈国境の河〉の意味を持つアルグン河を渡ることとは不可能であることを「黒小子」の死によってあらわされていると考えられるのである。

「黒小子」の死に対して、母親は涙も流さずに、「憤怒の眼光が、狗刺子の頭を貫いた」と描かれている。母が怒りからではなく、悔

しさをもって「黒小子」の死体を見つめていると読むことができる。「黒小子は悪魔につかれた」と母は喩えて言う。人間の争いによって命が奪われることは子供には理解できないから、母は抽象的な悪魔のイメージを借りてその恐怖を注意しているのだと考えられるが、もう一つ考えられるのは、悪魔という存在は人間には対応しない、超越的な存在であるということである。この比喩の中には人間の武力によって人間が殺される残酷性と恐怖性が暴露されているのではないか。

その日の夜、犬の「黒子^{ヘイズ}」はまた「狗刺子」の家に戻る。つまり犬は対岸の人間に殺されていなかったのである。アルグン河を通して描かれる人間対人間の秩序の構図が、この犬の帰宅によって一層際だつ。翌日「狗刺子」の父親は山小屋から下り来て息子の死を聞いた後、大きく溜息をついて「あいつは不運な子だった」と一言を残して外へ出て、愛犬の「黒子」に銃口をむけて「悪魔を追い払ってやる」と叫びながら一発で撃ち殺す。一緒に暮らしてきて可愛がられた愛犬は一転にして悪魔の使者だと見られ父親の銃で殺されるのである。

翌年の夏、弟の「狗刺子」は兄の死を忘却し、また河へ向かって遊びに行った。「狗刺子」の目に映った夏の国境河は次のように描かれている。

ロシア側の岸では子供が水浴びをしてゐた。白い裸が飛沫を上げてはね廻つてゐるのが手に取るやうに見えた。陸には赤や青の着物を着た女の子が走つてゐた。
長靴をはいた兵隊が銃を肩にして林の中から出たり入ったりしてゐた。濃緑色の軍帽を真深に冠つた兵士が双眼鏡で満洲側を偵察してゐる。

夏の描写では、冬の荒涼とした国境風景に対して、万物が蘇って生命力に富んでいる様子が描かれる。雪で覆われ、全てのものが銀色であつた景色が、鮮やかな色に変化している。ここではロシアの子供の水浴びと兵隊の巡回する姿が描写されている。ロシアの子供が水浴びしている姿は、「狗刺子」にとつてただ目に映っている風景の中に含められた一つの要素にしか見えない。つまり民族、人種の違いに関わらず、「狗刺子」の目に映っているのは人間が自然を楽しんでいる姿である。しかしロシア兵隊の偵察する姿が「狗刺子」の目に再び映る。武器を持つ異民族の軍隊は怖いものであると作者は強調している。しかし「狗刺子」は兄の死を忘れてまた河に足を運んだ。兄の遭難した記憶を忘却させた原因は次のように描かれている。

狗刺子の一生の願はあの船に乗つて噂に聞く黒河の町へ行つ

て見たい事である。あの汽笛を聞き船首に碎ける白い波を見る毎に狗剌子の空想は大きく翼を拡げて河水に溶け込んで行く。

(中略)

水浴びしやうか。狗剌子は着物を脱がうとしたが父の言葉を思ひ出して中止した。ロシアの子供達の声がほがらかに狗剌子の耳をくすぐる。不図、狗剌子は廃屋の下に小舟が一隻つながれてゐる事を思ひ出した。その舟は久しい間、水あかを入れたままつながれてゐたのだ。狗剌子は小舟のもとに坐つて汽船や航行の夢を独りで楽しまうと企てた。

「船に乗つて噂に聞く黒河の町へ行つて見たい」のは「狗剌子」の「一生の願」いである。「狗剌子」の生活するところと全く違う世界かもしれない。水遊びしようとする「狗剌子」は父の忠告を思い出してやめたが、しかし船に乗つて未知の町へいきたい憧れは止められない。「狗剌子」の空想は無鉄砲な空想ではなく、父の話は「狗剌子」の空想のものとなる。また「狗剌子」は母の懷中に抱かれて、町の話、海の話聞いた。彼は單純に自分の町から出たいのではなく、自分の町を恋しく思いながら未知の町に憧れているのである。複雑な感情が溢れる空想を追い駆けるために「狗剌子」はまた河を渡ろうとしたが、結局、船が壊れて彼は溺れる。「狗剌子」の溺れる場面は次のように描かれている。

舟はがつくりと解体し始めた、水圧と人間の重さで朽ち果てた木材が分裂したのだ。「兄さん！」その声はもうどす黒い水に呑まれた。

小さい手があり丈の力で板の端にとりすがつて、生命の花の様に白く水中に見えた瞬間、舟はともを高く上げて流れ始めた。狗剌子は黒い世界から緑の山をかすかにのぞいた。彼の声は只水底の悪魔を呼ぶ丈だ、そして無音の暗い巨大な口の中へ狗剌子は呑まれて行つた。

「黒小子」の死んだ場面の悪魔と「狗剌子」の溺れた場面の悪魔の共通点として、恐怖感を与える、忌むべきものというイメージを読み取ることができるであろう。しかしその悪魔にはそれぞれ違いがある。「黒小子」が死んだ場面の悪魔は国境線という河を越える人間を襲う。それに対して「狗剌子」が溺れたときの悪魔は河に落ちる人間を襲う。子供の視点によれば、命を脅かすのは悪魔の存在である。ところで、「黒小子」の命を奪つたのは人間が持つ武器から飛び出した銃弾で、それに対して「狗剌子」を襲つたのは自然の河の津波である。「黒小子」は死んだが、「狗剌子」は村の人に救われた。

小説の最後、救われた「狗剌子」は両足を投げ出して口笛を吹いたり歌を歌ったりしながら馬車に乗つて河沿いに沿つて家へ向かう。

文末には樂觀的で前向きな雰圍氣が溢れていて、河に対する恐怖の記憶は示されていない。つまりここでは自然の危険性より人間の暴力性がより残酷で恐しい存在であると作者は強調していると考えられる。小説のタイトル「蘇へる花束」についてであるが、花束というイメージは作中で、「狗剝子」が夏の河の風景を楽しみながら花を摘んだりする場面や、水に溺れたとき手に握った花束が水の中に落ちてしまう場面、また村民に救われて家に帰るとき花束を手握っている場面などに描かれている。「花」は自然界にあれば、咲いて枯れた後も、また春になれば咲くことができるが、一度人間の手によって摘まれ、加工され「花束」になると「花」は二度と咲くことはない。つまり、蘇るといふ言葉と花束という言葉を並べてタイトルにした意味は、作者が敢えて自然の力と人間の力を対比するところにあるのではないかと考えられる。

長谷川濬は「蘇へる花束」において、二人の子供が相次いで同じ河で遭難したことを対照的に描くことによって、アルグン河という場所のイメージを表象した。作中のアルグン河という場所はいくつかの特徴を持っている。まず小説においてのアルグン河は魅力的な場所である。作者は色合いの豊かな組み合わせや自然に存在する生物などを丹念に描き出し、北方大自然の季節ごとに現れてくる風景、そして雄大で荒涼たる自然の美しさを強調している。しかし、人間の手の加わっていないこの河には人為的な線である国境線が引かれ

ている。地理上の境界線の上に人間の秩序が構築されているのである。それによって、一本の自然の河という場所において、多くの対立する要素があらわになってくる。「河をはさんで」対立する二つの国、氷原の上の小さな「黒小子」の「黒点」の死体と、川沿いで水浴していたロシア人の子供の「白い裸」とに象徴される民族の対立など。これらの対立の要素は一本の国境線の河の両側に同時に存在しており、自然の変化にも拘らず、人間の秩序が存在する限り調和できないのである。

登場する人物の「黒小子」と「狗剝子」は相次いでアルグン河を渡ろうとした。二人とも同じ場所で遭難したのだが、「黒小子」は人間の秩序である国境線を越えたことで、人間の手によって射殺された。一方、「狗剝子」の方は航行の夢に失敗して溺れたが、村の住民に救われた。同じ河で遭難した二人の子供は小説においてそれぞれ違う結末を迎えることになる。また、冬の凍りついた河という場所では「黒小子」が射殺された描写とは対照的に、夏の河で遭難した「狗剝子」は一命を取り留めた。二人の登場人物の死と生の対照によって、作者は自然の秩序より人間の秩序のほうが極めて厳格で、暴力的で、圧倒的な存在であり、それを乗り越えることは不可能であるという考えを示そうとしたと見えられる。一方人間が美しい自然風景を憧れる気持ちは人間が構築した秩序によって阻まれるべきではない、つまり人間が自然を愛する、そのような人間の純粋なところ、

人間のありのままの姿を保ってほしいという祈念を作者は、「狗刺子」が生き返る設定によって表現しようとしたのではないかと考えられる。

二、同時代の他の作品における国境線

ここで同時代の国境線に関する表象についても確認しておきたい、同じ満洲で活躍した作家である秋原勝二は、昭和十二年「夜の話」(6)という小説を発表した。小説の登場人物である横山は、幼児期に満洲に渡った。作中に満洲から日本内地へ旅行に行ったとき、満洲と日本の間の黄海を渡る場面を、秋原は次のように描写する。

黄海の真ん中に出たとき、私は一つの事に気がついた。今、まさに自分の心は、満洲と日本に二分されてゐる、両極にひかれる浮動体のやうに、その一方の強弱につれ、私はその中間に漂つてゐるのだ、それが、今の心、それは黄海の感情でありこの海を渡る日本人はひとしく味ふ運命的なものなのであらう。

引用文は、満洲に住み着いた日本人が、満洲と日本の国境を渡る場面である。国境の線が明確に引かれていないので、国境を渡ったということが、感じられないという気持ちがあらわされている。自

分の心は満洲と日本の「両極にひかれる浮動体」とあるように、満洲と日本とは、国と国が対立する存在ではなく、自分がどこに帰属するかという問題が提起されている。また、詩人の三好達治は、昭和二年六月出版の雑誌『青空』において、「国境」(7)という散文詩を発表した。

川が、詳しく言へば川の流線が国境なのである。用事のない人々は対岸へ渡つてはならない。そこへ渡るのには、少くとも一挺のピストルを持つていればピストルを盗まれるついでに殺される様なこともある。(中略)

冬。河が結氷すると彼等は憤激する。国境監視者達は重たい毛皮の外套を重ねて、銃の引金に厚い手袋の指がかからないやうになる。すると彼等は憤激する。結氷した河はもはや何等の障碍ではない。それは銀の光沢にすぎない。彼等は、夜、跣足でその上を横断する。狼のやうに彼等はあらゆる方角へ斜走する。街道の電線が切られる。電線は巧みに碍子のところで切断される。それを誰も発見しない。そしてもはや国境の通信連絡は断たれている。銃声。銃声。侵入。国境監視所。奪掠。婦女。そして夜が明ける。

けれども彼等は彼等の仲間に屢々裏切られる。計画の、秘密の山裾を曲ったところで、彼等はみんな殺戮されてしまふ。

ああ、——これが国境である。

三好達治は亡命するために国境を越えようとする冬場の国境での人間像を描いた。一方「蘇へる花束」において二人の子供は亡命の意図があつたわけではなく、子供の好奇心や、遊び心によって、河を渡ろうとする。同じ冬の凍った国境の河を渡る二作品の描写であるが、三好達治の文章にみられる政治性は「蘇へる花束」において大いに強調されていない。しかし子供は殺されてしまうのである。この設定によって、人間の秩序の厳しさ、人間社会の暴力性がより鮮明に暴露されたのではないかと考えられる。

また昭和一〇年二月一八日から、二月二五日の満洲日報に「国境線を行く」(8)という連載がある。

この附近の雄大広茫たる地勢は両国間の逼迫した緊張も知らなげに太古の面影をとどめて悠遠だ、国境が現在の如く明瞭となつたのは極めて最近のことである、一昨年ごろまでは小原山監視所より一步も前方に進めば、直ちにソ連の不法射撃を受けたのだ同年の四月多くの危険を冒して国境調査が行われた結果、初めて国境線が判明し、標石まで進出することが出来、その後の実力交渉によって現在の如く国境の確立を見るに至つた。

国境線は常に紛争地域であり、さらにひとつの標石で国境を標示する場合もある。海に囲まれた島国の日本と違って、大陸の国境は、一つの標石や一本の河など自然界に存在するものによって表示されることになる。「蘇へる花束」において「河の両側に二つの国が対立している」と一本の自然の河のうえに国境が決められていることが描かれている。つまり国境として示された場所は同時に二重の意味を持つようになってしまうことを小説の中に織り込まれた。

また、当時奉天に生まれ、昭和一二年から一九年の間満洲国蒙政部に入り、興安北省(海拉尔^{ハイラル})、額爾克納左翼などの、いわゆる満洲国の辺境地の公署に勤務した杉目昇がその境地での経験を取り上げて『コサックと共に』(9)という著書を刊行した。その本の中に、作者本人が昭和一五年満洲国西北部の国境地帯の状況視察でアルグン河を航行したとき、対岸のロシア監視兵に発砲された記録が残っている。

国境の大河には兩岸に航行の目標になる標識が立てられていて、河を上下する蒸気船は、この標識を目標にジグザグで運行する。船の航路となるところが河の最も深いところで、航路の中心が国境線とされている。

しかし、小船はそれぞれ自国の岸沿いに航行するのが常である。

アルグン丸も満洲国側の川岸近くを静かに流れてきたであったが、瀬崎参事官が、「航行の目標が明確に表示されており、国境線は確定しておる。ソ連との国際情勢はノモンハン事變のあと停戦協定も締結されており、両国の間の情勢は安定しているから堂々と航行の標識の定める航路により行こう」と言う。荒谷参事官は「やめたほうがよい」と言う。どちらも言い出したらきかない人で、小舟の中で論争が続いたが、結局、先輩の瀬崎参事官の言に従って、河の流れの中心に船を漕ぎ出した。

この標識による航行では、地形により時にはソ連側の極近くを船が行くこともあるのである。(中略)

絶壁の高台を過ぎた地点で、突然、目の前卑近の河岸に二名のソ連監視兵が銃を構えて待っていた。鋭い叫び声が静寂を破った。「ストイ！ダワイ シュダー」(止まれ！こっちえこい) 三十メートルくらいの距離からであった。

「今、風に流されてきた、満洲側に引き帰す」と応答してオールを握ったとたん、監視兵が発砲した。タマは足もとに飛来した。

四人一斉にアルグンの流れに飛び込んで舟を曳きながら、舟に身を隠すようにして泳いだ。(中略)

射撃がうまいと定評のあるソ連国境監視兵の間断ない発砲が続いた。

次ぎのタマが尻ベタに命中して、アルグン河の河中に屍を沈めることになるのかな、と観念しながらも必死で泳いだ。

引用文によつて、国境地域の緊張した雰囲気をも十分読み取れるであろう。一本の河の「航路の中心が国境線とされている」とあるように、国と国の境が決められている。しかしもし風に流されて、目に見えない河の中心の線を越えた場合、向こう側の国の監視兵に無差別に発砲されるの当時の現状である。このような国境あたりの地域の緊張さは「蘇へる花束」においても、主人公「黒小子」の遭遇に託して描かれた。しかし「蘇へる花束」において二人の子供の主人公が設定され、同じ国境の河で遭難した二人の子供がそれぞれ違う結末を迎えたのである。作者は二人の主人公に託して(政治的な河)、つまり国境としての存在、そして(自然界の河)を表現しようとしているのではないかと考えられる。ゆえに、自然の河であると同時に国境の河としての厳しさ、人間の縄張りによって自然空間の上に加えた人間社会の秩序の残酷さがより一層際立っているのである。

結

昭和一二年に関東軍の軍政部が満ソ国境全線にわたる兵要調査を

行った。調査隊は四つの班に分かれ、国境全線を四つに区分し、それぞれの区域を担当したが、長谷川濬が第三班に属して、外交部通訳として同行し、アルグン河を三ヶ月に渡り調査した。小説「蘇へる花束」は長谷川濬が国境調査の後に執筆した作品である。長谷川濬が所属する第三班は八名の班員がおり、交通部所属の小汽船に乗り、六月下旬黒河埠頭を出発して調査任務についた。『満洲国軍』(10)において班長蛭谷博の手記の中に以下のような記述が残っている。

河幅が五十米から三十米とせばまっただけのところは水深も浅くなり、狭い航路を探しながら徐航を続けた。ある日の強い突風を受けてアツという間に船はソ連側の江岸にペッタリと着船、浅瀬に乗り上げてしまった。二進も三進もゆかない。あきらかにソ連側への不法越境であり、万一船内を調べたら大変である。

この様子を見て例のゲペウは銃を構えて近づき何かしきりに喚きだした。上陸せよというのである。長谷川属官(林不忘と長谷川海太郎の弟)がしきりに交渉するが埒があかない。

私は船内にかくしていた軽機を握った、しかしこの二騎を斃しても五百米前方にソ軍の兵舎がある。まさに万事休すであった。(中略)

われわれ全員江中に飛びこみ必死の力で小船を離礁させた。

引用文において、調査隊の船が強風でソ連側の岸に流され、隊員たちがソ連軍に不法越境者として調べられそうになるとき、みんな江の中に飛び込んで必死に船を離礁させようとした場面が記述されている。長谷川濬は隊員の中の一人である。つまり国境の河に潜めた緊張感と危険性を長谷川濬が身をもって経験したことがあるということである。この体験を生かして長谷川濬は自然の河でありながら、国境線として機能をする河のイメージを「蘇へる花束」に綴って、二人の子供の主人公に託して物語った。さらに、国境の河で遭難した二人の子供の死と生の対照を描くことによって、国境になる河の緊張さ、厳しさが一層際立つてくる。二〇年後の昭和四七年、長谷川は『外語文学』一〇号に「国境」(11)という題にした小説を発表した。満洲国自体が壊滅した二〇年後の戦後に当たって、長谷川は「国境! あんなものは人間が無理してこしらえた縄張りだ」、「この調和された自然の中で生物——人間は踏み込む資格があるのだろうか」というように明確に人間が自然に架空した縄張りを批判し、人間の行為に詰問をした。満洲国で芽生えた自然の上に人間の秩序が構築されることについての批判は長谷川濬の文学を終始貫いていたのである。繰り返して昭和一四年の時点で作られた「蘇へる花束」を読むと、作者が満洲国という特殊な地域での体験、そして満洲の自然風景からもたらした啓発を小説の中に綴ったことがあらためて

分かる。そして、満洲国の一つの側面、つまり国境地域の状況を「蘇へる花束」によって映し出そうとしたのではないかと考えられる。

【注】

1. 軍部では軍事調査部を主管課として優秀な人材を集めて四ヶの調査隊を編成した。調査目的に応じて部外より所要の人員を参加させた（測量、気象関係、通訳等）が、濬は、ロシア語通訳者として、第三班に属した。第三班のメンバーは、班長憲兵上尉・蛭谷博（当時黒河国境監視隊附）、班員・事務官・田村広太郎、通訳・中山公太郎、警務局警佐・藤田某、外交部通訳・長谷川濬、交通部（黒河）事務官・北村某、満航パイロット二名である。調査区域は、黒河を東端として黒竜江を遡航し、漠河を経て満洲里にいたる領域で、交通はおもに船によった。
2. 初出は『満洲行政』第五卷一号（一月号・満洲行政学会）であつて、長谷川濬の作品集『烏爾順河』（国民画報社 康德一一年一月）、『満洲文芸年鑑』昭和一四年版（満蒙評論社 昭和一四年一月）に収録される。
3. アルグン川はユーラシア大陸の北東部を流れる川で、シルカ川とな

- らぶアムール川の大きな源流の一つ。内モンゴル自治区の大興安嶺山脈の西麓から発し、内モンゴル北端のホロンバイルを西へ流れ、ハイラル区で伊敏河と合流する。満洲里市付近で、中国領の呼倫湖（フルン・ノール）からの流れを合わせてアルグン川となる。以下北東へ向きを変え、九百キロ以上にわたりロシアと中国の国境を流れ、黒龍江省漠河県付近でシルカ川と合流し、アムール川となる。
4. 『満蒙全書』第一卷（南満洲鉄道株式会社満蒙文化協会 大正一一年一月）。

5. 本文に関する引用は『満洲文芸年鑑』昭和一四年版（満蒙評論社 昭和一四年一月）に拠る。以下同じ。
6. 秋原勝二「夜の話」（初出『作文』昭和一二年五月）引用は『満洲文芸年鑑』昭和一三年版（満蒙評論社 昭和一三年一月）に拠る。
7. 三好達治「国境」（初出『青空』昭和二年六月）引用は『三好達治全集』（昭和四一年 筑摩書房）に拠る。
8. 「国境線を行く——満洲里にて（河野特派員）」『満洲日報』（昭和一〇年二月一八日〜二月二五日）。
9. 杉目昇『コサックと共に』（私家版 平成一一年）。
10. 『満洲国軍』（満洲国軍刊行委員会編集 昭和四五年）。
11. 『外語文学』一〇号（外語文学会 昭和四七年一月）。

第三章

満洲国における民族協和

―長谷川濬「寛城子」をめぐる―

序

本章で問題とする長谷川濬の小説「寛城子」は、昭和一六年一月、雑誌『作文』（1）に発表されたものである。この作品では民族協和の問題が取り上げられている。長谷川濬の創作の中には、民族問題に触れた作品はそもそも数が少ないが、この一篇は彼の民族についての考えを最もよく反映している作品だと言える。小説は、官庁に務める日本人青年の官吏（私）（新井）と同僚の「満人」（中国人）及び、その妻との間の出来事を主軸にして描かれている。本章では、その作品の中に見られる民族問題を抽出し、長谷川濬の（民族協和）に関する考えを検証することを目的とする。さらに資料と照らし合わせながら、満洲国の建前に呼掛けられた（民族協和）と実際の間に存在する齟齬をどのように小説の中に取り上げられたかを見出す。また、同時代の「満人」が登場する他の作品と比べながら、長谷川濬の満洲国に対する独自のまなざしを考察していきたい。

一、友情とイデオロギー

小説「寛城子」は（寛城子）という多民族の居住する街を背景として展開する。主人公の（私）は満洲国の官庁に勤める日本人の若者である。職場で「満人」の青年のK（漢民族）と知り合って、仲良くなった。Kにはロシア人（2）の妻ニーナがある。（私）は満人のKとニーナの間に漂っている（異民族）の空気に違和感を覚えながらも、二人と寛城子での生活を楽しく過ごそうと考えている。Kとの友情が深まるにつれて、（私）は満洲国の動向や青年の問題をめぐる、彼と真剣に向き合おうと考えるようになる。ある日、「君の国はどこだ？」といったような問題でKと議論したが、二人の意見に食い違いが発生し、（私）はKを殴ってしまう。K夫妻が自分の寛城子生活に欠かせない存在であると判断した（私）は、やがてKと仲直りした。その後、職場の林文江（3）（日本人）に恋心を抱いたが、彼女は急性肺炎で亡くなった。その後、（私）は国境に転勤を命じられ、一時期寛城子を離れた。国境に赴任していたとき、（私）は肺炎にかかって帰国した。帰国中、結婚し、病気が回復してからすぐに妻を連れて満洲国に戻り、再び寛城子に住むようになって、K夫妻と深い友情を結んだ。その後また国境へ赴任することになり、またも寛城子と別れなければならない。国境へ赴任中、よく寛城子に住む人々のことを思い出したが、ある日同僚からKが役所をやめて中国へ去った」という噂を聞いた。半年たつて（私）はまた「Kが南京で反満宣伝文を盛に南京新聞に連載している」と聞いて、かなりの憤怒を覚えた。半年後、役所の用事で大連に出張したとき、ある地下室のカフェで水兵とふざけ散らしているロシア人の女達に遭

遇する。その中に一人のドレスを着て水兵を抱いた女がいたが、気がついたらその女はニーナであった。

右の梗概における、〈私〉とKと友情を結ぶ場面と、満洲国建国の問題について喧嘩となる場面には、満洲国に存在する民族問題がよく表れている。つまり、この作品には、満洲国に関わるイデオロギーの問題と、個人レベルの友情の問題とが重層的に展開されている。そして、国や民族に関するイデオロギーの相異は個人の友情を破壊してしまうのである。

では、「寛城子」において具体的にどのような個人レベルの友情と民族問題を取り上げたのか、まず本文の中に描かれた、〈私〉とKが〈一個人〉として友情をはぐくむ場面を抽出する。本文の冒頭部分に、次のように述べられている。

学校を出たばかりの私には所謂官吏の道にも暗く、その職場に一途の情熱さへ湧かず、むしろ反撥さへ感じながら、一方に何もかを追求してゐました。それは満洲国が独立して新しい胎動の裡に青年を大きな流れに引きずり込んで行く―そのひびきを聞こうとする盲目的な情熱でありました。私は周囲にいる満人の青年に満洲国の方向の片鱗でもいゝ探し出そうと努めました。第一に言語不通と云ふ一大難関につき当つて戸迷ひしました。次に彼等の表情でした。彼等の不可解な微笑や、悠然たる物腰、毛筆を丹念に使つて達筆を振ひ、煙草を泰然とふかし満語をぺらぺらと話し、ちらりと私に一瞥を投げて、急に妙

なアクセントで突拍子もない日本語を以つて不必要な質問をされたり、私は全く外国人としてぼつんと椅子に坐つてゐるのに過ぎませんでした。つまり、私が満洲国に渡つたと云ふこの事実、この情熱だけに溺れてはいけない、もつと激しい現実の中に生きてると云ふ発見が、日本内地で体得されない新しい視角から事物を見るやうに強要されました。私はこれではいけない、早く自分を整理して、満洲国に於ける私の立場を明白に理論的に把握すべきだと結論し、一つの踏み台を捜し出しました。

右の引用に示されているように、学校を出てすぐ官吏の職に就いた〈私〉は、仕事に対して情熱を感じられないが、満洲国の建国に対しては盲目的な情熱を感じられる。多くの「満人」に囲まれた環境の中にいる〈私〉は、若者同士で満洲国の方向について意見を交換しようと思つたが、最初の難関は言葉と文化の壁であつた。「私は全く外国人として」疎外され、「椅子に坐つてゐる」しかないという描写から、自分が職場の環境に非常に溶け込みにくい状況にあることが明白に認められる。理想論と現実の問題に苦しめられた〈私〉は、早く満洲国に馴染んでいきたいために、突破口を探さなければならなかつた。そのとき、Kと出会つた。

私は一人の満人の青年と知合ひになりました。名をKと呼んでおきませう。Kは英字新聞の資料係りで英語の達人であり、ロシア語も相当出来ました。官庁へ勤める前は北鉄管理局に勤め

て、相当な給料を取つてゐたらしく、上海あたりにゐる支那大學生と云つたやうな句を持つた近代青年で、服装も氣が利いてゐたし、何処かにニヒリステイークな冷たさがありました。

(中略)

知り合つた動機は、冬の夕に、私が官庁の表玄関から出やうとした時Kが近付き、きれいなロシア語の發音で「今晚は」とあつさりした事から始まりました。二人はロシア人の営む小さい料理店でザクースカをつつき乍らウオーツカの瓶を一本空にしてロシア語と日本語のちやんぽんでハルビンの生活や北滿の話をしました。私はKに滿人らしい土臭い句やもどかしさも感ぜず、私達のグループに近い青年の感傷とウイツトとメランコリーを感じて、無批判的に友情を覚えました。

私とKが友達になれる条件として、まず言語の壁がない。日本語或いはロシア語が二人の共通言語であつた。また、「滿人らしい土臭い句やもどかしさも感ぜず」、一人の人間として、「私」はKに対して「無批判」でありえた。更に「私達のグループに近い」感傷的な雰囲氣を持つていることが友人關係を結びつけるキーになった。Kは一般の滿人のように「不可解な微笑」や「悠然たる物腰」ではなく、常に物事に対して深く考えているように見える態度を持っていた。そのような態度が「私」を惹きつけた。ところで、Kはいったい何を考へているのか「私」には分からなかつた。

私は滿洲国に対する色々な問題、疑ひ、動向等の「青年の問題」を一時、保留してKと仲よくなり、Kから民族の概念や、それを主体とした私の研究や、或は私の生活條件の追加と拡大を企て、また都會青年らしい趣味によつて日常生活の潤ひを求めました。

Kとの友情は、滿洲国に対する問題、「青年の問題」を一時保留したうで、「都會青年らしい趣味によつて日常生活の潤ひを求め」るためであつた。つまり思想上の意見を交換する友達として付き合つたのではなく、日常生活を楽しめる友達として付き合つたわけである。言い換えれば、二人の友情は一緒に生活を楽しめるレベルに止まるものであつた。もし、民族概念などの滿洲国建国に関する問題をめぐつて論議すると、二人の友情は台無しになる可能性もあると「私」は意識したのである。「私」はKが自分と違う考へをもつてゐることを氣にしている。本文の中には次のような行文を見出せる。

Kは上海で教育を受け、それからハルビンでロシア人の間でもまれ、建国と同時に滿洲国の官庁に勤め、日本人とつきあひました。私はKとつきあひ乍ら、自ら警戒し、自分の位置を反省し、滿洲国に渡つて来た日本人たるのモラルを本能的に体得しました。Kは私の如く日本から單純に大陸へ渡つた青年でありません。上海、ハルビン、新京の三都會で、支那、滿洲の歐米的、ロシア的のその特性を判じて上手に泳ぎ廻るKなる支那青

年の眼に、いや満洲青年の眼に、移り変る満洲の様相や日本人がどんな風に解釈されてゐるか―その心境や神経の動き方は私の想像だに及ばない処でした。だが、私は努めて虚心坦懐にまた趣味的に都会人らしい神経でKとつきあひました。

右の文を検討すると、〈私〉がKとの関係の中で満洲国の様々な問題を一時保留した理由とは、Kとの考えの差を意識したことからだとわかる。Kは上海で教育を受け、満洲国建国と同時に官庁の職場に移ってきたのである。中国東北で作られた政權〈満洲国〉を彼がどのように認識しているのか、また、海の方こうから渡ってきた満洲国の支配者である日本人に対して、どのように考えているのかは明らかではない。異民族のKとの付き合いによって、〈私〉は「その心境や神経の動き方は」「想像だに及ばない」と実感することができたのである。

政治、民族、国境など、人間によって作られた秩序を排除し、一人の人間としてKに接触する〈私〉に対して、彼からの抵抗感はない。本文の中に、〈私〉とKが「雄大な新京のシルエートを眺めて、黄昏の雲の美しさに共鳴し『美しいなあ！』とか『自然は絶対だ』と」賛美する場面が描かれている。しかし、自然の前で共に楽しめる二人であっても政治、民族の問題に触れると態度は豹変してしまう。Kとの交友関係を先に破ったのは〈私〉であった。小説のクライマックスの部分に、次のようにな場面が描かれている。

だから私は解決を急いなのです。これは私だけであつたでせうか？建国当時、海を渡つた日本青年の突き当つた悩みは満洲国の理論的把握とこの実践型態の在り方でありました。私はうす暗路をのろ／＼歩き乍らKに訊ねました。

「君の国はどこだ？」

「上海」

Kが訊ねました。

「君のくには？」

皮肉な質問でした。

「日本さ、そして満洲国だ」

「満洲国？」

Kが反問しました。

「満洲国は僕の国さ」

私はきつぱり断言しました。

Kはそれつきり沈黙しました。しかし、私はKの全身に強烈な否定の気配をさつと感じて私は緊張しました。沈黙の一手で対する戦法に私はむら／＼と憤怒が湧き上がりました。

「何故黙つてるんだ？」

私の語勢にKは一寸たじろぎました。

「君は日本人だからね」

「馬鹿！」

私の腕はKの頬に飛んでゐました。不意打を食つてKはよろめき、ふら／＼と膝を地につきました。私はこみ上げる激情の

波のまゝ、第二の攻勢を取つてKに肉迫しました。

「満洲国は俺と君の国ではないか、何が日本人だ！日本人だけではないんだ。それが分らんのか？」

と私は日本語でどなり乍らKを掴まうとしましたが、Kは巧に体をはかして立ち上り通りを一散に駆け去りました。まるで疾風のやうな速力で――。私は握りこぶしを固くしめつけたまゝ、往來の真中に立つてゐました。Kの遠ざかり行く白いシヤツを睨みつけて……。

(中略)

私は闇の中をぐん／＼突進して内庭の戸を潜り、Kの家の扉を荒々しくたたきました。が、ひっそりとして人聲もありません。窓には灯の影さへ見えません。

(畜生！逃げたな、卑怯な……) 私は怒りのやり処もなく自分の下宿へ帰りました。

喧嘩の端緒は、〈私〉が渡満した日本人青年としてどのように満洲国の理論を把握するか、またどのように実践するかなどの問題を解決したいと思つて、Kと議論をしたからである。議論の中心は「君の国はどこだ？」という問題であつた。〈私〉は自分が日本人でありながら満洲国の国民だと答えた。しかしKは〈私〉の国籍を日本としか認めない。一方、Kは自分の国籍は「上海」だと答えた。もし「中国」だと言つたら日本人と対立することになるので、それを避けようと考えて答えた。つまり、Kは満洲国が一つの国だといふこ

と自体に否定的な姿勢なのである。「満洲国は俺の国だ」と主張する日本人の〈私〉を、Kは反問と沈黙を武器にして否定している。

満洲国は「民族協和」、「王道樂土」を建国理念として宣伝するが、現実の中で、Kのような「満人」インテリは満洲国の存在すら否認する態度をとっている。しかも、「Kの存在は私にとつて一つの事実であり、彼の背後にうごめく満人のインテリ群や白系ロシア人、鮮人、蒙古人等が」と〈私〉は意識している。満洲国建国に対して「盲目的な情熱」に燃えている〈私〉と、満洲国の存在すら否定しているK及びKの背後側に存在する異民族の人間との間に、〈満洲国〉に関して考えの齟齬が存在する。

小説の中で〈私〉はKに暴力を振る。そうした暴力の内面には、〈私〉がどのように行動すればいいのかという不安や焦り、そして卑怯が潜んでいたのではないかと考えられる。つまり、満洲国の青年官吏が自分の生きかたなどについて、内面に潜めた不安や疑惑は、「満人」への暴力によつて表面に現れてきた。満洲国建国運動に関する理論上と現実上の差、及び異民族の間に見られる満洲国に対する意見の分裂などといった問題は、渡満したばかりの一人の日本人青年に整理しきれなかったもので、暴力によつて不安や焦燥、空虚感を外に出したのではないかと読み取れる。

では、作者はなぜ〈私〉という渡満したばかりの官吏を主人公にして、小説の中で民族問題を大きく取り上げたのか、次に長谷川濬の経歴を踏まえながら検討していきたい。

二、民族協和の建前と本音

小説「寛城子」は満洲国建国後間もない時期の話である。小説のタイトルに示された寛城子は満洲国の首都・新京の北にある、ロシア人や中国人が多く住んでいた街である。かつてロシアが作った東支鉄道(4)南部支線の終点であった。主人公の(私)は、作者の長谷川濬その人ではないが、(私)の設定状況には、作者の体験と重なりあう部分も少なくない。長谷川濬は大同学院を卒業したあと外交部や弘報処に勤務し、(私)と似たような官吏生活を経験している。その後、長谷川は満映(満洲映画協会)に入社する。満映の製作所は当初、寛城子にあったので、彼はこの土地とはなじみが深かった。大同学院も一時期、寛城子に校舎を設けた。

長谷川濬は、満洲国成立の昭和七年に大阪外国語学校を卒業して、同年五月一五日に満洲に渡った。渡満した直後、満洲国資政局訓練所に入り、地方県参事官となるための訓練を受け、大同学院第一期生として卒業した。

第一章で述べたように、大同学院では、設立の昭和七年から日本敗戦の昭和二〇年までの間、一期から一九期まで約四千名の卒業生を送り出した。大同学院は(自治指導訓練所)と(資政局訓練所)を経て改組された機関であって、満洲国の若手官吏の育成を目的としたものであった(5)。卒業生は大同学院の根幹となる「自治指導部布告第一号」と「自治指導服務心得」を身に付け、政情混乱の地方(主として県)に身を投じていったのである。この「自治指導部

布告第一号」とは笠木良明によって立案され、于冲漢の決裁を得て、当初は遼寧省下に広く宣布したものであった。「自治指導部ノ真精神ハ天日ノ下ニ過去一切ノ苛政、誤解、迷想、紛糾等ヲ掃蕩シ竭シテ極楽土ノ建立ヲ志スニ在リ」(6)と、その冒頭に建国の基本理念を具体的に明示し、善政を施すことによる楽土建設を目的とした点を高らかに謳っている。次いで、「住民ノ何国人タルヲ問ハス胸奥ノ大慈悲心ヲ喚発セシメテ信義ヲ重シ共敬相愛以テ此ノ画時代的天業ヲ完成スヘク至誠事ニ当ルノ襟懷ト覚悟アルヘシ」と、指導員の根本的心構えとも言うべき大慈悲心と、民族の協和に至誠をもつて当たる覚悟を説いたのである。

大同学院が唱えた「民族協和」の思想は、その後一般に広く流布した、いわゆる「王道楽土、五族協和」のスローガンと繋がっている。しかし、実際のところ、渡満したばかりの長谷川濬は、国政上の曖昧さに関して戸惑いを覚えざるをえなかった。大同学院に関する史料『碧空緑野三千里』(7)に長谷川濬の述懐文が残っている。

その日の報告会は終わった。我々は売店からビールをとり寄せて食堂で浴びるようにならで議論した。それは満洲国独立という事実から発起され、現段階の一切と民族と王道に関する検討であった。私は満洲に関して無知である。南嶺に集まったこの日本青年たちは何をやろうとしているか、要は地方農村に出て、村長の仕事をやればいいのか、宣撫工作か、討伐か、そのためにわざわざこの地へやって来たのか、いや、王道の実践者、笠

木伊ヅムで新しい歴史を創るのだ。私は雄峰会も青年連盟の主張も知らない。現地派の建国運動方向も知らなかった。全く無知だ。

……満洲にやつて来たのは単なる就職だったのか、「せまい日本に住みあきた」という例のロマンチズムやセンチメンタリズムの放浪癖か……。私にとって、教官や講師よりも同じ釜の飯を食う同志の一人一人から何かを吸収した方がより現実生きる道であると感じた。

文章の中に長谷川濬は「私は満洲に関して無知である」、「私は雄峰会も青年連盟の主張も知らない。現地派の建国運動方向も知らなかった。全く無知だ。」と、自分が満洲国について何も把握できていない不安を吐露している。それは長谷川濬一人の戸惑いではなく、当時渡満した若者たちが共通に抱えていた悩みであったと想像できる。

若者たちの満洲国建国に対する不安を心理的（思想的）背景として、一篇が成立していると理解したうえで、「寛城子」の中の〈私〉の内面を読み込んでいくと、作者自身と〈私〉の心境が作中に重ね合わせられていることが明らかである。次の引用は官吏として渡満したばかりの〈私〉の心理描写である。

官庁に勤めて何を得たか？単なる官吏の下積みとして給料を貰って無駄使ひするだけではないのか？内地で得られないものを

獲得しやうとしてもがき乍ら、一満人の妙な微笑に「民族」の観念を想起させる現実で、私に課せられた仕事は何であらうか？こんな漠としてとりとめもない懷疑や問題が私を苦しめました。

また、大同学院で建国運動や「民族協和」の理念についてかなりあいまいに教えられたせいも、理念と現実との間の食い違いに疑惑することもよくあった。たとえば、右の長谷川濬の述懐文の中に、自治指導部の根本精神と実践に関する報告をした笠木に長谷川濬が質問する場面がある。

「参事官とは……」

「参事官は官吏ではない。強いて云えば牧民官です。官吏なら日本の役所にうじゃうじゃいる。君たちはそんなものじゃない。君達は役人になるのじゃない。」

という具合であった。ところで事實上、大同学院で教育を受け、満洲国の各県に派遣された卒業生たちは、満系の県長補佐という職務になり、県の治安や宣撫の仕事をして、つまり反満抗日の団体を弾圧し、県政に直接に参与したのであった（8）。それは長谷川濬の述懐文の中に示された「参事官は官吏ではない」、「君達は役人になるのじゃない」という説明とは食い違っている。

さらに、昭和一二年に出版された『満洲読本』には「五族協和」

に関して次のような記述が見られる。

満洲国は満・漢・蒙、日本及朝鮮民族を以て構成の主体とする。此等諸民族は、建国宣言に宣布されたこと其の儘に、国内に於いて平等の権力を有し、義務を負はさればならない。併し乍ら、五族は概ね其の源流を、齎しくする者多しと雖も、各々風俗・習慣に少なからず差異を認められる。即ち各民族の祖国夫々に、特殊の気風が培はれて居て、夫々の伝統と因習とを、此の国土にまで持ち越して来て居るからである。故に純然たる国風が此の国に芽生え瀰漫するのは今後にある(9)。

満洲国において宣伝された「五族協和」とは、満洲国を建設するための「協和」である。その五族の中において日本人は主導権を握る民族であり、五族の中には当然の如く階層が存在し、建国宣言にある「凡そ新国家領土内に在りて居住する者は皆種属の岐視尊卑の分別なし」、「平等の待遇」などといった文言は絵空事でしかなかった。同じく『満洲読本』においては、「農・林・水産又は鉱業・交通業等に従事する日本人等は、殆んど夫々の業務中の、幹部又は指導的地位に立つ者のみである。」とも述べられている。つまり日本人をピラミッドの頂点とした民族階層の社会が厳然として存在したわけである。

右に挙げたように官吏を育成する大同学院の教育及び満洲国の宣伝する「民族協和」と現実との間にはすれ違いが存在する。理論上

と現実上に存在する齟齬は長谷川濬を含め当時の若者たちにとって容易に納得できない問題であった。「寛城子」において、「私」は満洲国に対してはつきりと民族的に理論を把握してゐませんでした。どうすればよいのか私の行動の基準が定まりませんでした。だから私は解決を急いだのです」と告白している。「満洲国の理論的把握とこの実践形態の在り方」を明確にしようとするため、Kに「君の国はどこだ？」と訊ね、あげくは喧嘩に到ったのである。つまり、大同学院で官吏の育成教育を受けた若者たちの抱えた精神的彷徨は「寛城子」の〈私〉に託して表現されていることが確認できる。

また、小説の中において、イデオロギーの違いによって異民族の立場を十分理解できないがため、喧嘩となるシーンが描かれたが、実際、満洲国においては民族の間に意見のすれ違いがよく見られた。例えば、小説の作者である長谷川濬自身すら民族問題について十分理解ができていず、満系作家との間にかなり考えのすれ違いを生じさせた証拠が残っている(10)。

雑誌『芸文志』(11)が生まれたとき、満日文化協会(12)が主催した創刊披露会が開かれ、日満系作家が一堂に会したことがあった。披露会するとき、日系作家の一人が立ち、満系作家も満洲文話会へ入会して欲しいと発言したが、これに対して、満系作家の一人が立って「自分たちがすでに文学そのものをさえしばらく避け、官吏として、会社員としての生活に没頭したい」と考えている際なので、「出来るだけそういった会合等に顔を出したくない」と答えた。

それに対して長谷川濬が「すぐに立つて」、「芸術家」とか「文学

者」とかいう大きな表現を用いて、「世に納れられぬ」文学者が、この世を白眼視したり、すねたりしないで、「日系も満系も手をつないで文学をやつてはどうか」という素朴な人情論をこねた。ところで長谷川濬の発言に対して、別の満系作家は「あの人には情熱はあるけれど、理智が不足ではあるまいか」と手痛く批評していた。つまり、のんびり文学をやっていた日系作家に比べ、満系作家たちには政治的、経済的、或いは封建的圧迫に苦む現実があったのである。さらに「建国文学」とか「協和文学」とかの枠に入つて文学を作ることが、「満人」の中で知られたらどんな目に会ふのか、つねにそういう危惧を満系作家は持っていたわけである。長谷川濬のような日系作家は満人の立場について、理解しきれないところが存在したのであつた。

「寛城子」の最後の部分に、〈私〉はKが南京へ行つて反満宣伝に従事したことを聞いたとき、「満洲国に於ける交際は一体何をもたらしたのか、民族と民族の問題ではなく、もつと直接的な人間と人間の問題として解決出来ないものか」、「日本人のやるべき仕事が、この大陸で如何に広くひろがつてゐるか」といった問いを投げかけているが、この台詞こそ長谷川濬自身をはじめ、当時満洲国に渡つた若者たちが切実に答えを求めていた問題であつたに違いない。

結

「寛城子」は満洲に渡つた日本人が異民族と接触する際に感じた、

相手との考え方の齟齬とかイデオロギーの壁とかいった問題を主題にした小説である。登場人物の間の葛藤を通して、満洲国建国初期、大同学院で訓練を受けた若者たちの悩みと、民族協和で感じた挫折を垣間見ることが出来る。長谷川濬は満洲国にいる間、たくさんの小説やエッセイを発表したが、この「寛城子」一篇の他には、日本人と他民族との矛盾や衝突というテーマをめぐつた作品はほとんど書いていない。この小説は、当時の満洲国内部における民族問題の矛盾に対して、長谷川が真正面から挑んだものとして意義深いものであつた。

しかし、同時代において、異民族をめぐるテーマのもの、創作に取り組んだ渡満作家は少なくない。例えば、日向伸夫の「第八号転轍器」(13)のように、「満人」たちの喜怒哀楽の生活を繊細に描いた作品も登場した。「第八号転轍器」は昭和一〇年三月、北鉄(14)がソ連から満洲国へ譲渡された時、この鉄道に勤務していた「満人」の転轍手の物語である。主人公である老転轍手の張徳有は、旧北鉄時代に覚えたロシア語が何の役にも立たず、慣れない日本語の学習に苦勞する毎日を過ごしている。また同僚の李連福は、職場に見切りをつけ、退職金を資本にパン屋を開店しようと企む。北鉄時代のロシア式のやり方に慣れてしまつてゐる彼等にとつて、能率と時刻表厳守の満鉄式のやり方についてゆくのは困難なのである。そのような状況下に追い討ちをかけるように、満鉄が北鉄時代からの満系社員を整理しようとしているという噂が流れてくる。張徳有は長年扱い慣れてきた「第八号ポイント」を手放すことも考えるのだが踏

み切れず、李連福の開店したパン屋は火事で焼けてしまい、さしあたり張の属する駅では人員削減は行われなかった、という結末を迎える。

日向は「五族協和」という国家の建前に対して、作家的なりアリズム精神によって異民族の「満人」を「等しい人間」として作中に形象した(15)。日向は「等しい人間」という視点から、社会や人生に関わる(一個人)の普遍的な生き方という問題に改めて注目するまなざしを持とうとした(16)。日向の〈等しき人間〉という視線と違って、長谷川濬は「寛城子」において、あえて民族の間に存在する〈差異〉に注目し、民族の間の衝突に焦点を当てた。そこからあらためて、建国の建前と異なって、実際に民族間に存在する政治的・社会的差別を意識化し、小説としてテーマ化することに成功した。

また、同じ満人労働者をモチーフにした八木義徳の小説「劉広福」(17)は第一九回の芥川賞を受賞した。小説の主人公の劉広福は安い賃金で重い仕事についても文句一つ言わず黙々と働く吃音者の大男であった。工場で火災事故が発生した際、彼の勇敢な活躍で大事故には至らなかったが、彼は両手・顔などにひどい火傷を負い、大きな後遺症が残った。しかし許婚者の那娜の献身的な看病で彼は退院し、那娜と結婚式をあげる、といった筋である。審査委員の片岡鐵兵は「人間のこの時代に生きる精神を掴もうと(18)」する点を評価していたが、川村湊も述べる(19)ように、「五族協和」「王道楽土」という満洲国のスローガンに則ったこの作品の一種の国策性

が評価された側面があったことは否めない。「劉広福」の芥川賞受賞は、劉広福の、不平不満を言わずに働く勤労の姿勢や、彼と那娜との童話的な愛情の物語、火災事故における彼の英雄的行為、及び彼の義務感と自己犠牲の精神の強さなどの要素こそが、日本文壇において「満洲文学」に求められていたものであったことを如実に語っている。

一方、国策文学の色が強い八木の満人英雄像と違って、長谷川は「寛城子」において、日本人と「満人」の若者の間の考え方の差、衝突をピックアップしている。「五族協和」「王道楽土」のスローガンを宣伝する八木の作品と比べ、長谷川濬は現地にいて感じたものを率直に作品に反映してみせた。行政的に英雄タイプの人間が登場する建国童話を描いて満洲国の存立を宣伝するより、彼は政治について苦渋しつつ、満洲国内部から民族問題を凝視・告発する姿勢を読者に示したかったのではあるまいか。

「寛城子」の中にニーナというロシア人女性が登場したが、本論の中でそれについて取り上げられなかった。渡満するまでにロシア文学を耽読した長谷川濬の作品中には、ロシアにまつわるイメージが頻繁に登場する。満洲国内の複雑な民族関係に向きあうとき、長谷川は「満人」よりロシア人に近い場所に存在する傾向があるのではないかと仮説を立てているが、今後また長谷川の作品の中に登場する白系ロシア人のイメージについてあらためて検討していきたいと考えている。

【注】

1. 初出は『作文』第五二輯（昭和一六年一月）である。本文の引用はすべてそれに拠る。
2. 満洲におけるロシア人で、一九一七年三月のロシア革命以後、ソ連新政権下に移ることを欲せずそのまま残留した者、及びその後革命を避け国外に移住した者を総称してロシア・エミグラントというが、民籍の方では「無国籍」であった。一般には「白系ロシア人」と呼び習わされた。白系ロシア人は主としてハ爾濱周辺並びに旧東清鉄道沿線に集中居住していた。長谷川濬の小説の中に登場したニーナは白系ロシア人であったと想定される。民族としてロシア人であるので、本稿において漢民族の（満人）と区別するため（ロシア人）と表記する。
3. ちなみに、長谷川濬の妻の名も文江であった。
4. 東支鉄道（東清鉄道）はロシア帝国が満洲北部に建設した鉄道路線。満洲里からハ爾濱を経て綏芬河へと続く本線と、ハ爾濱から大連を経て旅順へと続く南部支線からなる。昭和七年満洲国が成立すると、北満鉄路と呼ばれるようになった。
5. 大同学院については本博士論文の第一部第一章、拙論「満洲国における恋愛と建国―長谷川濬『烏爾順河』をめぐって―」を参照。
6. 『満洲国史』総論（満洲国史編纂刊行会 昭和四六年）。
7. 『碧空緑野三千里』（大同学院史編纂委員会 昭和四七年）。
8. 注6に同じ。
9. 『満洲読本』昭和一二年版（東亜経済調査局 昭和一二年）
10. 北村謙次郎『北辺慕情記』（大学書房 昭和三五年）参照。
11. 『芸文志』昭和一四年（一九三九）創刊の中国語の文芸雑誌。古丁、爵青が中心メンバーであった。
12. 昭和八年一〇月に成立した日本・満洲国の文化交流団体。
13. 小説「第八号転轍器」は渡満作家日向伸夫が昭和一三年に創作した作品である。初出は『作文』三六集（昭和一四年二月）であって、『昭和戦争文学全集1 戦火満洲に挙がる』（集英社 昭和三九年一月）、『ふるさと文学館 第五巻 海外編』（ぎょうせい 平成七年）、『外地』の日本語文学選2 満洲・内蒙古／樺太』（新宿書房 平成八年二月）に収録された。
14. 注6を参照。本論文においては「北鉄」と略称する。
15. 日向伸夫「満洲文学私観」（『満洲浪漫』第五輯所収 昭和一五年）
16. 「第八号転轍器」については、本博士論文の第三部第一章、拙論「満洲文学」のある一面について―日向伸夫の『第八号転轍器』論―を参照。
17. 「劉広福」初出は『日本文学者』一号（日本青年文学者会 昭和一九年四月）。
18. 『芥川賞全集』第3巻（文藝春秋 昭和五七年）所収。
19. 川村湊『文学から見る「満洲」』（吉川弘文館 平成一〇年）。

第二部

文学者としての歩み

第一章

長谷川濬と『偉大なる王』

―バイコフの翻訳をめぐって―

序

『偉大なる王』^{ワシ}は一九三六年（昭和十一年）に書かれた作品である。作者のバイコフが東部満洲の山野で狩猟を行いつつ、学術的な探検旅行や調査を続けた時の経験を基にしている。その際に満洲虎を多年にわたり観察した資料をまとめ、一頭の虎の一代記を物語化したものであった。

『偉大なる王』に関して、バイコフが『満洲日日新聞』『新京印象』①（①に記した記事がある。それによれば「ユーゴースラヴィア王室に私の作品『虎』（偉大なる王）及び『満洲の密林中にて』を献上したところ、国王から最高勲章と自署名入りの肖像を下賜され、マリア皇后からは礼状を拝受した」という。つまりバイコフの作品は当時、ヨーロッパで相当高く評価されていた。この作品は、フランス語、ドイツ語、イタリア語、チェコ語に翻訳され、昭和一五年に長谷川濬によって初めて日本語に翻訳された。日訳の際には「虎」と改題され、昭和一五年六月二四日夕刊から一〇月三日夕刊（計八五回）にかけて『満洲日日新聞』（②）に連載された。翌年の昭和一六年二月に、満洲日日新聞社によって連載したものを単行本として

出版され（書名は「虎」、満洲で発行された。同年三月に、文藝春秋社によって「偉大なる王」と書名を変え日本国内でも発行された。

本稿では、長谷川濬がどのように『偉大なる王』と出会い、翻訳する仕事に着手したのかという問題を明らかにしたい。また、長谷川濬が翻訳することによってどのような影響をもたらしたかという問題をめぐって、関連する資料を参照しながら探ってみたい。

一、『偉大なる王』との出会い

長谷川濬が『偉大なる王』を翻訳するに到るまでには様々な経緯があった。当時の資料を調べることによって、長谷川濬がどのようにして作品と出会い、翻訳に関わるようになったかについて明らかにしたい。

昭和一六年二月、満洲日日新聞社によって出版された『虎』（③）の序文には、長谷川が作品を翻訳する経緯が記されている。次のようにいう。

バイコフといふ作家についてここに、三年以来私はロシア人から時折聞いた。私達の「満洲浪漫」に彼の短編が載せられてから、漸く在満日本人間にぼつぼつ認められたのであるが、白系ロシア人の間では古い作家であり、満洲よりも欧州で特異な作家、自然研究者、狩猟家として（特に虎の）有名であった。私もこの「偉大なる王」の名声については、バイコフに関連し

て必ずロシア人からこの本に一言いはれたのであるが、この本すら手に入れなかった。

今年の一月頃、別役君（現在哈爾濱高等檢察庁思想科勤務）からハルピン土産に「偉大なる王」を贈られた。表紙に虎の頭を描き、中にバイコフの描いた絵が二十枚ばかり挿入されている二三八頁の本で、ハルピン一九三六年ザイツェフ書店版（4）である。私はその本を手にして、初めて王が人間ではなく、満洲の恐怖の大虎であることを知った。

引用文によると、当初長谷川濬は『偉大なる王』の主人公である「王」は人間ではなくて虎であることを知らなかった。

また、同じ『偉大なる王』の序文に翻訳の経緯に関して、前の引用に続けて次のように述べている。

三月頃、富沢有為男氏が満映に來られて、わざわざ宣伝課に見えられ、私も面談した。その時、私がバイコフについて話し、「偉大なる王」を紹介した。富沢氏の目の色が急に生々と光り、私が驚く程の熱を以てバイコフについて質問をされ、今晚、是非「偉大なる王」をホテルに持つて來て呉れと念を押して頼んだ。これを機会にバイコフ、富沢氏がその「偉大なる王」をめぐつて一堂に会する段取になつたのである。

北京を旅行した富沢氏が、バイコフに会ひたさばつかりに満洲に戻り、四月八日の午後、宣伝課に現れ、その夜、私は富沢

氏とハルピン行きの夜行列車にゆられてゐた。

右の引用から、富沢（5）が満洲の新京へ訪れたとき、長谷川濬と知り合い、「偉大なる王」に大變興味を持ち、作者のバイコフと会うことを長谷川濬に誘つたということがわかる。以上のことについて、長谷川濬は『作文』第八〇集（昭和四五年七月）に掲載された「富沢有為男さんのこと」（6）に次のように記している。

この人が富沢さんであつた。ややこもつた声で私と満洲文学の近況について話し合つた。私がバイコフのことを話すと、富沢さんは急に変つた。顔の血の氣がさーとひいて震え、瞳がちぢみ私をじーと見つめ、えものを狙う緊張した猫か豹のようになつた。私はびつくりした。彼の声はふるえてゐる。「その人は何処にいるか、何を書いたのか」「ハルピンに住み、満洲虎を書いてヨーロッパで有名だ。私は彼の本をよんでいる」

（中略）

「旅のスケジュールで北京に明日立つ。また新京に戻るから、その時バイコフを訪ねよう」と彼は申し込み、私と別れた。それから一週間ほどたつていきなり満映宣伝課にまた夕方、富沢さんが現れて、これからすぐハルピンにバイコフを訪ねようと言さつた。

右の引用から明らかなように、富沢は長谷川濬と満洲文学の近況

について話し、初めてバイコフと「偉大なる王」のことを知った。富沢はバイコフの話を聞いて、「顔の血の気がさーとひいて震え」るほど昂奮してしまったのである。このように富沢が昂奮した原因は、バイコフの「日本人作家の印象」(7)から推察する。

一九四〇年の春、長谷川濬氏が露文で書いた私の「偉大なる王」(王大)をゆくりなくも読んで非常に気に入る、その一章を日本語に訳した。丁度その時有名な小説家の富沢有為夫氏が新京に滞在してゐたので、長谷川氏は訳した「王大」の一章を読ましたところ、富沢氏は強い印象を受けて、是非作者即ち私に会いたいといふ希望を洩らした。そのために富沢氏は長谷川氏と一しよに哈爾濱へやつて来て、私を訪ねてくれた。この日本の作家は話してゐるうちに私と私の著書に非常な興味を感じて、私の著書は日本人に非常に受けるだらうといふのはその精神と傾向が、愛国心と祖国愛に燃えてゐる青年達の現在の気分にくつ向きだからである、といふ意見を彼は述べた。その時私は、私の物語や小説の主人公は現実生活から取つてきたもので、強い精神と肉体を持ちいつでも真理と正義の戦ひに飛び込んで行くといふ人間の見本たり得る、と説明を加へた。富沢氏の意見によれば、青年子女を毒する頹廢的文学に反して、満洲の自然や密林の住民の生活を描いた私の物語や記録は、生気を吹きこみ積極的行動や有益な仕事に対する興味を呼び起こすといふ。

右に見るように、富沢は長谷川濬が訳したバイコフの小説に魅了され、バイコフを訪ね、彼の執筆した「偉大なる王」を出版したいと考えた。富沢がバイコフの小説に注目したのは、「青年子女を毒する頹廢的文学」に対して、「生気を吹きこみ積極的行動や有益な仕事に対する興味を呼び起こす」ためであるという。「満洲の自然や密林の住民の生活を描いた私の物語や記録」を文壇に導入しようと図つたのである。引用文で触れている「頹廢的文学」が具体的に何を指しているのかは不明であるが、富沢の強い勧めがあつたので、のちに長谷川濬が作品を翻訳し、世間に流布した経緯がわかる。バイコフと会つてから一ヶ月も経ずして長谷川濬が翻訳を引き受けた。新聞連載の時の挿絵はバイコフ自身が描いたものである(8)。

ところで、『偉大なる王』が『満洲日日新聞』に連載されると決まつたとき、当初は長谷川濬が翻訳する予定ではなかつた。昭和一三年、バイコフ「ざわめく密林」が雑誌『モダン満洲』に連載されたが(未見)、その翻訳者は上脇進であつた。上脇は新京商業学校の教諭と新京語学院露語主任を務めており、そもそも翻訳の仕事は上脇に任されたが、上脇の酒の失敗により、長谷川濬に訳者を交代することとなつた。このあたりの事情については、雑誌『人吉文化』の「上脇進追悼号」に掲載された奥一の随筆、「虎と酒と小便と」(9)が明らかにしている。その中に次のような記述が見出せる。

翌日満日本社の会議室で重役以下編集局長、文化部長、営業部長等出席の上で上脇進が主賓の席についた。題名は「虎」、著

者白系露人バイコフ、翻訳者上脇進、そしていろ／＼金額や何やかを書き加えられて最後に調印を了った。その後はおきまりの、美しい女、うまい酒、いい料理が運ばれた。飲むほどに、酔うほどに感極まつた上脇は突然卓上に躍り上った。強い酒のグラスをにぎつて、虎、虎、ともつれる口に酒を流し込み乍ら、並びいる紳士に向つて小便の洗礼をあげせた。丁度小犬が最高の喜びと、最大の親愛の情を示す為には、小便をたれ流してしつぽをチビれる程振廻す以外に方法を知らないのと同様に。

これで総ては終つた。満日はたつた今提決したすべての掲載契約を一方的に破棄、この翻訳は長谷川濬に肩替りすることとなつた。

彼は満日から「牝虎」をやらせてもらつたが、牝虎は興安嶺の王者、偉大なる王に及ばざること甚だしく、虎は完全に上脇から長谷川に移動していった。

少年時代からロシア文学に心酔した長谷川濬が、満洲に渡つてから知り合いの別役憲夫からバイコフの『偉大なる王』を贈られ、初めてこの作品と出合った。また、富沢有為男の仲介により、哈爾濱でバイコフ本人と会った。これらの経緯は後の翻訳に繋がっており、予定されていた訳者である上脇進の酒の失敗があつたことで、「偉大なる王」の翻訳は長谷川濬が行うこととなつた。

二、『偉大なる王』訳業のいきさつ

以上に見てきたように、長谷川濬が『偉大なる王』を翻訳することとなつたのは、偶然によるところもあったのかもしれない。それでは次に、長谷川濬はどのように『偉大なる王』を翻訳したかについて検討していきたい。

バイコフの『虎』は『満洲日日新聞』に連載されたあと、単行本として刊行され「数万部を売」つたという富沢有為男の証言がある(10)。また「菊池寛社長の肝入りで文藝春秋社から発行、当時のベストセラーになつた」(11)という。文藝春秋社によって出版された単行本は冒頭で述べたように「偉大なる王」と改題されたが、その本の帯には「諸家評」が以下のように記されている。ただし、書物の帯という作品を推奨するパラテキストの性質上、相当に割り引いて考えなければなるまい。

この小説は北満の原始林、山岳と樹海とに栖む王大といはれる猛虎の生態描寫で、読むとその生々しい自然の息吹きが感じられて、ぼくはこの作に惚れこんだ。自然風景もそのまゝ小説に作れるものだと思つた。新しい小説だと思つた。(瀧井幸作)

×

自然科学と文芸とが、これほど渾然と融合した作品を、私は未だ嘗て見ない。その構想や、表現からいつても「偉大なる王」は勝れた作品だと思ふが、生物学や生態学から見ても立派な文学である。

(宮本武之輔)

×

私はふとヒットラアはこの小説を読んだらうかと考へた。もし読んでゐなかつたら是非読むやうにと彼に勧めてみたい。ナポレオンを羨まぬ彼であつても、この中の「偉大なる王」王太のことは羨ましいと思ふかも知れない。

(高田 保)

北満の原始林や虎の生態描写、小説の構想や表現、そして王太の生き方などについて、当時の作家たちには好評であつたことがわかる。

一方、『満洲日日新聞』に連載された「虎」も当時満洲国で活躍した作家たちに高い評価を受けた。例えば、『満洲日日新聞』に連載中の昭和一五年八月三〇日、同じ新聞において「虎」の面白さ文運隆盛の康徳七年 八月創作合評(六)(12)という記事が掲載された。その記事は八月に創作された文学作品についての合評会の記録である。在満作家の吉野治夫、北村謙次郎、筒井俊一と訳者の長谷川濬が参加した。「虎」についての感想をそれぞれが述べており、「愛読しているよ。非常に面白い」(吉野)、「挿絵もいいぢやないか」(北村)、「満洲の新聞は現地の作家に小説を書かせればいい、満日のバイコフもよい」(筒井)といった好意的な批評が披瀝された。また、昭和一六年四月に発行された雑誌『協和』において、『満洲浪漫』同人の木崎龍は「バイコフは、ラ・プラタの博物学者の謙虚と感情とに多くを譲るが、森林をその棲息者の生活の綜合において捉へ得た故に、シートンの亜流たるを脱し得た」と述べている。そして「む

しろ私は、人間の生活と森林の生活との衝突点が、この作品のヤマである」と読み解いていた。

では、このように高い評価を受けた『偉大なる王』を長谷川濬がどのように翻訳したのかについて具体的に探っていきたい。

『偉大なる王』を翻訳した翌年の昭和一六年、彼は『動物文学』第七七集(13)に「虎ものがたり」を寄稿した。その文章の中で『偉大なる王』の翻訳について、次のように述べている。

僕が満洲国に渡つて足かけ十年の年月がながれた。最近、バイコフの「虎」(原名偉大なる王^ワ)を訳し得たのは心から喜ばしい事であつた。満洲文学の発展を祈る大陸日本人の一人として、満洲虎の生態を知つて、野性的な満足感を味はつたのは僕一人ではあるまい。

僕がハルピン馬家溝教堂街の一隅にバイコフさんを訪ねて「貴下の代表的作品は？」と訊ねた時、バ翁は言下に「偉大なる王」と答へた。虎を主人公にした動物文学はけだし世界で、「偉大なる王」あるのみだらう。

僕もバ翁のお陰で虎について色々な知識を得た。その上に、朋友田中鈞一君(現庄河県副県長)は北満の原始林^{タイガ}で虎二頭を射止めてゐる。田中君から直接虎ものがたりを聞いた。あれやこれやをつなぎ合はせて、虎漫談を書く。読者諸君つれづれなるままによまれん事を……。

引用文によると、『偉大なる王』を翻訳することによって満洲虎の生態を知ることになり、「野性的な満足感を味はった」という。また、田中鈞一という満洲の密林に興味を持っていた人からの助言があったこともわかる。田中は長谷川濬と同じく大同学院（満洲国官吏を育成する機関）第一期の卒業生である。当時の日本人若者は既に北満の原始林に興味を持つ傾向があったことが分かる。『偉大なる王』の出版が満洲国で期待されたであろうことも推測できる。

また翻訳の仕事は大変な作業であった。翻訳の一年後、長谷川濬は『新京図書館月報』第四六号に「翻訳雑感 ロシヤ語の場合」（14）を寄稿した。これによって彼の作業の苦労をうかがうことができる。

僕はバイコフの「偉大なる王」を訳した時、先ず困難を感じたのは満洲の地名、山の名、河の名でした。ロシヤ語で書かれてある場合、それを満語に直す事は甚だ困難である。次は動植物の名だ。僕は辞書やエンサイクロペデーに頼つたものの内心不安であつた。あの「虎」の文章は文学者のインスピレーション、或は情熱そのものの表現ではなく、老軍人が虎の生態を観察して書いた実話的な硬い文章である。僕は一週間でバイコフの癖を呑み込んで調子を合はせた。

（中略）

僕は「虎」の訳で辞書を一冊ばらばらに壊した。それ程僕は辞書を引いた。そして辞書に感謝し、辞書の編纂の仕事をやつ

て下さつた先輩に心から敬意を表した。

幼い頃からロシア語を学び、大阪外国語大学でロシア語を専攻した長谷川濬は、満洲に渡る前に既にロシア語の作品を耽読していた。しかし、相当にロシア語を学んでいた長谷川濬であっても、満洲の地名や河の名前、動植物名を翻訳することは困難であつたと述べられている。また、「生態を観察して書いた実話的な硬い文章」を日本語に翻訳する際にバイコフの癖を飲み込まなければならなかつたという。

翻訳の状況について、時間が経過してから自らの翻訳作業を当人がどのように振り返っているかを検討することにより、翻訳の実際や考え方をより鮮明にすることができると考えられる。戦後になつて当時のことを振り返つた資料を見ていくこととしたい。昭和三四年、雑誌『作文』（15）の中に次のような記述がある。

「偉大なる王」のほんやくは私にとつては相当の重荷であつた。日中は満映でとにかくも宣伝副課長の雑務に追い廻され、時あたかも李香蘭がうり出した頃であつた。会社のつとめを終り、家に帰ってから、ほんやくにとりかかり、何としても三枚半の原稿を毎日満洲日々新聞にとどけねばならない。「偉大なる王」は満日の夕刊に連載されていたからである。殆んど夜は二時、三時まで虎にとりつかれて神経はくたくたとなり、不明な処は友人のロシヤ人に、或はバイコフに直接たずね、殆んど神

経病患者のようになってほんやくに没頭した。エピソードは徹夜でやり通した。王大が死んだ時、私も死んだようになり、夜明前の机の前にぼんやりとあかつきの光を待ったことを今でも憶い出す。

『偉大なる王』の翻訳は「重荷」であつたと長谷川濬は述べているが、翻訳を連載していた三ヶ月は彼にとつて人生の中で大変充実した時期であつたかもしれない。長谷川が述べているように、翻訳することによって「人間が虎になつたり、虎が人間になつたり、自由自在に出入りしてゐる」(16)ことを実感できたのである。さらに、作中の主人公である虎が死んだとき、「私も死んだようになり、夜明前の机の前にぼんやりとあかつきの光を待った」とあるように、彼の精神は虎と一体化になつた状態であつたことを確認できる。翻訳の作業は相当大変であつたが、『偉大なる王』を翻訳することを通して、長谷川濬はこれまで全く経験していなかつた満洲の密林の世界を少し知るようになった。この経験は長谷川の作家としての想像力を膨らませたのではないかと推測できる。

長谷川濬の翻訳は同時代から高く評価された。作品連載中の合評会(前出)において、筒井俊一は「最初翻訳が固い嫌ひがあるので、長谷川君にも注意したんだが、此頃読んでみてあの固さは、あれは却つて北満の密林の描写には効果があるやうに思ひ出した」と発言している。また、『作文』同人の作家秋原勝二は後年、濬の訳について、「文章がね、良かったでしたよね。忘れられません。強烈な印象

ですよ。なんていうんでしょう。凛々しい文章でしたよね。僕たちはバイコフというより、濬さんの訳文に惹かれたと言つていい」(17)と評している。

以上の論述の中で確認できたように、ロシア語が堪能な長谷川濬であっても、バイコフの名作『偉大なる王』を翻訳したとき様々な工夫を堪えて苦勞しなければならなかつた。心身ともに作品の世界に入り込んだ長谷川濬が、作品を翻訳することによって「満洲の密林」や「虎」についての知識を蓄えるようになった。では、『偉大なる王』の翻訳が長谷川濬の作家人生にどのような影響をもたらしたかについて、次節で探つていきたい。

三、『偉大なる王』翻訳から得たもの

長谷川濬の履歴に少し触れると、彼は満洲国に渡つて、大同学院を卒業してからすぐに外交部の通訳官として綏芬河(18)に派遣され、昭和八年から三年間そこで過ごした。新京に戻つた後、昭和一二年ごろ、関東軍の命によつて組織された国境兵要調査隊第三班のメンバーに選ばれ、通訳として黒龍江を遡行し、国境調査の仕事に携わつた。このような仕事を行いながら文筆活動をはじめたのである。そして、辺境での見聞や体験をベースにして、「蘇へる花束」(19)や「烏爾順河」(20)「驚」(21)などの作品を次々と創作した。満洲の辺境地の密林や内陸湖などに赴き、大陸独特の風景を作品に取り

入れている。これらの作品からは、満洲の自然風景に対する彼の憧れの気持ちを窺うことができる。例えば、『偉大なる王』を翻訳する直前、『協和』(22)という雑誌に彼は次のような文章を書いている。

僕は新京より北満洲生活に足かけ八年も親しんだものであるが、その生活は我々日本人が内地で営んでゐる生活様式とは全く別なもので、むしろロシアの影響をうけてゐるのであるが、その生活が氣候風土に適してゐるせい、ちつとも不愉快でなかつた。日本人が満洲に来て、日本そのまゝの生活様式を墨守すると無理があるから自らこの土地に合つた風習が生まれていくのではないかと思ふ。(中略)僕は何処へ行つても、人生と自然とは調和してゐると思ふしそれを観察することがこの上なくたのしい。

この文章からは、長谷川濬が満洲の自然を憧憬し、人間と自然との調和を大事にしている心境が読み取れる。ところで、バイコフの作品を翻訳してから、長谷川濬はいっそう北方の風土に心をひかれるようになっていた。翻訳した翌年の昭和一六年に、雑誌『動物文学』に発表した「続虎ものがたり」(23)に、次のような文章がある。

バイコフの「偉大なる王」に於ける^{トシリ}佟利老人、アルセーニエフのデルスウ、ウザーラ(ゴリド族)老人の超人間的タイプを、

今にして私が発見し、知り得たのは一つの開眼であつた。佟利老人は實在の人物で、バイコフの会つた人間の中で最も特異な人間であらう。バイコフは佟利によつてアジア的宿命を啓示され、アジアの自然を尊敬し、彼の方向を指示されたと云つても過言ではあるまい。佟利老人が山林の中で、猛虎を猫のやうに愛撫し、虎も亦猫のやうに老人にじやれつく処を目撃したとバイコフが書いてゐる。これは有り得べき事実であらうか？バルザックの「砂漠の情熱」と同様な人間対動物の關係が文明の入らない世界にはあり得る事かも知れない。

(中略)

これ等の両ロシア人によつて紹介されたアジアの二老人こそ、東洋人として立派な精神と深い魂を持つた人間であり、彼等が遠来の白人に対し「道」を以つて接待し、愛情を以つて行動を共にしてゐる事に私は心から尊敬する。彼等二人には虚偽がない、文明の汚濁に染まつてゐない。そして二老人とも虎を神として、或は山の靈としてうやまひ、対話するあたりは山の神秘を感じて、超人間的な力さへ覚えるのである。こんな人間が満洲の山の中に生きてゐたといふ事も満洲を知る上に一つの啓示となり得るであらう。

ここに示されているように、長谷川濬は『偉大なる王』に描かれた一人の老人に注目し、「開眼であつた」と思った。その老人は自然本来の秩序を尊敬し、それと調和しながら共存しているという。長

谷川濬はこの老人の「超人間的な力」に感心したが、その「超人間的な力」とは人間の文明によって構築された枠から脱出でき、直接「虎」や「山の霊」と対話できる力であると述べている。さらに満洲の密林の中で暮す老人の生き方を知ることが、「満洲を知る上に一つの啓示となり得る」と長谷川は考えている。

『偉大なる王』に描かれた老人の影響を受けて、長谷川はあらためて北満の自然に生きている人間に興味を持つようになった。特に満洲の辺境地に生きているコサック（24）に興味を持って、コサックの小説を書くこうとしていた。

中心地を離れ、満洲の辺境である野性味が溢れたところへ行きたいと長谷川濬は決心したのである。『偉大なる王』を翻訳した二年後（昭和一七年）、長谷川濬は白系ロシア人の住み着いている三河地区（さんが）に行つて、コザックの小説を書くこうとした。この年、甘粕正彦の許可を得て満洲国の三河地域へ赴く。その時の情況について、長谷川の紀行文「海拉爾の宿」（25）には次のように述べられている。

二十七才で渡満した私は、満洲里、綏芬河に住み、妻や子を日本に帰国させて、黒河より漠河、吉拉林を超え、三河を横切り、アバガイド対岸にまで旅をつづけた。このアルグン紀行も忘れられない思ひ出である。アムール、アルグンの河岸の町々、筏夫、採金苦力、娼婦の群、鷺、河もや、西口子の夕やけ等々、幾度か私は北の妄想に追はれて苦しかった。三十七才の今日、私はまた独り三河に入る。これも止むを得ない。私は書きたい

から入るのだ。満洲の文学を作りたいから。

この広大な土地に我々が移り住み、諸民族と交り、苛酷な風土にまみれ、しかもこの土地を愛しつづけやうとする人人は、先づ動かねばならぬ。私は官吏でも政治家でもない。私は一個の作家としてこの大地に住む。これ以外に何ものでもないのだ。私は作家として働く。それが三河行となつて表はれた。

右の引用では、「アムール、アルグンの河岸の町々」や「鷺、河もや、西口子の夕やけ等々」などの自然風景にまなざしを向けるとともに、「筏夫、採金苦力、娼婦の群」などのような、もともと満洲の土地に生きている人々の姿も描かれている。それらの人びとも自然風景の一つとして彼の目には映っている。

満洲国では「民族協和」というスローガンが強く喧伝され、各民族はみな平等であることが強調されたが、実際には日本の文化が優位を占め、「農・林・水産又は鉱業・交通業等に従事する日本人等は、殆んど夫々の業務中の、幹部又は指導的地位に立つ」（26）。しかし長谷川濬の目には、満洲の人々は文化の優劣の別がなく、自分達のリズムで生きている、自然の一部分として映った。彼は満洲の自然を憧れていた。人間の手が加わっていない、ありのままの満洲の自然——密林でも、大地でも、動物でも、人間でもそうであった。

さらに、「官吏でも政治家でもなく」、「私は作家として働く」と主張しており、三河へ行く理由は政治と全く関係ないことを明確に述べている。すなわち、政治のために文学活動を行おうとするので

はなく、満洲の自然に憧れる一人の文学者として、満洲の自然と同一化して、文筆活動を行いたいと主張しているのである。

『海拉爾の宿』には、コサック（引用文中では「カザツク」と記している）文学を書く理由も記されている。

私は北辺の自然と人間を書きたい。狂暴な自然と闘ひつづけるカザツクの群を生々しく書きたい。半野蛮人で亜細亜の血を引くあのアルグンカザツクの生命力と恋と歌と狩猟とを……。

そこには広大な草原と河と部落と開墾地がある。狼が吠え、風がうなる。花の香りにむせるすばらしい夏の野営地がある。あゝ私はこんなものに子供のやうに憧れて、家を出たのだ。

『静かなるドン』の魅力は私をいらつかせた。ショーロホフの取りました面が、私に強大なロマンチズムを与へた。『畜生！俺だつて書ける！』私はつかれた人のやうに一月二十九日、新京をはなれた。

長谷川濬は「半野蛮人で亜細亜の血を引く」生命力に憧憬の念を抱き、未開地の中に入ろうとした。狂暴な自然と闘うコサックの群れを実見し、それに憧れを抱き、その生活を体験したいと考えたのである。長谷川濬が文学で表現しようとする対象は、未開の自然であり、野性味溢れる生き方である。

コサックの居住地である三河へ出る前に、長谷川濬はわざわざバイコフが住んでいたハルビンに寄つて、バイコフと面会した。バイ

コフは長谷川濬が三河へ行くことを喜び、「両手をひろげ『おお息子か！』と言つて」長谷川濬を抱擁した（27）。そして、励ましとして次のような言葉を濬の手帳に書いてくれた。

自然は人間のよき友であり、教師である。

自然は人生に必要なあらゆるものを与へる。魂にも肉體にも。自然に学べ、そして己が幸をその中に見付ける事だ。

一九四二年一月三十一日

ハルビンにて『偉大なる王』の作者バイコフ（28）

昭和一七年一月二十九日に長谷川濬は首都の新京を発ち、三河へ出掛けた。現地人と同じように、大きく分厚な毛皮外套と長靴で身を包み、人間か動物か区別出来ないような格好をして辺境へと旅立った（29）。そして、三河での体験を紀行文『海拉爾の宿』、「或るマクシムの手記」（30）、「早春」（31）、「バルヂヤコン草原にて」（32）などの作品に書き遺している。大興安嶺北麓の厳寒と戦いながらも、彼が夢を追いかける快感を覚えた日々の模様がこれらの作品から窺うことができる。『海拉爾の宿』は昭和一七年三月の『作文』第四五輯に発表され、「早春」は同年七月に刊行された『藝文』第一巻第八号に掲載されている。「或るマクシムの手記」は昭和一七年二月の『北窓』第四巻第五号に発表され、他の紀行文は長谷川濬の作品集『烏爾順河』（33）の第二部（紀行集）に収められている。

また、長谷川濬は『偉大なる王』を翻訳することによって、動物を描く文学に関してますます関心を持つようになった。『偉大なる王』を翻訳した翌年の昭和一六年、平岩米吉主宰の動物文学会に入り、会誌『動物文学』に寄稿した。戦後日本に戻って、しばらくの間ほとんどの文筆活動を停止したが(34)、帰国してから一〇年後の昭和三二年、再び『動物文学』への寄稿を再開した。すなわち、昭和一六年から昭和四九年濬が亡くなる二ヶ月前まで、『動物文学』と関わることになった。

戦後の長谷川は『動物文学』を拠点にして作品を発表しつづけたが、ほかの雑誌にも、動物に関する文学作品を次々と発表した。例えば、『大衆文学研究』第一二号(昭和三九年)に「動物文学雑感」を、『作文』復刊第三集(昭和四〇年)に「虎」を寄稿することがあった。またパウストフスキーやプリシヴィンの童話の翻訳に努めたり、アルセーニエフの「密林の邂逅」(35)の翻訳に携わったりした。戦後の長谷川濬はおおよそ動物文学をめぐって文筆活動を展開し、活躍していた(附録「長谷川濬の年譜」を参考)。動物を描く文学にこれほど情熱を注いだのは、満洲国でバイコフの『偉大なる王』と出会い、翻訳したことがきっかけとなっていると考えられる。

結

大阪外国語大学ロシア語学科を卒業した長谷川濬は、友人の別役憲夫から『偉大なる王』を贈られ、その作品と巡りあった。様々な

経緯を経て長谷川濬は『偉大なる王』の翻訳者になったが、翻訳の作業は難しい仕事であった。『偉大なる王』を翻訳することによって、長谷川濬は全く経験していなかった満洲の密林の世界を少し知るようになり、満洲の自然にいつそう憧憬の念を抱くようになった。満洲国北辺の自然と人間を書くために、長谷川は新京を離れ、三河へ赴いた。三河での体験は小説や記行文の形として書き遺されている。また、『偉大なる王』を翻訳することで、長谷川濬は動物を描く文学に関心を持ち、雑誌『動物文学』に加入し、満洲国時代から戦後にかけてずっと『動物文学』に寄稿し続けた。長谷川が戦後執筆した「バイコフのこと」(36)という随筆文の中に、次の一節がある。

私の胸にバイコフを通して一匹の虎が棲むようになった。それは満洲山野の野生のシンボルで、私は私なりに、虎をロマンとして描いてみたいと、数年来念じているが一向に書けない。私の虎は、密林の奥深くかくれていて、姿を現わさないのだ。何とかして虎を書いてニコライ・アポロウィッチ・バイコフの霊をなぐさめたい。

引用文に示されたように、長谷川濬はバイコフを通して「虎」、「満洲山野」、「野生のシンボル」に対して興味を持ち、自分の胸に「虎が棲むようになった」ように感じた。長谷川は「虎をロマンとして描いてみたい」という願望をもったが、満洲国崩壊のあと、彼は永遠に満洲の密林を離れてしまい、二度と満洲の密林の中の「偉大な

る王」と出会えなかったのである。戦後の彼は満洲国の何を偲んで創作活動が続けたか、満洲国の時代を振り返って見る時長谷川は何を考え、それをどのように自分の作品に書き込んだかなどといった問題については、今後の課題として考察していきたいと考える。

【注】

1. 昭和一五年六月七日『満洲日日新聞』（大村益夫・布袋敏博編『旧「満洲」文学関係資料集（二）』所収、平成二二年、大村研究室）
2. 連載は昭和一五年『満洲日日新聞』六月二四日の夕刊から一〇月三日の朝刊まで、計八五回である。
3. バイコフ『虎』長谷川濬訳（満洲日日新聞社・大連日日新聞社、昭和一六年）。
4. 「ザイツエフ」は当時のハルピンで有名なロシア人が経営する書店である。主にヨーロッパで出版されたエミグラント本を扱っている。ザイツエフは店主の名前であり、屋号は「ルーシ」である。エミグラント本を扱っている書店は他に満洲図書公司（古本屋）やナーシ・プーチ社がある。バイコフの作品は千部出ていると思われる。（『観光東亜』第七巻第六号（日本国際観光局 昭和一五年六月）を参照）。
5. 大正昭和時代の洋画家、小説家。大分県出身。明治三五年生まれ。東京美術学校（現東京芸大）で岡田三郎助に学ぶが中退、新愛知新聞の漫画記者となる。大正一一年帝展初入選。かたわら佐藤春夫に師事し、昭和一二年「地中海」で芥川賞受賞。三三年長編小説「白い壁画」を刊行した。昭和四五年死去。昭和一五年満洲国へ視察に行ったとき、長谷川濬と知り合ったという。
6. 「富沢有為男さんのこと」長谷川濬『作文』第八〇集（作文発行社 昭和四五年七月）。
7. 「日本人作家の印象」バイコフ（上脇進・訳）『藝文』第一巻第一号（藝文社 康徳九年一月）。
8. 『作文』第二三〇輯（昭和六〇年六月）に収録されている大野沢緑郎の一文によると、バイコフの『偉大なる王』の自筆原画六枚が昭和五九年六月八日に富沢有為男夫人芳枝氏によって、日本近代文学館に寄贈されたという。
9. 「虎と酒と小便と」奥一『人吉文化』第三六・三七合併号「上脇進追悼号」（人吉文化研究会 昭和三八年八月）。
10. 富沢有為男による、バイコフ『母なるカーリーナ』（堀場安五郎訳・講談社 昭和三四年）の序文を参照。
11. 注10に同じ。
12. 八月創作合評（六）『満洲日日新聞』（満洲日日新聞社 昭和一五年八月三〇日）。前掲大村編著に収録。
13. 「虎ものがたり」長谷川濬『動物文学』第七七集（昭和一六年一月）。
14. 「翻訳雑感 ロシヤ語の場合」長谷川濬『新京図書館月報』第四六号（新京図書館 康徳七年十一月）。
15. 「バイコフのこと」長谷川濬『作文』七二集（作文社 昭和四三年二月）。
16. 注12に同じ。

17. 大島幹雄『満洲浪漫 長谷川濬が見た夢』（藤原書店 平成二四年九月）。引用文は大島氏が秋原氏をインタビュした記録による。
18. 綏芬河は、水源を中国黒竜江省東南部、吉林省東部に持ち、ロシア領内へ流れ、ウラジオストク付近で日本海のピョートル大帝湾に注ぐ川である。
19. 「蘇へる花束」初出は『満洲行政』一月号（満洲行政学会 昭和一三年一月）。長谷川濬の作品集『烏爾順河』（国民画報社 康德一一年一月）、『満洲文芸年鑑』昭和一四年版（葦書房 平成五年九月）に収録される。
20. 「烏爾順河」初出は『満洲作家選集』（『満洲浪漫』特輯・昭和一四年一月 満洲文祥堂）後に『満洲国各民族創作選集』第一集（昭和一六年 創元社）に収録された。また昭和一九年に「烏爾順河」を書名として、数篇を加えた短篇集が刊行された（康德一一年 国民画報社）。『昭和戦争文全集1 戦火満洲に挙がる』（昭和三九年 集英社）にも所収されている。
21. 「驚」初出は長谷川濬の作品集『烏爾順河』（国民画報社 康德一一年）。
22. 「北満の魅力」長谷川濬『協和』第一四卷第三号（昭和一五年二月）。
23. 「続虎ものがたり」『動物文学』第八〇集（昭和一六年八月）。
24. コザックはまたカザーク、カザーク、カザックとも表記される。もとの意味は「向こう見ず」とか「自由な人」を意味するチュルク語からきている。一四世紀以降ロシア中央部から南東部へ流亡し定住した農民集団。一六世紀頃に自治的騎馬戦士集団を形成し、騎兵としてロシア政府に仕え、カフカス・中央アジア・シベリア・極東への植民、辺境防備に当たった。
25. 「海拉爾の宿」長谷川濬『作文』第五四輯（作文発行所 昭和一七年三月）。
26. 『満洲読本』昭和一二年版（東亜経済調査局 昭和一二年）。
27. 注15に同じ。
28. 注15に同じ。
29. 注25に同じ。
30. 「或るマクシムの手記」初出は『北窓』第四卷第五号（満鉄哈爾濱図書館 昭和一七年二月）。
31. 「早春」初出は『藝文』第一卷第八号（芸文社 康德九年七月）。
32. 「バルヂヤコン草原にて」初出は長谷川濬の作品集『烏爾順河』（国民画報社 康德一一年）。
33. 長谷川濬『烏爾順河』（国民画報社 康德一一年）。
34. 大島幹雄著『満洲浪漫——長谷川濬が見た夢』（藤原書店 平成二四年）と川崎賢子著『彼等の昭和』（白水社 平成六年）に掲載された年譜による。
35. 『動物文学』一六九集〜一七六集の八回にわたってアルセーニエフ「密林の邂逅」を翻訳連載（昭和四一年六月〜昭和四三年三月）。
36. 注15に同じ。

第二章

満洲国に生きる文学者の一側面

―長谷川濬「海と湖と人間と」をめぐって―

序

長谷川濬は昭和二〇年、雑誌『藝文』の新年号に小説「海と湖と人間と」(1)を発表した。その小説は、満洲国に赴任している主人公佐野の経験した出来事をめぐって、満洲国で職業を持ちながら作家として活動する人達の生活状況を描いた作品である。以下、あらすじと記す。

ハルピンに単身赴任している佐野のもとに、妻からの手紙が届き、従弟の戦死の訃報が知らされた。弟の死をめぐって、佐野は故郷の海を思い出す。佐野は中学の頃、漱石の「心」を耽読して文学に憧れる。ところが父に「文学は趣味でいい」、「もっと手近な周囲を見なさい」と説諭され、やむを得ず文学の道を断念し、東京の農科専門の学校に進んだ。卒業した彼は、郷里の近郊にある農事試験場に二年勤めたが、飽き足らず、「何か新しい仕事と人生がはじめられる」のではないかと、満洲国に渡った。渡満して官吏となった彼は、仕事場の人間関係に疲れ、一方、心の底に潜めた文学とか芸術に対する情熱を絶えず意識し続けている。ある日、同じく職業をもちながら

ら作家活動をする前島が佐野を訪れた。文学を職業にするべきかどうかについて二人は争論し、喧嘩となる。佐野は周りの作家の文学観に差異を覚える。佐野は満洲国の作家たちが文学に専念できない「二重生活」の状態で不満を覚えながら、彼らの不勉強ぶりや、作品に対する批評の場がないことについて批判の態度を示す。佐野は一人のロシア人作家に啓発されて、自己の内面美を発見するため孤独に徹するべきだと考えるに到る。そして、ホロンバイルと呼ばれる、内モンゴルの草原へ旅に出る。草原にあるダライ湖という湖に向きあった佐野は、その自然の偉大さに圧倒され、ただ一人ダライ湖上のボートに坐す。そして、あらためて自分の求める〈満洲文学〉とは何かを思い至る。

この小説についての先行研究は存在しない。本稿ではこの小説を取り上げて、テキストにおける主人公の視点によって提示された文学者の悩みを抽出する。また、当時の資料と照合しながら、満洲国における出版の状況、及び当時の文学者の生活状況について探ってみたい。更に小説で描かれた人物の考えと対照しながら、作者の長谷川濬が志向した文学とはどのようなものであったかを検討していきたい。

一、満洲ジャーナリズムと文学環境

小説の主人公である佐野は渡満して官吏の仕事をしているが作家として生きている。彼は満洲国ならではの文学を作ろうと思うが、現

実生活の中でたくさんの挫折を覚えた。その挫折の一つは、満洲国には専業作家がいなくて、作家は職を持ちながら文学創作をしなければならぬことである。小説の中に前島という登場人物がいる。彼はある会社の課長を務めながら作家活動を行っている。佐野も前島も職業持ちの作家であるが、二人はそれぞれ異なる文学観を持っている。前島は他の仕事と文筆を掛け持ちにする「二重生活」に賛成である。それに対して、佐野のほうは文学を専業化すべきだと主張している。二人の意見の食い違いについて、小説の中では次のように描写されている。

前島は熱い茶をふうふう吹き乍らのみ始めた。

「俺も忙しいよ。何しろ会社の仕事は山ほどあるし、片端から片付けて書くんだからな、二重人格さ」

前島は会社の課長を勤めてゐる中堅分子の会社員である。

「よく勤まるね。俺には出来ん、そんなこと……」

「満洲国は会社員が作家、官吏が作家だ。現状はね」

「だからいゝ作品が出来ないのだ、出社時間を気にし乍ら書くなんて意味ないね。文学に没入出来んぢやないか」

「俺は夜書く。昼は課長だ」

「文学は夜作られるか、バルザックみたいだな、しかし無理だね。昼間すばらしいインスピレーションが湧いても課長さんは課長さんで収まるのか」

「うん、仕方ないさ。書類を放り出して家へ帰ったり、原稿

紙をさがさ出せるのか」

「だから、いけないよ。文学はそんなものぢやないと思ふな

「ちがふ。文学と会社生活は一つだよ。何も文学しますつてどちこもるのが文学ぢやない。何をやつても文学は文学さ、つまりその人の個性と才能の問題だよ」

前島は空のコツプを佐野の前に突き出した。

「お前は文学を職業化すれば、いい作品が出来るつて云ふのだらう」

と前島はたたみ込んで訊ねた。

「いや、職業とは云はん。ほんとに文学に一生を賭けたら、勤めて居れないと思ふのさ。芸術家は贅沢な人種だ。そして貴様の云ふ通り個性と本能さ、それを生かすには二重生活は無理だ。いちいち時間にしばられちやいい仕事が出来んよ、絵かきを見る、光線と課長とどっちが重要だ」

引用した内容に示されたように、佐野と前島は文学を職業化するべきかどうかの問題をめぐる論争した。「満洲国は会社員が作家、官吏が作家だ」という現状に対して、前島は平気でそれを受け入れる。文学と社会生活は一つのことであつて、矛盾してはいないと前島は認識していて、逆に言えば、文学だけに専念して、作つた文学は文学ではないと主張するのである。一方、佐野のほうは文学に専念すれば良い作品ができそうだと思つていて、職業を持ちながら文学者として創作活動を行う「二重生活」に対して否定の態度を示す。

二人は文学創作について相異なる態度をとっている。にもかかわらず、満洲国の作家たちは文筆活動に専念することができないのが現状である。その最も大きな要因は原稿料が少ないことであることが作中において佐野と前島の会話によって説明されている。

「俺はな、妻と子を持つている。彼等の生活の保証は義務だ、社会人として……。文学ぢや食へんよ」

「若し食へたら、どうする、原稿料や印税で」

「満洲国は芸術家の生活を保証する程の印税や原稿料は出さへんよ。それ程、芸術家を尊重せんよ。俺の原稿料はビール代か子供の靴下代位のものさ」

「貴様は原稿料かせぎで文学をやるんぢやあるまい。立派な芸術作品を作りたいやむにやまれぬ衝動で書くんだらう」

「勿論さ、しかし、原稿料は当然ついて廻る現実さ、一つの保証だよ、当然考へることだよ」

引用した文章の中で、前島は現実の面において原稿料が少なく、それに頼って生活ができないことを告白した。一方、佐野のほうは立派な作品を作ることとは原稿料と直接に関係しない、心構えの問題だと主張している。二人の間に、文学創作に関する態度と着目点に差があることで、佐野は孤独と挫折を感じていた。

佐野は作家に専念できない生活の現状に不満を持ちながら、また身の周りの作家に対して不満を持っている。小説の中に次のような

佐野の心理描写がある。

佐野は満洲の作家にも失望した。芸術的作家は見当らない。「ものを書く」作家は居ても、珠玉の如き芸術作品を示す作家にめぐり会ってゐない。また文学に命を賭ける作家もゐない。文章に対する敏感が欠如してゐる。いやしくも作家たる者は立派な文章を書くべきである。この修練がない。一文が活字になることで直ちに作家になり得る頗る安易な文壇と安易な創作生活。作家を育て上げるきびしい批評家の居ないこと、貧しいジャーナリズム。作家同志の文学喧嘩がないこと。不勉強。これ等が佐野には不満であつたが、彼自身は五階の事務所から外界を眺め、馬家溝の偶居に寝そべつていらいらするのみである。満洲に来て七年たつた。大東亜戦争だ。一切の尺度が外され、ばらされ、満洲国は太平洋に目を向けた。きびしい日常生活が犇と民衆を取り囲み、じりじりと圧し始めた。

引用に見るように、佐野は、在満作家たちには文章を書く修練が足りないこと、満洲国には作家を育ち上げる環境が備わっていないこと、作家同士お互いの交流が不十分であることなどに関して、不満を抱えている。「佐野さんは文学的よ、文学的つて変な表現ですけど、何か高い魂みたいなものを探してるんですわ」と、同僚谷口女史の言葉によって、佐野と周りの文学者との志の違いが指摘されている。前島の「文学と会社生活は一つだ」という意見に対して、

佐野は作家として芸術を一筋に追求すべきだと主張している。「何か高い魂みたいなのを探してる」姿勢を示した佐野は、周りから疎外されてしまい、孤独感に打たれる。

二、満洲国における専業作家の問題

「海と湖と人間と」の中で、佐野は周辺に専業作家がいないことに悩まされるが、当時の満洲国の状況を調べてみると、小説の中に提示された「専業作家がいない」という事情は実際の満洲国文壇の実態と合致しているところがある。当時満洲国で文学活動を行った浅見淵は「満洲文学管見」(2)という文章の中で次のように述べている。

「作文」の同人たちはほとんど満鉄系の社員で、「満洲浪漫」の同人たちは国都新京に集つて来てゐる、いづれも職業を持つた若き知識人である。すなはち満洲にはまだ職業作家といふものは存在せず、満人作家・在満作家を通じていづれもアマチュア作家である。

浅見淵は、在満の二大文芸雑誌『作文』と『満洲浪漫』の同人たちがみんな職を持ちながら作品を執筆している当時の状況を提示している。満洲国に専門作家は殆どいないことが浅見の記述によって証明できる。さらに、彼は「満洲の文学・文化運動」の中に、「最近

と雖も、弘報処から藝文指導要綱なるものが出て、文化振興策から暗に職業作家の輩出を慫慂してゐるものの、僅かに『春聯』の作者北村謙次郎ぐらゐで、未だにその域を脱けてゐない」と満洲国に専業作家の数が乏しい状況を述べている(3)。また、当時満洲国に渡つていた作家山田清三郎は専業作家のことについて、昭和一六年一月七日の『満洲日日新聞』(4)において、次のように記している。

これでは、作家も、張合ひが少ないわけで、日本から視察に来る作家は多いが、一人として満洲に定着しようとするものゝないのも、無理からぬことだと思ふ。現に私なども、味だに東京の留守宅を引払ひかねてゐるのは、家庭の事情もあるが、一つには満洲では、作家生活が成立たないからでもあるのである。私はよく一つ話にするのであるが、私が、未だ満洲に単一なる旅行者としてゐた頃には、満洲の新聞や雑誌から受取つた私への原稿料は、普通よりはずつとよかつたものである。それは私を日本の文学者として遇してゐたからであるに相異なく、それが今日のやうに、満洲に一応落ちついてしまふと、私にもきた「満洲並み」の原稿料しか与へられないことになつたのである。

私事にわたるつまらない話をして、申訳がないが、ここにも、満洲が、地元の作家たちをどのやうに遇してゐるかの一端が、窺へると思う。

山田清三郎の文章によると、満洲にいる地元の作家は原稿料収入が少ないため、作家生活が成立たないというのが現状であったことが分かる。山田の記述と「海と湖と人間と」の中の前島の台詞「満洲国は芸術家の生活を保証する程の印税や原稿料は出さんよ。それ程、芸術家を尊重せんよ。俺の原稿料はビール代か子供の靴下代位のものさ」とを合わせて読むと、作者長谷川濤が、専業作家がいな

い文壇の様子を小説の中に書き込んだ事情がよく見える。

職業作家が少ないという問題は当時の出版状況と繋がっている。

当時の出版状況や原稿料の支払いについて、前に引用した浅見の文中に出てくる北村謙次郎は「職業作家と勤労者文学の問題」(5)において、次のように述べている。

満洲で出版業をもむくろむことなど、夢にも考えられない時代だった。出版するとしても、ごく狭い、限られた範囲のものばかりで、文芸物に手を染める冒険など、誰ひとり敢てするものはなかったわけだ。それがあと二三年すると、急に文芸専門

の出版社が、そこにもここにもウヨウヨ輩出するようになるのであるから、時代の変遷というものも不思議である。とにかくそういった時代に、何ら報酬を期待せず、こつこつ自分らの手だけで、まがりなりにもこの種の事業が実現したというのは、その衝にあたる人々が他に商売をしているとか、或いは満鉄その他から給料を受け、生計に苦しむことがなかったから初めて出来たので、このことはひいて満洲の文芸というものを、特殊

な色調で染め上げる結果を招いた。

生計に苦しまずに創作生活が送れるということは、或る意味では理想的なことである。しかし、勤労しながら創作するというのはどう考えてもこれは二重生活である。何らかの意味で、矛盾や桎梏の起こらぬ筈もないし、自然と創作生活に遠ざかるということも起こりがちであろう。

『満洲浪漫』の編集者であった北村謙次郎の右の引用においても、当時、出版の報酬で生計を維持することは非常に難しく、他の給料を受けて生計を確保しながら文筆活動を行うしかない状況が述べられている。資料に示したように、職業を持ちながら創作を行う「二重生活」は満洲国文芸界の特殊なところである。「海と湖と人間と」の中の登場人物も「俺は夜書く。昼は課長だ」という二重生活を持つ人間である。資料と小説を対照して読むと、満洲国で生きる文学者たちの生活状態を垣間見ることができる。

また、昭和十六年四月に作家川端康成が満洲を訪ねており、満洲国現地の作家たちが川端を囲んで満洲文学に関する座談会を行ったことがある。それについての記録は『満洲日日新聞』に四回にわたって連載された。そのなかの四月一三日の記事に、原稿料に関する記録が残されている。

川端 (前略) この原稿料といふのが一番難問ですね、現在満洲で一番高い稿料といふのは幾ら位ですか。

筒井 満洲グラフが一番よくて三円です。

田中 そんなもんじゃないでせう、もつとよくはないかな。

筒井 いえ確かさうだつたと思ひます、満日が二円払つてゐます、勿論四百字詰ですが。

川端 その程度だとすると、現在の三倍以上にならないと、作家の生活といふものは成り立ちませんねえ。

筒井 現在では二円程度がまづいい方です。

北村 原稿料がそんな具合ですから、作品が本になつて、さて印税となると問題になりません(6)。

座談会の内容に示されたように、当時一番原稿料を高く支払つてくれるのは『満洲グラフ』(7)という雑誌で「三円」である。引用文中の「満日」は『満洲日日新聞』(8)のことで、四百字詰め「二円」となる。引用した資料に書かれた「円」は日本の「円」と想定する。『満洲グラフ』も『満洲日日新聞』も出版社は日系の会社なので、日本円で原稿料を支払っていたわけである。また、日満経済一体化を進めるため、満洲国で発行された国幣は日本円との為替相場は一对一という対等関係にあった(9)。また昭和一四年の『中外商業新報』(10)には、当時の新京市における標準小売価格の主たるものが次のように挙げられている。

▲醤油(十六リットル樽入) 七円 ▲パン粉(三百五十瓦入) 二十一銭 ▲押麦(七百五十瓦入) 三十六銭 ▲鮭(曙印、一斤換算)

十九銭 ▲北海道バター(一封入) 二十十銭 ▲ソース(二合瓶) 四十一銭 ▲桜正宗、菊正宗、白鶴、白鹿、月桂冠、大関(いづれも一・ハリットル入瓶詰) 三円 ▲葡萄酒(一瓶) 二円 ▲ビール 四十一銭 ▲サイダー(三矢) 二十二銭

つまり、『満洲グラフ』の四百字詰め原稿料三円は一・ハリットル入瓶詰の「桜正宗、菊正宗、白鶴」などといったお酒の値段にほぼ等しい。さらに、北村謙次郎の証言(11)によつて、満洲国の国策会社満洲映画協会は月百三、四〇円くらいのものであることも分かる。三円の原稿料なら、もし七〇枚も書けば、満映社員と同じぐらいの月収はなつたわけである。しかし当時の満洲では、「満洲グラフ」ほどの原稿料は出せなかったし、メディア未成熟の満洲では商業雑誌の種類も少なかったので、作家業を成り立たせることは至難であつた(12)。

満洲国に専業作家があまりいない状況については、そのころ、さまざまな論争が見られた。そのなかには「専門作家はなくちやいけません、たゞどの型に属するかゞ問題なのでせう」という意見がある一方、「満洲には独立職業作家の必要なしと反対する論者も」あつた(13)。例えば、浅見淵は「満洲文学管見」(14)において次のように述べている。

在満作家の文学特色はどこにあるかといふと、さきにも触れたやうに、ほとんどがアマチュア文学である。(中略)

前に書いたやうに、在満作家はどの作家も職業を持つてゐる。しかも、その職業は内地とちがつて一種の夢想なり理想を孕んだ、茫漠たる自然や錯綜した異民族を背景にしてゐる満洲の現実の上に立脚したものである。内地の文壇でひと頃叫ばれた地方主義文学、それがスケールが大きくなつて、なほかつ前記の若々しさや野性を伴つて將に成熟せんとしてゐるところに、在満作家文学の大きな特色がじつにあるのだ。それから、ヒュウマニズム、エキゾテイシズム、現象に対する敏感性、かういったものもその特色を増やすに役立つてゐるのである（15）。

また、北村謙次郎は木下杢太郎の作品を例として「立派な作家であるに相違はないが、どこか一点、ディレッタントの匂いがひそむとは否めない」と、職業を持ちながら作品を作る文学者の弱みを指摘した。彼の意見は以下のようなものであつた。

それは何も氏の本業が医者であるということから、先入主として受けとる感想とばかりは言えない。作品自体に、どこか作り物めいた弱さがあるので、これは氏のみに限らず、文学を副業（？）視すると、とかく起りがちな現象なのだ。

その木下氏が、古い大正から昭和初期のころ、満洲文学の独自性を説いているのは面白いが「生活を保証して」とあるあたりに、文学観の甘さが見られなくもない。そして満洲では、上述の年鑑あたりにも見られる通り、上は満鉄副総裁、会社々々

などから、下級サラリーメン諸君にいたるまで、一応は「生活を保証」されがら文学をやり、年鑑はいわばその総決算とも見られるものであつた。

とすれば「生活を保証」されながら、製作される「満洲文学」というものが、ほぼどのようなものであり得るか、このへんから見ても一斑が察しられるというものではなかつたか？

後年になると、これら執筆者の中には公然「勤労者の文学」を主張するものもあらわれ、それにはどうにも腑におちない節が多く、いつも「それでいいか？」と筆者は自問自答することが多かつた（16）。

浅見淵は、満洲国に専門の文学者がいなく、ほぼアマチュアな文学者ばかりであるという現状が満洲国文壇の特徴であると認識している。彼の意見によれば、満洲国で仕事をする人は「一種の夢想なり理想を孕」むと同時に、自然や異民族を背景にした「満洲の現実の上に立脚」できる。それでこそ日本国内の文学者と違う視点に立つことができ、「ヒュウマニズム」、「エキゾテイシズム」的な作品を創作することができる。しかし、北村謙次郎は本業医者である木下杢太郎の作品を例として「作品自体に、どこか作り物めいた弱さがある」、「これは氏のみに限らず、文学を副業（？）視すると、とかく起りがちな現象なのだ」と指摘している。

満洲国に専門作家がいらないことに関する当時の意見のすれ違いは、小説「海と湖と人間と」の中の佐野と前島との対立と類似している。

右に引いた当時の資料と小説「海と湖と人間と」を比較して読むと、小説の主人公である佐野が作家生活に抱える不満は作家たちの多くの生活実態と合致するところが少なくない。この小説は満洲国に専業作家がいない情況、文学者の生活が厳しい情況のもとにあることを反映したのではないかと考えられる。

三、芸文統制への抵抗と加担

小説において、佐野は「貧しいジャーナリズム」、「作家同志の文学喧嘩がない」こと、作家の「不勉強」についても不満を抱えている。当時の文壇情況から見ると、満洲国には、そもそも作家達が集まって切磋琢磨できるような交流の場が少なかった。さらに昭和一六年三月、満洲国弘報処により「芸文指導要綱」が公布されて、満洲国の文壇はかなり出版の統制が厳しくなったのであった。文化諸団体の統制・統合が急速に進められ、「満洲文学」のさまざまな彩りは一色に収斂されていった。

「芸文指導要綱」は、「趣旨」、「我国芸文の特質」、「芸文団体組織の確立」、「芸文活動の促進」、「芸文教育及研究機関」の五つ項目に分れ、建国精神を基調とする芸文の創造と、その育成および普及について示したものであった。起草にあたった弘報処長武藤富男は、三月二三日に開かれた要綱発表の芸文大会で「満洲国の文化政策」と題する講演を行った。武藤は「物的建設に並行して精神的建設工作に力を注がなければならない。この指導要綱は精神的憲建設工作

の方針を示したものであります」(17)と、建設工作における精神面の立ち遅れをなんとかして取り戻そうという考えを強調している。更に「今日まで、芸文の方向を示し、芸文に対して官民総力を挙げてその発達普及に乗り出すといふ体制をとらなかつたことは確かに政治の欠陥であります」と、文芸組織化の方策を強力に押し進めような意図を示している。「芸文指導要綱」の「芸文団体組織ノ確立」の項目は次のように挙げられている。

1. 芸文家ノ創作活動ヲ旺盛ナラシメ相互ニ切磋琢磨セシメ併セテ後進ノ指導訓練ニ資スルヲ為ス文学、音楽、美術、演劇ノ各部門別ニ専門家ヲ以テスル鞏固ナル団体ヲ結成ス

右団体ハ音楽、演劇ニ於テハ音楽団又ハ劇団ヲ構成分子トシ文学、美術ニ於テハ個人ヲ構成分子トシテ之ヲ結成ス右団体ハ原則トシテ各部門ニ付一個トシ重要ナル地ニハ支部ヲ置ク

(中略)

2. 芸文ノ綜合的發展ヲ図ルヲ為各団体ヲ構成分子トシ満洲芸文聯盟(仮称)ヲ結成ス

「芸文指導要綱」に示されたような、各文芸組織を満洲芸文聯盟という組織に統合する方策は数ヶ月後に具体化する運びとなった。弘報処は芸文聯盟を組織するにあたって既成のいくつかの文学団体と個別に交渉した。当時在野の文化綜合団体であった満洲文話会は、その最も重要な目標とされた。

満洲文話会という在野の文化綜合団体が創設されたのは昭和一二年のことで、発祥地は大連であった。同時に奉天、新京に支部が設けられ、それぞれ活動を開始していた。『満洲浪漫』の主筆で、長谷川濬との繋がりが深い北村謙次郎は昭和一二年、新京に住むようになってまもなく、文話会の例会に出席した状況を『北辺慕情記』に次のように記載している。

大同大街に面した大興ビルの地下室にある青葉グリルというので開いた。このビルは生面が憲兵司令部で、通りひとつ隔てて関東軍司令部があつた。憲兵隊と軍司令部のお目こぼしにあずかつたような恰好で、地下工作をやつていたという大ゲサになるが、お茶とお菓子でカンタンな文学美術論などを上下していたにすぎないから、いたつて罪は軽いのだ。(中略) このころ例会によく顔を見せた人に、金沢寛太郎、今井一郎、三枝朝四郎、今村栄治、松本光庸、長谷川濬、美濃谷善三郎、江草茂、藤沢忠雄、たまに木崎竜(仲賢礼)、坪井与、晶埜ふみ、矢原礼三郎、山崎末治郎、新井練三などの諸氏があつた(18)。

北村謙次郎の回想によると、満洲文話会の例会は、憲兵司令部と関東司令部に挟まれたビルの地下の一室でいつも行うが、雰囲気的には「茶とお菓子でカンタンな文学美術論などを上下していたにすぎない」という少しゆとりがあるものであった。例会によく見られるメンバーとして、長谷川濬の名前も挙げられている。ところで昭和

和一六年に公布された「芸文指導要綱」により、『満洲浪漫』を含む各種の雑誌は一気に統合されていき、文化団体である文話会も再編成された。昭和一六年七月二十七日、満洲芸文聯盟傘下の機関として、満洲文芸家協会が正式に設立され、文話会本部は解散となった(19)。

北村謙次郎は続けて、「文芸家協会の準備委員は、だいたい文話会役員だった人々ばかりである。が、彼らは比較的『政府』に親しく近づきつつあつた人たちであることが、よく分る」(20)と述べている。文芸家協会の設立大会に、北村は欠席した。北村は文芸家協会の設立について次のような態度を示した。

文学の専門化に、不賛成の筈はなく、非常時体制に疑問があるわけもなかったが、依然として寛城子にこもり、孤独の文筆を弄ぶ身には、政府のお声がかりといった大ゲサな身ぶりが、どうにも身に染まぬ感じだつたのだ。

分かるように、北村は非常時体制の下に進められる文芸統制に抵抗感があつた。「依然として寛城子にこもり、孤独の文筆を弄ぶ」という一文の中の「寛城子」とは、新京市内の北の街区である。かつてロシア人が作つた中東鉄道(21)南部線の着駅があつた。新京の都心は住宅が足りなかつたので、寛城子に住む日本人も多かつた。北村謙次郎もそこに住んだことがある。また、文学仲間の坂井艶司・横田文子夫妻も寛城子に住んでいた時期がある。川端康成は新京を訪ねたとき、北村の家を尋ねた記録も残っている(22)。寛城子とい

う街はわりと文学者たちが自由に交流できた場所と理解して良いであろう。しかし弘報処によって公布された「芸文指導要綱」は、従来の文化団体を満洲芸文聯盟のもとに統合し、作家たちは満洲文芸家協会に加盟させられることになった。それについて北村は右の文の中で少し不満な態度を漏らしていたのではないかと読み取れる。

昭和一六年春、『満洲浪漫』は「春季作品集（僻土残歌）」を刊行して以後、文庫本スタイルの「満洲浪漫叢書」を数点刊行しただけで自然消滅となり、同年一二月、『作文』も終刊となった。満系（中国人）作家の創作拠点であった『芸文志』も「紀元二六〇〇年記念特集」号を刊行したままで停刊状態になった。そのような満洲国の出版界の空白を埋めるかたちで創刊されたのが、芸文社発行の文化綜合雑誌『藝文』であった。浅見淵の「満洲芸文聯盟について」（23）というエッセイによると、『藝文』は「弘報処の斡旋で創刊された綜合文化雑誌」である、その後『藝文』の発行は、新京に進出した文藝春秋社（満洲文藝春秋）が受け継ぐことになった。『作文』や『満洲浪漫』の同人たちのような様々な雑誌で活躍していた文学者たちは、いずれも『藝文』一誌を頼りに文筆活動を行っていくほかなくなつたのであつた。

また、『作文』の同人秋原勝二は終刊号（昭和一六年）において、満洲文壇の文芸批評の質が劣っていることについて指摘している（24）。

文芸作品の批評は、近頃は寥々たるものである。雑誌の減少、

大東亜戦争以来の新聞の学芸欄の縮小に起因の一を置いてゐることは作品の場合と条件を同じくしてゐるのだが、作品よりも遥かに不活発であることは、注目をさせられる点だ。

（中略）

由来満洲では、取り上げるに価する作品が少ないことが重要な批評不振の原因として考えられてゐた。大体これは一般に首肯されて来たことだつたが、近頃これは疑はしくなつた。

作品がもつと／＼第一流にならなければならぬのは論を俟たないのだが、作品の側からみると、批評の方が、遥かに不勉強であるのがアリ／＼とみえる。何も敢えて作品と批評の水のかけ合ひをしやうとする訳ではない、この際、批評の中味に厳しい眼をそ／＼ぐべきではないか。

秋原が批評の質が劣っている原因は雑誌の減少によって、文芸批評が減少しつつあると指摘している。また、僅かな数の批評の中に価値があるものがさらに少なく、その原因は批評の方の不勉強と繋がっていると述べている。

以上引用した当時の二大文芸雑誌『満洲浪漫』と『作文』の同人北村と秋原の文章から、「芸文指導要綱」が公布されて以後、作家同士の交流が減少すること、文人の不勉強のことが窺える。

小説「海と湖と人間と」に戻ると、主人公佐野の抱えた、文人の不勉強ぶりや、「作家同志の文学喧嘩がない」などの内容は、昭和一六年前後の満洲文壇の様子を反映していることが確認できる。また、

佐野の周りの環境に対する悩みと不満は、満洲国の文芸統制に対する一つの批判ではないかとも考えられる。

四、長谷川瀧が志向した文学

小説の中で主人公佐野は満洲国の文学環境に強く不満を覚えていたが、周りの文学者と違って、彼は自分なりの文学を作ろうとする姿勢を示した。佐野が目指す文学を通して、作者長谷川瀧が志向する満洲文学の在りようを垣間見ることができないかと思えられる。

現実の問題ばかりに注目する周辺の文学者と比べ、佐野は文学を芸術として追求したいという意欲を主張している。佐野は、芸術の道を探求するためには、必ず孤独を経験しなければならないと考えている。作中彼が考えた孤独とは、次のようなものであった。

孤独は何であらうか？ 佐野は分らない。(中略)

しかし、人間の孤独、孤独なる心ほど、秘密と悲哀と美しさを内蔵する偉大さはない。

小さい人間の運命の速度と孤独に隔離されて行く悲しさを知ること、没落し行く魂の美しさ、肉体を通じて測り知れない巨大な圏外に飛び行く人間の意志、その拋物線を提示する創造力。これ等は一切、人間の營む芸術の力ではないか、詩人のことばの如く、「孤独は唯一つ、そしてこれは偉大で、容易に耐へ切れ

ないもの」であらう。だが、その孤独は拡大されねばならぬ。

佐野はヒマラヤの絶頂を思った。何人も到達し得ない厳肅なるものの存在。そこは雲と圏外の空気と荒れ狂ふ嵐の中に自らの運命に堪えて神々の卓子として提供されてゐる。あの沙漠はどうだ。荒涼たる残酷な線に画された無人の沙漠。熱風と龍巻と焼けつく太陽の直射、あらゆる意志を超越して死の沈黙に生を拒否する沙漠。或は大洋の深处の恐怖と光なき重圧。澎湃たる海波のひろがりは天空と共に動き、高まり渦巻きし、孤独の魂が漂流してゐる。この世界を想見し、獲得せんとする芸術家の飽くなき追求の手は無限なる孤独に震へ、怯びえ、いたましくも傷ついてゐる。峻巖なる存在の知覚、内面美の発見は孤独に徹しない限り、たやすく凡俗に伍し、愚劣な表現となつて烏合の大衆の前に提示されるであらう。反俗精神の保持。

現実の事象ばかりに注目する不勉強な作家仲間たちの考え方と違って、佐野は満洲国で「高い魂みたいなものを探し」たいと願っている。引用から佐野の考えを抽出してみると、「高い魂」を探す手段とは、孤独に徹することだと佐野は考えている。さらに佐野が考えた孤独に徹する方法とは、大自然の中に全身を溶け込ませることである。佐野は「ヒマラヤの絶頂」や「荒涼たる残酷な線に画された無人の沙漠」、「大洋の深处」を連想した。厳酷な自然の中で徹底的に孤独を経験することによってこそ、人間の内蔵する悲しさ、美しさを感じることができると考えている。孤独によって感知できた

内面の感情は芸術の創造力と繋がる。そうすると、孤独を深く体験すればするほど内面の美を発見することができ、一般の俗的な愚劣な表現を乗り越えることが実現できると考えたのであった。

満洲国の官吏に就きながら作家活動を行う主人公の佐野は、なぜ孤独を体験して独自の文学を作りたいとするのか。それは、満洲の密林に長く住んで、虎を狩っていたロシアの老作家が佐野に大きな影響を与えたからである。佐野はそのロシア人作家を凝視しながら、彼の密林の中での虎との戦いを思い、自然界で人間が死に直面する瞬間を想像する。佐野は老作家との出会いに啓発され、あらためて満洲国の大自然に視線を向け、彼が厳酷な自然界で体験した孤独の心境を深く掘り下げるべきだと考えた。

自然から体験する〈孤独〉を追求するため、小説の最後、佐野はダライ湖(25)という満洲国国境に近い内陸湖を一人旅する。満洲の大自然と向きあつて感動した彼は、自分が目指す文学とは何かについて目覚めた。本文の中に佐野の告白は次のように書かれている。

中山、前島、谷口女史、俺は今ダライ湖のまん中にあるんだ。恐ろしい静寂に囲まれて只一人坐つてゐる。すばらしい世界だ。水も空も大地も一切俺のものだ。星がその窓を開けて下界を見下ろしてゐる。これは幻想ではないぞ！ 現実なんだ！ 一人の人間の思索、知覚が宇宙を貫いて連帯を持つとき、神々は静かに下り給ふ。俺は不思議な音楽を聞いた。いや聞き分けたのだ。大気にはあらゆる音が充滿してる。俺はここに坐す。之が

俺の文学なんだ。そして退屈をたのしむことだ、この退屈に何かがあるんだ。此の湖心に坐す感動が満洲の文学なんだ。ダライ湖の大きさと大地との交渉、湖畔に住む貧しき人々のいとなみ、大草原の風も光も雲も人間も一切を抱擁してびくともしないこのダライ湖よ、この怠け者！ これが満洲の文学だ。これが俺の直感だ。ああ孤独にして堪へられない大きな悲哀よ、この悲哀はあらゆる人間の窓々を通り抜け、この大気にさすらふ。あの明滅する灯を見よ！ 人間の小さい温いとなみを！

ダライ湖よ！ 貴様は大こけだ、大馬鹿野郎だ！

佐野はダライ湖の真ん中で小舟に坐つて「恐ろしい静寂」を感じた。ダライ湖という孤独な空間において、佐野は「宇宙」、「神々」を想像し「感動」している。ひたすら広漠、何ものにも拘束されていない自然風景から与えられた感動こそ文学の源であると彼は思い、それに基いて満洲文学を作りたいと告白する。佐野は湖に向つて「ダライ湖よ、この怠け者！」、「大馬鹿野郎だ！」と罵倒したが、その罵声を通して佐野の「孤独にして堪へられない大きな悲哀」が聞える一方、ダライ湖の無頓着的な存在、野放図に広がっている姿に憧れる感情も読み取ることができる。

実際、長谷川濬の経歴を確認すると、彼は昭和一五年にロシア人の作家バイコフと出会い、彼の名作『偉大なる王』を「虎」と改題して日本語に訳し、昭和一五年六月から一〇月にかけて『満洲日日新聞』に連載した。翌年の二月、連載されたものは満洲日日新聞社

によって単行本として出版され、満洲で広く読まれることとなった。同年三月、文藝春秋社によって『偉大なる王』という書名に変えて日本国内でも発行され、ベストセラーになった（第二部第一章「長谷川濬と『偉大なる王』」で翻訳の成立事情について詳しく論じている）。「海と湖と人間と」の佐野は満洲国の密林に住んだロシア人文学者に影響され、自分も満洲の自然に目を向けた文学作品を描こうと決心した。この設定はまさに長谷川濬みずからの経験によってなつたのではないかと考えられる。作中のロシア人作家は実在のバイコフをモデルにしたと想定できる。

「偉大なる王」を訳した二年後（昭和一七年）、満映の上映部巡映課長であつた長谷川濬は白系ロシア人が住み着いている三河地区さんがに行つて、コザックの小説を書こうと決意する。昭和一七年、彼は甘粕正彦の許可を得て満洲国の三河地域へ赴いた。当時の情況について、彼は紀行文「海拉爾の宿」（26）の中で次のように述べている。

二十七才で渡満した私は、満洲里、綏芬河に住み、妻や子を日本に帰国させて、黒河より漠河、吉拉林を超え、三河を横切り、アバガイド対岸にまで旅をつづけた。このアルグン紀行も忘れられない思ひ出である。アムール、アルグンの河岸の町々、筏夫、採金苦力、娼婦の群、鷺、河もや、西口子の夕やけ等々、幾度か私は北の妄想に追はれて苦しかった。三十七才の今日、私はまた独り三河に入る。これも止むを得ない。私は書きたいから入るのだ。満洲の文学を作りたいから。

この広大な土地に我々が移り住み、諸民族と交り、苛酷な風土にまみれ、しかもこの土地を愛しつづけやうとする人人は、先づ動かねばならぬ。私は官吏でも政治家でもない。私は一個の作家としてこの大地に住む。これ以外に何ものでもないのだ。私は作家として働く。それが三河行となつて表はれた。

三河を横切つた長谷川濬の姿勢は、「海と湖と人間と」の、一人でダライ湖の真中に坐つた佐野の造形と重なつた部分があるように見える。長谷川濬が志向した文学は「官吏でも政治家でもなく、一個の作家として」満洲国の風土、自然を謳うことであろう。

結

「海と湖と人間と」は、満洲国の官吏の仕事しながら作家として生きていた一人の日本人を主人公にして、職業を持ちながら作家活動を行う満洲国の日本文学者の姿を描いた小説である。職業を持つため文学に専念できない悩み、また原稿料が少ないので文学だけで生きていられない苦悩などが主人公の視点によって叙述されている。小説の背景である満洲国の文壇の情況を探ってみると、当時は満洲国の中に専業作家がいないこと、印税や原稿料が格安で創作環境が厳しいことなどの状況が浮上する。作者である長谷川濬は渡満してから領事館や満映で仕事をしながら文筆活動を行った作家である。その時代に生きる文学者たちの生息を長谷川濬はよく観察し、

「海と湖と人間と」の中に取り入れている。また、小説において、主人公の佐野は満洲の大自然の中に溶け込んで、独自の満洲文学を作ろうと志向するが、その設定は作者自身の経験によるものだとは判断できる。満洲国の自然や風土に憧れ、それに啓発され、政治を越えた文学を作ろうとする志向を長谷川濬はこの一作を通してよく表現できたのではないかと読み取れる。この作品は当時の満洲国に渡った文学者たちの一側面を十分に描き留めているのではないかと考えられる。

【注】

1. 「海と湖と人間と」初出は『藝文』新年号（康德二十二年一月 満洲文藝春秋社）。本文の引用はそれに拠る。
2. 『満洲文化記』（康德一〇年 国民画報社）に収録。
3. 引用は浅見淵「満洲の文学・文化運動」に拠る。『満洲文化記』（康德一〇年 国民画報社）に収録。
4. 「満洲文学当面の問題②」昭和一六年一月七日『満洲日日新聞』（大村益夫・布袋敏博編『旧「満洲」文学関係資料集（一）』所収、平成二二年、大村研究室）。
5. 北村謙次郎『北辺慕情記』（昭和三五年 大学書房）。
6. 「川端康成を囲んで①」昭和一六年四月一三日『満洲日日新聞』（注4の同

書所収）。

7. 昭和八年に南満洲鉄道株式会社（満鉄）から隔月刊のグラフPR誌として創刊された。生活・風俗・工業・農業・民族・美術の特集など多彩な内容で構成され、まさに「写真で見える『満洲国』百科」と言われ程である。
8. 『満洲日日新聞』は明治三八年一〇月に創刊された『遼東新報』と、明治四〇年一〇月に創刊された『満洲日報』が、昭和二年一月に合併した『満洲日報』の改題・後継紙である。当時の満洲国において最大規模の新聞であった。
9. 『満洲国史』総論（満洲国史編纂刊行会 昭和四五年）。
10. 『中外商業新報』（昭和一四年五月二六日）。
11. 注5に同じ。
12. 『彷彿月刊』『満洲の雑誌メディア―特集』（彷彿舎 平成二〇年八月号）に掲載された西原和海の「満洲国雑誌諸々」の記述に拠って、「当時（昭和一三年ごろ）、満洲国では、民間の出版活動はきわめて限られていた。雑誌（定期刊行物）といえば、官公庁や企業から出されたものがほとんどだった」と述べられている。また同誌に、「満洲国中央官庁定期出版物番附」も載せられている。番附は『月刊満洲』第一一卷第七号（昭和一三年七月）に掲載されたものである。資料の提供は西原和海である。
13. 「川端康成氏を囲んで」『満洲日日新聞』（昭和一六年四月一五日）。
14. 注2に同じ。
15. 注2に同じ。
16. 注5に同じ。
17. 「満洲国の文化政策」『読書人』第二巻第九号（東京堂 昭和一七年九月）

18. 注5に同じ。
19. 当時、満洲文話会の本部は、大連から新京に移っていた。その本部が解散となったのだが、奉天・哈爾濱・大連などの文話会はそのまま存続した。
20. 注5に同じ。
21. 中東鉄道はロシア帝国が満洲北部に建設した鉄道路線。日本では東清鉄道と呼んだ。満洲里からハルビンを経て綏芬河に到る本線と、ハルビンから長春（寛城子）、大連を経て旅順へと続く南部線となる。昭和七年満洲国が成立すると、中東鉄道はソ連と満洲国の合併となり、その名称を北滿鉄路に変更した。
22. 注5に同じ。
23. 引用は浅見淵「満洲芸文聯盟について」に拠る。『満洲文化記』（康德一〇年 国民画報社）に収録。
24. 『作文』第五五輯（作文社 康德九年十二月）
25. ダライ湖は別名ホロン・ノール。中国語表記で「呼倫湖」である。満洲国と外モンゴルとの国境の大草原（ホロンバイル）に位置し、北満水系中ダライ・ノール系統に属する。古来著名な漁業地として知られている。
26. 長谷川濬「海拉爾の宿」『作文』第五四輯（作文発行所 昭和一七年三月）。

第三部

同時代の他の作品

〈満洲文学〉のある一面について

―日向伸夫「第八号転轍器」をめぐる―

序

小説「第八号転轍器」は在満作家日向伸夫が昭和一三年に創作した作品である。初出は『作文』三六輯（昭和一四年二月）であつて、『昭和戦争文学全集 第一巻 戦火満洲に挙がる』（集英社刊 昭和三九年一月）、『ふるさと文学館 第五五巻 海外編』（ぎょうせい刊 平成七年）、そして『〈外地〉の日本語文学選二 満洲 内蒙古／樺太』（新宿書房刊・平成八年二月）に収録された。

日向伸夫の来歴に少し触れておきたい。日向の本名は高橋貞雄といい、京都府舞鶴市に生まれた。旧制第三高校中退後昭和一一年に満洲に渡り、満鉄（一）に入社しハルピン駅に勤務する。同人誌『作文』に参加し、以後精力的に作品を発表し続けたが、昭和一八年に応召し沖縄で戦死した。日向は満洲に渡った翌年（昭和一二年）に「帰去来」という作品を完成させたが発表されず、後に小説集『第八号転轍器』に収録された。日向の作家としての処女作とも呼べる「帰去来」は満洲に渡った主人公貞三が突然父親の訃報に接して、京都の古里へ帰省するという物語である。また日向が同時期に執筆した小説「窓口」も、ある満洲の寒駅に勤めている切符売りの渡満

日本人従業員柱木を主人公とする物語となっている。つまり日向は日本人の物語を作家人生の当初からのモチーフとして描いてきたわけであるが、「第八号転轍器」は日向が初めて「満人」（二）を主人公とした作品であつた。「第八号転轍器」は昭和一五年に第一回満洲文話会賞（三）を受賞し、第一三回芥川賞の候補となつた作品である。

「第八号転轍器」は昭和一〇年三月、北鉄（四）がソ連から満洲国へ譲渡された時期に、北鉄に勤務していた満人の転轍手の物語である。主人公である老転轍手の張徳有は、北鉄時代に覚えたロシア語が何の役にも立たず、慣れない日本語の学習に苦勞する毎日を過ごしている。また同僚の李連福は、職場に見切りをつけ退職金を資本にパン屋を開店しようと企む。しかし、北鉄時代のロシア式のやり方に慣れてしまつている彼等にとつて、能率と時刻表厳守の満鉄式のやり方についてゆくのは困難なのであつた。そのような状況下に追い討ちをかけるように満鉄は北鉄時代からの満人社員を整理しようとしているという噂が流れてくる。張徳有は長年扱い慣れてきた「第八号ポイント」を手放すことも考えるのだが踏み切れず、李連福の開店したパン屋は火事で焼けてしまい、さしあたり張の属する駅では人員削減は行われなかつた、という結末を迎える。

天野真美は「第八号転轍器」の解説文において「植民地支配の矛盾を批判するために、被支配民族の中国人を、軽蔑され、貶められる対象として平面的に描くのではなく、満鉄に勤める中国人張徳有が抱いている日々生活の悩み、人生の苦しみを淡々と綴（五）」るところに主題があると述べる。また、橋川文三は「異民族の心理にま

で立ち入って描(6)——いた小説であると「第八号転轍器」を評価しており、川村湊も「満洲国の日本人以外の(異民族)の心理の葛藤を描いた日本小説として珍しい(7)」と評した上で、「満洲人視点、立場の遠さを超えて満洲人を内側から描き出すことは、野心的で、実験的な試みといえなくもない」(8)と指摘した。

当時の在満日本文学者たちはほとんど日本人を主人公とする作品を創作したが、日向の「第八号転轍器」は川村湊が指摘するように満人に焦点を当てて、満人の心理を深く探索した作品として特筆すべきものであろう。このような日本人から満人へと転換する視点は『作文』派のリアリズムを追求する作風が土壌にあると考えられるのであるが、それだけではなく植民地という特殊な場所にあつて獲得された視点の転換と見るべきではなからうか。

本稿においては、当時植民地としての満洲という土地に赴いた日本人作家日向伸夫が作品中に表象し得た満人を、当時の資料を参照しながら丹念に見ていくことで、日本人である日向が満人視点で物語を描くことの意味について明らかにしたい。

一、登場人物の設定と植民地のメタファー

日向の文学を理解するために、まず「第八号転轍器」の初出雑誌である『作文』及び『作文』派の特徴について簡単に整理しておきたい。『作文』は建国精神と協和理念を説いている『満洲浪漫』に対して、リアリズムの立場によって創作活動を行った雑誌である。『作

文』は文学同人雑誌として、昭和七年一〇月に創刊された。雑誌名は何度も変更され、『文学』と題して発刊した一輯・二輯を経て『作文』となり(三輯から一五輯)、その後一六輯のみ『一家』として発行され、最終的に誌名が『作文』となった(9)。

『作文』の性格については、宮井一郎が以下のように述べている。

作家達の底を一貫して流れているものは、とかく芸術家肌と云ふが如き美名にかくれて、そのルーズさを——私生活に於いても創作態度に於いても、押し隠し勝ちなそんな風なものとなつて逆な性格である。まことに手堅く、健康で、律儀である。そこに『作文』作家達の特長もありまた欠点もある次第である。

欠点とは何か。即ち上記の性格から必然に生まれてくる奔放さに欠けていることである。このことは『満洲浪漫』の作家と対比するときまことに明瞭に観取される(10)。

『作文』と『満洲浪漫』を比較する際、よく指摘されるのは『満洲浪漫』が建国精神と協和理念を説いているのに対し、『作文』はあくまでリアリズムを貫いた、という点である。当時の大連と新京の気風の違いは、それぞれ「大連イデオロギー」「新京イデオロギー」という呼称で対立される。北村謙次郎は「満洲国官吏」が「協和服を着込んで建国精神や協和理念を説くにあたり、颯爽たる気概にむしろ筆者などあてられ気味」であるのに対して、大連イデオロギーは「満鉄マンあたりに代表される自由主義的な」ものであると著書

(11)の中で述べている。そういった同時代の流れもあり、大連対新京の気風の違いはそのまま雑誌の性格の違いに当てはめられ『作文』対『満洲浪漫』という図式が公式のように語られるようになってしまったのである。『作文』自体は一〇年間の活動の後、月刊文芸誌『芸文』の発行に伴い、昭和一七年二月に「満洲芸文指導要項」の一部門一誌の原則(12)によって廃刊となったが、リアリズムを重視した『作文』の性格と一致するように、日向は当時の状況をリアルに小説の中で再現している。

それでは、日向は小説「第八号転轍器」において、どのような現実の事件を作品中に内包し創作していったのか。「第八号転轍機」は昭和一〇年北鉄の譲渡(13)という事件を主軸とする作品である。当時の譲渡に関して『満洲日報』では以下のような報道がなされた。

北鉄が遂に完全にロシア人の手を離れて満洲国の物となる日が来た、北鉄の完成は二十世紀の初頭における世界歴史の最大の事件であつたから、ロシア人が満洲を見捨てて国境外に去るきよう三月二十三日こそは同じく歴史的事件として銘記さるべきであろう、由来植民地鉄道は国力の尖端をなすだけに幾多のロマンズに彩られるものであるが、わけて北鉄は「極東のバルカン」と呼ばれた満洲の大動脈だっただけに、日、蘇、支三国をはじめ米、仏その他の利害関係錯綜し、三十七年間の北鉄史は全く一箇の悲劇であり又活劇であつた、北鉄譲渡調印の今日、二世紀に跨る北鉄史を回顧すれば流石に感慨無量なるもの

あると共に、キリストに対するボーロのごとく、曾て満洲のために大きな癌であつた北鉄が、却つて満洲国のよき使徒として今後の開発の根幹たらしとする事を祝福せざるを得ない(14)。

記事を見れば北鉄の譲渡事件が満人に対しどれほどの大事件として見られ、どれほどの影響を与えたのか想像に難くない。また譲渡された三日後の『満洲日報』の「接後に来るもの(15)」という記事(15)には、輸送の改善、特にダイヤ、運賃の変更などの問題は急速に解決すべき問題であるという報道がなされている。『開拓鉄道論』下巻の記述(16)によると、鉄路総局は北満地方の経済的發展、産業開発の為、運賃及び規程を改正し当日よりこれを実施した。引継直前における北満鉄路従事員は、ソ聯人六〇二七人、満人一〇一七六人、白系露人八六八人、計一七〇七一人であつた。また、当時の日本側による満人従業員に対する認識は以下のようなものであつた。

鉄路局、現場共冗員夥多且熟練者乏しく、業務能率甚しく低下し、情実により未経験なる若輩が枢要の地位を占め、何等の統制も訓練も行れず、従て収賄其の他不正行為風を為し、公衆、貨主に対する便益の増進等は素より考慮の外に置かれ、盜難、衝突等の事故頻発し、対内及対外的に不測の損害を与えて居つた。従業員の素質不良は阿片吸引者の頗る多かりしこと或は機関車従業員の約八割が文盲なりしこと等に依りても想像し得ら

れる(17)。

満人従業員の労働能力と知識レベルの低さが、どれだけ日本側に問題視されていたかということが理解できよう。一方、日向は『第八号転轍器』について(18)という随筆において以下のように述べる。

これら六篇の作品はそのやうな(日本人一割、満人九割という)環境にあつた自分の云はば過渡的作品群である。自分の現実追求の精神がかうした作品を次々に書く原因をなしたとも云へるだらう。

日向はあくまでも「自分の現実追求の精神」で現実をそのまま作品に反映させていくという姿勢を明らかにしている。これら資料から類推するに、日向は「第八号転轍器」作中に当時の満鉄の現状を仮託し、綿密な描写を試みたのではないだろうか。作品の冒頭には以下のようにある。

彼等は旧北鉄からの引継従事員だつた。康德二年三月二十三日を期して、北満が蘇聯から満洲国へ譲渡されると同時に、一本の軌条、一個のハンマーと同様に、極めて正確な引継書をつけて満鉄に引継がれた俗に接収品と呼ばれている者達であつた。蘇聯人の従事員達が、波の引くやうにどつと本国に引揚げて

しまふと、日本人が彼等を支配するやうになつた。時間などてんで当にならなかつた北鉄に、世界一の正確さを誇る日本の技術がとつてかわつた事が、既に彼等にとつては不幸の種であつた。高度に進歩した日本の技術の前には、十年一日の如く古びた信号機や、簡単な転轍器を扱っている彼等の技術は、恰も兎戯に等しいものでしかなかつた。

その上、北鉄時代には一日一往復しかなかつた旅客列車が、今では一日四往復に殖えている。昔は列車を通してしまへばもう何をしようと勝手に、家に帰つて羊を飼つたり、野菜を作つたり、蜜蜂の世話をしたり、好きな事をして居られた自由な勤務と違つて、日本人の几帳面さと、強烈な責任感と言ふやうなものが、彼等の上にも激しく圧しかぶさつて来て、今は昼飯を家へ食ひに帰ることすら、自分の自由にはならなくなつてゐる。第一かう列車が多くなつては、一日交代の徹夜勤務で、その列車を通すだけで精一杯なのだ。

その上彼等は日本人と言葉が通じない。彼等はずつと北満に育つた人間であつたから、長い間露西亜人に使はれてゐる間に、露西亜語の読み書きは覚えた代はりに、自国語は書く事も読む事もできない文字通りの文盲になつてしまつてゐるのであつた(19)。

当時の資料と「第八号転轍器」の本文を対照してみると、作者の日向は満人の視点に立つて、譲渡事件によつてもたらされたダイヤ

の変更や勤務の内実の変化、そして満人従業員の言葉の問題などをこまかな筆致でリアルに作品の中に綴っていることが分かる。

しかし日向は前掲『第八号転轍機』について「において、小説の創作については「経験と見聞によつてなつたもの（20）」で、「作品には一つとして纏ったモデルはない。あるヒントを得たこと、それがモチーフになったことは否めないが、決して事実そのものではなく、むしろ大部分は虚構に属するものである（21）」とも主張している。つまり日向の言う「写真」とは、特定の満人を描くことにあるのではなく、作者自身の「経験と見聞」を活かして作中に投影することにあつた。満鉄の一職員としての日向の「経験と見聞」は、当然植民地での日向自身の体験に繋がっている。「現実追求の精神」と「虚構」の間に植民地という装置が機能することによって、日向伸夫の文学は同時代にあつて特殊な地位を獲得したと考えられるのである。

「第八号転轍機」作中の二人の満人従業員「張徳有」と「李連福」はそれぞれ対照的な存在として描かれている。主人公の張は「没法子、没法子」（仕方がない）という口癖からも解るように、時代の変化に対し常に受動的で悲観的である。このような張の性格は満人労働者の一種の定型でもあつた。『満洲読本 昭和十二年版』には満洲の労働者に関して次のような記述がある。

関東州・満鉄附属地内に於ける日本人の経営事業中、工人を使用しない箇所は殆んど無いと言つてよい程であつて、賃金の低廉と、勤勉にして服従観念の強い点などは一般に其の長所と

して認められてるが、作業上の能率は遥かに、日本人職人又は、労働者に及ばない点が多いことも明瞭にされて居る（22）。

また、人員削減の危機に面した張に対し日本人操車手の秋田は「そんな事があるもんか、真面目にさえ働いて鹹首の心配なんか要るもんか。」「張徳有も苦労性だな。」と慰めるのだが、張の何も行動せず慣性に従うという性格設定の中には、秋田のような（日本的な）考え方的一致した部分も認められる。「五十近く」という高齢の張は仕事中「体の節々が痛む」のを感じ、炎天にしゃがんでいるとくらくらと「眩暈が襲つて来」る。一方「十年も年が若い」李は重いリバーを「ぐつ」と片手で引いてしまふ。体制や管理の変化に対して我慢や苦労を重ねる張に対し、李は「何の苦労もなさそうに、いつも太平楽」という有様である。そして人員削減の危機に直面した時、若い李はあっさりと仕事を辞め退職金を資本にしてH市へ出てパン屋を経営することを選択する。その際李は張を誘うが、張は「李の話に惹かれる気持ちと、宿命的な現在の仕事への執着と、もしかしたら、鹹首にならずに済むかもしれないと言う、僥倖を持つ気持ち」の中で揺らいでいた。結局誘いを断り張は満鉄に残ることを選択する。李は「没法子で諦めてしまふと考えている奴等の、その気持ちに僕は頼なんだ」と、運命の転轍器を操作して人生の行路を変えようとする。しかしそんな李のパン屋は開店した夜に火事で丸焼けとなり、張はさしあたって職を失うことなく苦労する毎日が続け

るという結末を迎える。これら二人の人生の描写からはまるで鉄道の転換口に当たった列車のように、全く違う行き先へと進んでいく二人の満人従業員のこれからの人生を暗示している。小説の結末は、張徳有のような未来に対して希望を持たず、過去の北鉄の時代を懐かしく思いながら現状を維持するという受動的な選択をした人間は何とか生きていられるといったものであった。一方、李連福のように未来の新生活を希求し、資金を集めてパン屋を始めようとするような能動的な選択をした人間は、最終的に火災によって家財全てを失ってしまう。

作中に虚構化された二人の満人の選択の中には、支配と被支配関係のメタファーが内包されているのではない。一度既定された線路（植民システム）に乗せられた以上、李のように自分の意志によって運命を転換しようすると、列車は脱線してしまう（何もかもを失う）が、日本人のやり方や態度に合わせて行動すれば張のように身を守ることができる。作者の「現実追求」という写実の意識と作品構造との間に、植民地という装置が存在することによって、作品の結末に昭和一四年という満洲国建国最中の時局という作者の局限性を垣間見ることが出来るのである。しかしここで作者が最も伝えたいのはむしろ運命の岐路に向かって、転換にせよ、維持にせよ、いずれの道でも結局良い結末を迎えられないということであろう。一見選択できるように見えるが、実際は選択する余地などない、運命を換えることが出来ないという絶望感が作品の根底にあるのではないかと考えられる。

二、異民族に対する視線と姿勢

日向は「第八号転轍器」作中の二人の満人に植民地のメタファーを内包させた。しかしこの小説の主題はそこに留まるものではない。同時代の渡満した日本人を主人公にして小説を創作していた日向が、あえて満人を主人公とした動機について考えてみたい。

日向は植民側にいる人間として、なぜ被植民側の主人公が運命を変換できないという絶望的な物語を描いたのであろうか。日向が「第八号転轍器」の主人公「張徳有」を（人間は運命を操る力を持つことはできない）と考える人物として造型した裏側には、日向伸夫本人及び『作文』派の創作理念が底流しているのではないだろうか。

浅見淵は『第八号転轍器』の跋文（23）において以下のように述べる。

日向君に取って最初の創作集であるこの本に収められている作品から、作家としての日向君の特色を抜き出してみると、何よりも際立っているのは民族心理を取上げていることだ。満洲における、日系、満系、あるひは鮮系のお互ひの心理的摩擦を、作者のヒューマニスティックな協和的精神を底流させながら、亢奮や感傷に溺れず、冷静に、素直に描きだしていることだ。

浅見は日向の作品の特色を「ヒューマニスティックな協和的精神」

と捉えており、満洲国政府が強調している「民族協和」の建国精神と一致すると述べる。しかし日向は「満洲文学私観」において（24）自分の創作理念について次のように述べている。

私は協和会のスポークスマンではないから、何もここで五族協和とか一徳一心を宣伝する必要はないのであるが、吾々が満人の中に入り込み、満人が吾々の生活の中に欠くべからざる存在となつてゐる今日、吾々の意識の外にあつて、極めて自然に一徳一心の成果が挙げられてゐる事実を看過することは出来ないのである。

日向が「満洲文学私観」において「宣伝」することを拒んだ「五族協和とか一徳一心」と、浅見淵が読み取った「ヒューマニスティックな協和的精神」とはどれほど差のあるものなのか。当時の文壇において満洲建国の建前としての「協和」と、日向のような知識人が描いた「協和」の差はどこにあるのか考えていきたい。

まず日向が言い触れた「協和会」とは、満洲国における官民一体の国民教化組織であつて、満洲国政府と表裏一体となつて建国理想（王道楽土の建設）の実現を図るべく国民に対する教化を進めていった組織である。次に「五族協和」についてであるが、以下昭和一二年に出版された『満洲読本』からの引用である。

満洲国は満・漢・蒙、日本及朝鮮民族を以て構成の主体とす

る。此等諸民族は、建国宣言に宣布されたこと其の儘に、国内に於いて平等の権力を有し、義務を負はされねばならない。併し乍ら、五族は概ね其の源流を、齎しくする者多しと雖も、各々風俗・習慣に少なからず差異を認められる。即ち各民族の祖国夫々に、特殊の氣風が培はれて居て、夫々の伝統と因習とを、此の国土にまで持ち越して来て居るからである。故に純然たる國風が此の国に芽生え瀰漫するのは今後にある（25）。

満洲国において宣伝された「五族協和」とは、満洲国を建設するための「協和」である。その五族の中において日本は主導権を握る本位の民族であり、五族の中には当然の如く階層が存在し、建国宣言にある「凡そ新国家領土内に在りて居住する者は皆種属の岐視尊卑の分別なし」、「平等の待遇」などは幻想でしかなかった。同じ『満洲読本』において「農・林・水産又は鉱業・交通業等に従事する日本人等は、殆んど夫々の業務中の、幹部又は指導的地位に立つ者のみである」と述べている。つまり日本人をピラミッドの頂点とした民族階層の社会が厳然として存在したわけである。

しかし日向にとつての「協和」とはこのような建前上のもものではなかった。『第八号転轍器』について（26）という文章の中で日向は以下のように述べる。

京都といふ最も日本的な土地に生長し、最も日本的な家庭に育つた自分にとつて、突然放り出された荒蕪の環境と、始めて

接触する漢民族とは確かに異常な驚異であつた。日本人一割、満人九割といふ環境の中にあつて、自分は先づ己れに反省する前にその環境を追求することに専念せねばならなかつた。或る責任あるポストを得たが故に、支配者の優位を保持すると同時に民族協調を考へなければならなかつた。そして所謂文学青年的なセンチメンタリズムと、現実との距離について考へなければならなかつた。そしてその間に於いて絶えず自分が感じ取つたものは、異民族の人間性と真実といふ問題であり、功利のない世界の美しさであつた。

つまり日向における「協和」とは、いかに異民族の環境を理解し、その人間性に触れるかということに集約される問題であつた。日向は自分の文学の姿勢は、政治に従属する「五族協和とか一徳一心」を「宣伝」することにはないと主張し、虚構化した人物の傾向は「極めて自然」であつて、時局文学を創作する意図はないと強調している。そして「私は満人を小説の素材として考える前に、等しい人間として考えたい。満人の風俗や生活を書く前に、満人の人間を書きたい(27)」と希求した通り、日向は「人間性」を理解するために、生活環境の違いを乗り越え、支配者の優位を捨て、民族の壁を超越して「等しい人間」として満人をリアルに描写しようと試みたのである。

それでは作者の日向にとって、この「等しい人間」とはどういったものを意味するのか。

同じ『作文』の編集者で中心メンバーである青木実とは「満人ものに就いて」という評論(28)において、在満作家としての抱負を明言した。

僕の信ずる「作家」は、日本の所謂作家ではない。日本の作家達は、多く単なる文筆業者にすぎない場合が多い。時流に阿ね、一貫せる見識をもたぬその日暮しの感が深い。

事変に動員され、戦地のルポルタージュを書いた作家はいる。それから銃後の国民の緊張した生活(銃後小説などと銘打つて)を書いたものはいる。しかし、銃後の農村の生活を、また戦死者の遺家族のその様々なる姿を冷静な眼で正しく伝えることこそ、斯かるときの作家の任務であらう。

青木は筆を時局に合わせるのではなく、あくまで弱者にその視線を向けるべきであると主張する。この主張は日向のものと共鳴していたと考えられる。また何故満人を書くかという問題に対して青木は以下のように応答する。

満人を書くことは、単に異民族としての彼らをエキゾチックな興味から書くのではない。その意味からだけでは決して優れた作品は生まれないであらう。彼らを物語るのではなく、彼らの内に自己を見出すことに依つて、その裏うちによって魂の籠つた魂のある作品となる(29)。

越境行為によって人間は既成の枠組みから解放され、見えなかったものが見えるようになる。つまり故郷の《破壊》は自己の《確立》に繋がり、可視化の範囲が増大するのである。異境における《一個人》という国を構成する最小の単位を取上げて描写する意味とは、新しい環境の中で見出された《自省》に繋がると考えられる。それは異民族の細部を観察することによって明確化した差異を確認する作業であり、《高い文化》を持つとされている自分自身の存在を再確認する作業でもある。要するに異境の《一個人》への凝視は《自分とは何か》という問いに還元されると考えられる。つまり青木が示した「魂の籠った魄のある作品」とは、単に異民族の姿を描写した作品を指すのではなく、自分自身の存在を再確認した上で異民族の姿を描いた作品でなくてはならないということを意味しているのである。

日向伸夫は満洲国の内部に入り込み、国家を組み立てる最小の単位の《一個人》に視線を向けて、その《一個人》の一日の生活・悩み・希望を微細に観察した。日向はこの視点を持つことによってはじめて、《余所者》として「満洲国」を取り扱うのではなく《満洲に住みついた者》として文学することが可能になると考えていたのではないか。その前提があつてこそ、日向は「等しい人間」という視点を自分の《独自》な文学の中に取り入れることに成功したと考えられるのである。

しかし「等しい人間」として考えれば考えるほど、作者自身は

支配者としての矛盾と限界を感じるのではないか。つまり日向は《等しい人間》という視点で自己の独自の文学を追求する過程において、建国理想と現実との間の大きな溝を発見し、そしてそのような溝を作品の中に組み込んでいったと考えられるのである。

三、植民地システム下の《一個人》

前述したように、日向は満洲に渡った翌年の昭和十二年に小説「帰去来」を執筆した。小説の主人公貞三はある大家族の長男であつた。古い家族制度の反逆者で義理人情を忘却して個性ある人生を生きようとした貞三は、「巨大な重量を持つ圧迫感と自責に堪へず、肺病で高校を退学」することを選択した。彼は一族の体面を汚す者として（更に恋愛事件などもあいつて）満洲に逃避する。彼は父親の訃報に触れて二年ぶりに古里に戻るのだが、「蕩児帰宅」のようなみずぼらしい姿で父親の葬礼に参加することとなる。親戚の悪罵冷評や遺産問題、人妻になった初恋の相手との再会など、貞三は周りの社会からの疎外感にさいなまれる事件にばかり遭遇するのである。そのような状況にあつて貞三は満洲での生活に思いをはせる。

——自分が満洲へ行つてつたつて何のいゝ事があるものか、勤めと云つてもほんの下つ端で卑屈に頭をペコペコ下げて、安い給料で、極寒の中に肉体を投げ出して働いてゐるんだ。激しい重圧の中で、みんな唾のやうに黙つて働いてゐるんだ。

結局貞三はそれでも索漠たる満洲の生活に戻るといふ結末を迎えるのであるが、この小説とほぼ同時期（昭和二年二月）に完成し、『満洲文芸年鑑 第三輯』に収録された小説「窓口」（30）と対照してみると、ある関連性と連続性を読み取ることができる。主人公の柁木は満洲に渡った一人の満鉄従業員として「狭い楕円形の窓からさまざまな世相」を眺めながら、ある辺鄙な街の駅で切符販売の仕事をしている。「——あゝあゝ、俺も満洲まで来て、切符売りをするとは思わなかつた——」と柁木が慨嘆する場面があるのだが、まさに作者の日向はこの二作品に、高校を中退して満洲に渡り満鉄に入社した自分自身の経歴をそのままリアルに投影させているのではなからうか。

天野真美は「日向伸夫試論」において『帰去来』で『満洲』を心象風景として捉えるに過ぎなかつた日向の視点は、『窓口』において、植民地『満洲』における『満人』に対する『日本人』の関わり方に向けられている（31）とまとめている。日向は日本国家の家族制度から脱出して満洲に渡り、「第八号転轍器」に示されるように（「一個人」として生きたいという希望を持っていたと考えられるのであるが、満鉄という膨大な国策会社の一員として——所謂植民システムの末端において——「王道楽土」「民族協和」の満洲国建設の幻想に否応無く巻き込まれていく。巨大な社会システムに対する卑小な一人としての存在、家族制度の幻想において挫折し、相次いで日本本土の建国幻想に巻き込まれる（「一個人」はいつたどこに向かうべきなのか。

日向は「帰去来」作中において、主人公貞三と昔の恋人が再会する場面に次のような台詞を書き入れた。

仕方がないさ。僕達にはどうにも出来ない宿命だもの。それに反抗したものは僕のやうに惨めな目に会ふ。だが、生まれて来る僕達の子供だけはこの世界から解放してやりたいと思ふな。それがせめてもの復讐だよ。人間と生れて、あんな不自然な義理人情に縛られるなんて、たしかに不幸だからなあ。でなくとも社会には服従しなければならぬ公文の制約が沢山あるんだから——（32）

この場面には海を越えて生きる場所が変わっても、社会の制約が変わらない限り、（「一個人」として順応するしかないという挫折感が現れているといえよう。日向は植民側の会社（満鉄）という大きな組織の末端の一職員でしかなく、社会構造の動きを見抜くことなど到底出来ようはずもない。植民側の組織の最末端において、全てにおいて指示に従って行動しなければいけない日向は、被植民側の人間と同様の境遇にあると言える。植民側でも被植民側でも巨大に対する微小、複雑に対しての単純、最高・最上に対して最低・最下の存在、同じ弱者としての存在、運命を操縦できない無力感、孤独感の中で生き続けているということであつて、それこそが植民地での支配者と被支配者の（等し）さであると考えられるのである。つまり日向は、日本と満洲／植民側と被植民側という既成の枠を乗り越

えて、普遍的な問題として〈社会〉対〈一個人〉の存在を焦点化したのである。

結

満洲国建国によって、「建国」「開拓」の大風呂敷を広げる作品が登場すると同時に、日向伸夫の「第八号転轍器」のような毎日ポイントを動かす満人の喜怒哀楽を繊細に描く作品も登場した。明治時代から昭和にかけての大量の従軍日記や紀行文、小説の中で描かれた中国人の「愚昧」「無表情」「沈黙」といった形象(33)に対して、日向は満洲国の内部から植民地の最下層の労働者へ視線を向け微細な観察を加え、新たな形象を生み出したのである。

〈転轍器〉に二人の満人鉄道従業員の人生行路を重ね合わせ、そこに植民地のメタファーを内包させた日向は、それだけでなく「民族協和」という国家の建前に対して作家的なリアリズム精神によって異民族の満人を「等しい人間」として作中に形象した。異境人に触発され自己を再認識するところから日向は文学を創り始めたのである。社会、制度、統治に対する同じ弱者としての存在こそ「等しい人間」の帰着点であって、日向は満人のイメージを借りて社会の最小単位としての〈一個人〉はどう生き続けるべきかと同時代に対し問題を提起したのである。同時代の渡満作家の青木実も、「僕自身の弱さが満人の社会的立場に於ける弱者に、何か他人でない共通するものを感じ(34)」と強調し、「共通的な弱者としての立場にあ

る彼等を書(35)」きたいと唱えた。しかし戦時中の厳しい状況において、この批判の声がどこまでの射程距離を持ち得たかは疑問である。

同じ満人労働者をモチーフにした八木義徳の小説「劉広福」(36)は第一九回の芥川賞を受賞した。第一部第三章でも触れたが、梗概は以下のとおりである。主人公の劉広福は安い賃金で重い仕事について文句一つも言わない黙々と働く吃音の大男であった。工場で火災事故が発生した際、彼の勇敢な活躍で事故には至らなかったが、彼は両手・顔などにひどい火傷を負い、大きな後遺症が残った。しかし許婚者の那娜の献身的な看病で彼は退院し、那娜と結婚式をあげる、といった筋である。審査委員の片岡鐵兵は「人間のこの時代に生きる精神を掴もうと(37)」する点を評価していたが、川村湊が述べる(38)ように、「五族協和」「王道楽土」という満洲国のスローガンに則ったこの作品の一種の国策性が評価された側面があることは否めない。「劉広福」の芥川賞受賞は、劉広福の不平不満を言わずに働く労働の態度や、劉と那娜との童話的な愛情の物語、劉の火災事故における英雄形象、及び劉の義務感と自己犠牲の精神の強さなどの要素こそが「満洲文学」に求められていたものであるということを実に語っている。

しかし日向の志向した「等しい人間」という視点こそが、満洲という一地方にあって日本国を見たとき、最も現実を映す視点であったことは間違いない。越境行為によって日本／満洲という枠組みを超克し、普遍的な社会や人生に関わる問題を改めて焦点化するまな

ざしこそ、日向を始め同時代の一部の文学者たちが希求したものであると考えられるのである。

【注】

1. 正式名称は「南滿洲鉄道株式会社」である。明治四〇年四月に営業を開始した満鉄は鉄道経営以外に沿線都市の経営や資源開発・調査研究活動にも事業を広げた総合的な国策会社である。本論文においては「満鉄」と略称する。
2. 「満洲国」成立後、満洲地域に住み着ける「日本人」の呼び方に対して、中国人のことを本論文において引用部分を除いて「満人」と表記する。
3. 満洲文話会によって設定された賞。年度中に満洲において満洲在住者の手により発表された最優秀文芸作品に満洲文話会によって授賞する。昭和五年は第一回目である。
4. ロシア帝国が満洲北部に建設した鉄道路線。満洲里からハルビンを経て綏芬河へと続く本線と、ハルビンから大連を経て旅順へと続く支線からなる。昭和六年の満洲事変により翌年満洲国が成立すると、中東鉄路はソ連と満洲国の合併となり、その名称を北滿鉄路に変更した。本論文において「北鉄」と略称する。
5. 天野真美「第八号転轍器 解説」(『日本植民地文学精選集 六 満洲編 六 第八号転轍器』ゆまに書房 平成二二年)。小説集の名前は「第八号転轍器」と表記されたが、そのなかに所収された小説名は「第八号転轍器」と記されている。本論文において作品集名と小説名はすべて「第八号転轍器」に同一して表記する。
6. 『昭和戦争文全集1』(集英社 昭和三九年)。
7. 川村湊『文学から見る「満洲」』(吉川弘文館 平成一〇年)。
8. 川村湊『異郷の昭和文学』(岩波書店 平成一〇年)。
9. 『作文』の創刊号の同人は、竹内正二、城小碓、落合郁郎、島崎恭二、町原幸二、安達義信、青木実であった。発刊の中心メンバーは、当時、満鉄の大連図書館に勤めていた青木実と、大連医院事務局に勤めていた安達義信であったが、他の執筆メンバーでも、例えば、竹内正二も青木と同じく大連図書館員であり、同人には満鉄関係者が多かった。創刊号は大連市内の書店三軒に卸し、発行部数は二〇〇部であった。
10. 宮井一郎『作文』四十輯まで(『満洲浪漫』第五輯 ゆまに書房 平成一四年)。
11. 北村謙次郎『北辺慕情記』(大学書房 昭和三五年)。
12. 尾崎秀樹『旧植民地文学の研究』によると、「芸文指導要綱」は満洲国弘報処によって「満洲国」における芸文統制として昭和一六年三月に公布された。内容は「趣旨」、「我国芸文の特質」、「芸文団体組織の確立」、「芸文活動の促進」、「芸文教育及研究機関」の五項目に分れる。
13. 北滿鉄路(旧東支鉄道)の譲渡交渉は昭和八年六月二六日の東京会談にはまり、途中、北鉄所有権問題や譲渡価格で揉めて会商はしばしば次停頓状態を示したが、遂に昭和一〇年三月二十三日に正式調印を完了とする。譲

渡価格は一億四千万円、ソ聯従事員退職資金三千万円、合計一億七千万円である。同時に満洲国は北滿鉄路一七三二・八キロ並びに附属財産及び施設一切を接収した。

14. 『満洲日報』(昭和一〇年三月三日)。
15. 『満洲日報』(昭和一〇年三月二十六日)。
16. 『開拓鉄道論』下巻(春秋社 昭和一三年)。
17. 注16に同じ。
18. 日向伸夫『第八号転轍器』について『辺土旅情』北陵文庫 昭和一八年)。
19. 日向伸夫『第八号転轍器』(砂子屋書房 昭和一六年)。
20. 注19に同じ。
21. 注19に同じ。
22. 『満洲読本 昭和一二年版』(東亜経済調査局 昭和一二年)。
23. 浅見淵『第八号転轍機』跋文(『第八号転轍器』所収)。
24. 日向伸夫『満洲文学私観』『満洲浪漫』第五卷所収 昭和一五年)。
25. 注22に同じ。
26. 日向伸夫『辺土旅情』(北陵文庫 昭和一八年)。
27. 注24に同じ。
28. 青木実『満人ものに就いて』『満洲文藝年鑑』昭和一四年版(満洲文話会 昭和一四年)。
29. 注28に同じ。
30. 初出は『満洲文芸年鑑』昭和一四年版(満洲文話会 昭和一四年)。
31. 天野真美「日向伸夫試論—日本人の『満洲文学』の一位相」『社会文学』第七号 平成五年七月)。

32. 注19に同じ。
33. 独歩の「愛弟通信」(明治四一年 佐久良書房)において「自国の存亡より、寧ろいち早く自己の米櫃を縣念したる也」という中国民衆の愚昧を輕蔑する描写がある。
34. 注28に同じ。
35. 注28に同じ。
36. 初出は『日本文学者』一号(日本青年文学者会 昭和一九年四月)。
37. 『芥川賞全集 第三卷』(文藝春秋 昭和五七年)所収。
38. 注7に同じ。

結論 —おわりに—

結論 ―おわりに―

本博士論文は、満洲国が建国されてから一三年余り、その地に渡った長谷川濬が、どのようなまなざしで満洲大陸を見つめたか、満洲国の内部においてこそ体験できた事柄を、どのように文学作品に取り入れたかを解明することを目標とした。研究対象として昭和七年から昭和二十一年まで、長谷川濬が満洲国に居住した期間に発表された作品を扱った。まず、「烏爾順河」、「蘇へる花束」、「寛城子」などの作品を分析し、同時代の資料と比較しつつ、満洲国に存在する問題をどのように作中に取り入れたのかを明らかにした。また、「バイコフ『偉大なる王』の翻訳に関する調査を行い、「海と湖と人間と」を分析することによって、長谷川濬が志向した〈満洲文学〉とは何かについて考察した。さらに、比較対象の一例として、渡満作家、日向伸夫「第八号転轍器」を分析した。同時代の渡満作家の小説を読み解くことによって、長谷川濬の独自の視座を明らかにした。以上のように、長谷川濬の作品分析や翻訳の事情をめぐって、具体的な検証に取り組んだ。各部・各章の概要は以下の通りである。

序論では、先行研究の整理を試みた。まず、明治から大正にかけての文学作品に〈満洲〉がどう描かれたかをまとめた。次いで、〈満洲文学〉に関する従来の研究を概観し、〈満洲文学〉の定義、研究現状についてなどを確認した。さらに、満洲国に渡って文筆活動を行った長谷川濬の経歴を略述し、この作家に関する先行研究をまとめ

た。そのうえで、長谷川濬の作品はどのように満洲国のさまざまな様相を映ったのか、彼が志向する〈満洲文学〉とはどのようなものであるのかについて、本研究の問題提起を行った。

第一部は三章からなる。長谷川濬の作品を具体的にとりあげ、作品の背景に関する考察を行った。諸作品を分析することにより、満洲国がさまざまな問題が内在しており、それらに関して濬がどのように対峙していたのかを検証した。そして、制度上の建前と現実の間に存在するすれ違いが、作品に反映されていることを明らかにし、どのように作品に描かれているのかを明らかにした。

第一章では、「烏爾順河」（初出は昭和一四年）をとりあげた。この作品は満洲建国のために渡満した二人の青年と一人の女性の間の友情と愛情を主題にした作品である。「烏爾順河」に描かれている〈恋愛〉と〈建国〉の様相を抽出して、建国運動と密接な関係を持つ満洲国官吏の育成機関〈大同学院〉の動向、思想について検討を行った。また、満洲国建国初期に渡満した青年たちの考え方、生き方が「烏爾順河」にどのように描かれているのかを検証した。さらに、作品のタイトルである〈烏爾順河〉を歴史・地理的な観点から、同時代の資料を参考しながら検討し、作品の根幹である満洲大陸への憧憬と密接に関わっていることを明らかにした。

第二章では、小説「蘇へる花束」（初出は昭和一三年）をとりあげた。「この河をはさんで二つの国が対立してゐる」アルグン河について、同時代の資料と比較しながら、作中では「国境」の河としてア

ルグン河がどのように描写されているかを検討し、人間と自然が対立している様相を明らかにした。この二項対立を抽出することで、作者が本作を構築した過程の意図と主題を追求した。〈自然〉の河であると同時に〈国境〉の河としての辛辣さ、国家のテリトリー争いが自然空間の上に加えた社会秩序の残酷さを、小説を通して表現できたことを明らかにした。

第三章は、小説「寛城子」（初出は昭和一六年）をとりあげた。本作は、満洲国の官庁に務める日本人青年の〈私〉と同僚の「満人」（中国人）及び、その妻との間で展開されている民族間の軋轢を主軸としている。作中に見られる民族問題を抽出し、主に満洲国のスローガンとして唱えられた〈民族協和〉に着目して、満洲国建国に関する日本人と中国人の間の齟齬を検討した。また、同時代の「満人」が登場する諸作品と比較しつつ、長谷川濬が、満洲国内部から民族問題を凝視・告発する様相を明らかにした。

第二部は二章からなる。長谷川濬が志向する〈満洲文学〉とは、どのようなものであるかを明らかにした。各章の要旨は以下の通りである。

第一章では、長谷川濬がバイコフの名作「偉大なる王」を翻訳するに至ったか、そのプロセスを追跡した。当時の資料を参照しながら、長谷川濬とバイコフとの出会い、両者の交流、そして、彼がどのようにこの長篇の翻訳に取り組んだかを明らかにした。また、翻訳を通して、長谷川濬はさらに満洲の野性味溢れる大自然に憧れ、

やがて、コサツクの小説を書くために辺境へ赴くことになることを明らかにした。また、その翻訳を経験することにより、後に長谷川が動物文学に興味を持ち、戦後まで動物に関わる文学作品を執筆し続けたことを具体的に跡付けた。

第二章では、「海と湖と人間と」（初出は昭和二〇年）をとりあげる。本作は、満洲国に赴任した佐野が経験した出来事をめぐって、満洲国で職業を持ちながら作家として活動する人々の生活状況を描いた作品である。まず、佐野の視座から提示された文学者の悩みを抽出し、満洲国の中に存在する〈専業作家がいない〉問題や〈原稿料が安い〉問題について考察した。また、作者である長谷川濬は当時の創作環境の困難を乗り越え、満洲国の自然の中に溶け込んだ独自の満洲文学を作ろうと努めていた。その願望が作品の中にどのように反映しているのかを明らかにした。

第三部は一章からなる。右の論考の「補論」とも言うべき内容で、長谷川と同時代の他の作家のケースをとりあげた。

対象となるのは、日向伸夫の小説「第八号転轍器」（初出は昭和一四年）である。北鉄（ロシア帝国が満洲北部に建設した鉄道路線）がソ連から満洲国へ譲渡された時期に、北鉄に勤務していた中国人の転轍手（ポイントを操縦する運転手）の物語である。作者である日向は、中国人の立場から、北鉄譲渡による列車ダイヤの変更や鉄道勤務の内実の変化、あるいは従業員の言葉の壁の問題などを作品化していることを明らかにした。日向は異民族の中国人を「等しい

人間」として作中に描いたことを明らかにした。

渡満するまでにロシア文学を耽読した長谷川濬の作品中には、ロシアにまつわるイメージが頻繁に登場する。本論の中でそれについて取り上げられなかった。満洲国内の複雑な民族関係に向きあうとき、長谷川は「満人」よりロシア人に近い場所に親近する傾向があるのではないかという仮説を立てているが、今後また、彼の作品中の白系ロシア人のイメージについて改めて検討していきたいと考えている。

また、同時代の他の渡満作家の作品と比べて読み、長谷川濬独自のまなざしをより明らかにしたいと考える。

さらに、『彼等の昭和』（白水社 平成六年）、『満洲浪漫——長谷川濬が見た夢』（藤原書店 平成二四年）、『作文』第九六集（長谷川濬追悼号、作文社 昭和四九年八月）などの資料に拠りつつ、本論文の著者が新たな調査を行い、そこで発掘できた長谷川濬の作品を追録した「長谷川濬年譜（付・著作目録）」を附録として掲載する。遺漏があることを恐れるばかりであるが、今後の調査により、さらに増補できるものと考えている。また、長谷川濬が一九五二年から亡くなる一九七三年まで書き続けたおよそ百三十冊のノートが残っており、現在は次男である長谷川寛の元に保管されている。そのノートの整理、出版について力を尽くしていきたいと考えている。

【附 録】

付録

【凡例】

※年代は西暦で表記し、○内に日本国元号・満洲国元号による年代を併記した。

※年代、経歴、著作における旧漢字は原則として新漢字に改めた。ただし、雑誌『藝文』の「藝」と『文藝春秋』の「藝」は慣例に従い、

旧漢字で表記する。

※著作については、発表誌紙名、巻・号数、出版社名、作品ジャンル、作品表題の順に表記した。そのうち、出版社名と作品ジャンルは○の中に記入した。

付記

年譜には、『彼等の昭和』（白水社 平成六年）、『満洲浪漫——長谷川濬が見た夢』（藤原書店 平成二四年）、『作文』第九六集（長谷川濬追悼号、作文社、昭和四九年八月）などの資料に拠りつつ、新たに発掘できた事項・作品を追録した。

長谷川濬略年譜（付・著作目録）

年代	経歴（付・著作）
1906 （明治39）	7月4日、長谷川濬が生まれる。
1913 （大正2）	4月、函館区立弥生尋常小学校に入学。なお、同級に亀井勝一郎がいる。
1920 （大正9）	4月、函館中学校入学。
1925 （大正14）	函館中学校卒業。カムチャッカ半島ペトロパウロスクに行き、イクラづくりに従事する。その後四年間、日魯漁業会社に雇われ、伊豆の北川で働く。冬場は函館に帰省してロシア語を勉強する。
1929 （昭和4）	4月、船を下り、外国語をロシア語で受験して、大阪外国語学校露語科入学。ネフスキーにロシア語を学ぶ。
1932 （昭和7・大同元）	3月、大阪外語学校卒業。 5月15日、五・一五事件の当日に大川周明の助力を得て渡満。 5月20日、満洲国・新京の資政局自治指導訓練所（後に改組された大同学院）で地方県参事官となるための訓練を受ける。 10月10日、大同学院一期生として卒業。満洲国外交部に入る。
1933 （昭和8・大同2）	2月、満洲里で咯血、入院。 3月、日本に帰国。 5月、鈴木文江と結婚。 6月、チタの領事館に勤務、弁事処通訳官として綏芬河（ボグラニーチナ）に赴任。
1934 （昭和9・大同3・康德元）	2月29日、長女嶺子が生まれる。
1935 （昭和10・大同4・康德1）	（日付不詳）新京に帰任する。
1936 （昭和11・康德3）	1月6日、長男・満が生まれる。新京の外交部俄国科に勤める。

	【著作】 9月、『満洲行政』第3巻9号（9月号・満洲行政学会）に（小説）「アムールの歌」を発表。 「興安館の人人」（未確認）
1937 （昭和12・ 康德4）	6月下旬、関東軍は軍政部に対し国境前線に亘る兵要調査を命じた。濬はロシア語通訳者として第三班に属した。調査区域は、黒河を東端として黒竜江を遡航し、漠河を経て満洲里にいたる領域である。 新京に戻ってから弘報処に移り、別役憲夫（別役実の父）、仲賢礼（木崎龍）、岡田益吉と知りあう。 8月14日、株式会社満洲映画協会法公布。 8月21日、株式会社満洲映画協会を新京に設立。理事長金璧東、常務理事・林顕蔵。 （日付不詳）濬は満洲国外交部を辞め、満洲映画協会に入る。 この年、同人誌『白想』の発行を構想するが実現しなかった。 【著作】 9月、『満洲行政』第4巻10号（10月号・満洲行政学会）に（小説）「或る生活」を発表。
1938 （昭和13・ 康德5）	9月18日、次男・寛が生まれる。 10月27日、北村謙次郎（満映経理部）、仲賢礼らと雑誌『満洲浪漫』を発刊。 同日、小林秀雄と林房雄の文学講演会（於新京）の歓迎会で同誌を配布した。 10月、「国境地区」（原作・長谷川濬 脚色・藤川研一）が大同劇団訪日記念新京公演で上演される。 10月～11月、「国境地区」（長谷川濬原作・藤川研一脚色）が名古屋、東京、横浜、大阪で上演される。 【著作】 1月、『満洲行政』第5巻1号（1月号・満洲行政学会）に（小説）「蘇へる花束」を発表。 1月、『新京』（新京社）に「流水の幻想」を発表（未確認）。 4月、『満洲映画（日文版）』第2巻4号（4月号・満洲映画発行所）に（随筆）「映画妄言」を発表。 5月、『モダン満洲』5月号（モダン満洲社）に「花は褪せたり」を発表（未確認）。 10月、『満洲浪漫』第1輯（文祥堂）に（小説）「伝説」を発表。 10月、『モダン満洲』第10月号（モダン満洲社）に「赤猫飯店」を発表（未確認）。 （発表日付未詳）「耳を拾った話」を『満洲新聞』に発表（未確認）。

1939 (昭和 14・ 康德 6)	【著作】 2 月、『満洲行政』第 6 卷 2 号 (2 月号・満洲行政学会) に (小説)「少年」を發表。 2 月、『宣撫月報』第 3 卷 2 号 (2 月号・國務院總務庁弘報処) に (翻訳)「戦時下ソ聯映画の動向」(原著・ボルシヤーコフ) を發表。 2 月、『満洲映画 (日文版)』第 3 卷 2 号 (2 月号・満洲映画發行所) に (映画シナリオ)「国境の少女」を發表。 3 月、『満洲浪漫』第 2 輯 (文祥堂) に (小説)「家鴨に乗った王」、(隨筆)「ただ書くのみ」を發表。 4 月、『新天地』第 4 月号 (新天地社) に (小品)「窗の歌」を發表。 5 月、『満洲行政』第 6 卷 5 号 (5 月号・満洲行政学会) に (小説)「北辺放浪記」(満洲新聞に連載した「カムチャツカ紀行」の再編・改稿) を發表。 6 月、『新京図書館月報』第 35 号 (新京図書館) に (隨筆)「果物を求む」を發表。 6 月、『満洲映画 (日文版)』第 3 卷 6 号 (6 月号・満洲映画發行所) に「映画雜記帳」を發表。 7 月、『満洲浪漫』第 3 輯に (小説)「大同大街」、(評論)「同人語・文藝批評と人間主義」を發表。 7 月、『新天地』第 7 月号 (新天地社) に (小説)「水母と海豹」を發表。 11 月、『満洲文藝年鑑』昭和 14 年版 (満蒙評論社) に (小説)「蘇へる花束」を収録。 12 月、『満洲作家撰集』(『満洲浪漫』第 4 輯・文祥堂) に (小説)「烏爾順河」、(隨筆)「四季語・ふるさと雜感」を發表。 12 月、『満洲新聞』に「雪の日」を發表 (未確認)。
1940 (昭和 15・ 康德 7)	4 月 8 日、富沢有為男とともに馬家溝教堂街のバイコフ宅を訪れる。 (日付不詳) 満洲文話会新京支部の文芸幹事に就任する。 【著作】 1 月、『満洲行政』第 7 卷 1 号 (新年号・満洲行政学会) に (小説)「クンガース」を發表。 1 月、『満洲映画』第 4 卷 1 号 (満洲映画發行所) に (隨筆)「満洲の女性」を發表。 2 月、『満洲新聞』に「社会風俗時評」を發表 (未確認)。 2 月、『満洲日日新聞』に「油虫」を發表 (未確認)。 2 月、『協和』第 14 卷 3 号 (258 号・満鉄社員会) に (隨筆)「北満の魅力」を發表。 2 月、『協和』第 14 卷 4 号 (259 号・満鉄社員会) に (隨筆)「新京たより」を發表。

	3 月、『満洲行政』第 7 巻 3 号（3 月号・満洲行政学会）に（小説）「傀儡の街」、（随筆）「新春つれづれ草」を発表。 4 月「バイコフ会見記」を『満洲新聞』（未確認）。 5 月、『満洲文学研究』（『満洲浪漫』第 5 輯・文祥堂）に（評論）「建国文学私論」を発表。 6 月 24 日（夕刊）～10 月 3 日（夕刊）（計 85 回）『満洲日日新聞』に（翻訳）「虎」（「偉大なる王」から改題・原著バイコフ）を連載。 6 月、『満洲グラフ』第 8 巻 6 号（南満洲鉄道株式会社）に（小説）「H の魂亡」を発表。 7 月、『満洲よもやま』（満洲文話会）に（随筆）「水漏り事件」を発表。 8 月、『満洲映画』第 4 巻 8 号（満洲映画発行所）に（随筆）「李明」（日文と中文を併載）を書く。 8 月、24、25、27～30 日『満洲日日新聞』に、座談会「八月創作合評」（全 6 回）を掲載。濬の他に北村謙次郎、吉野治夫、筒井俊一が参加。 11 月、『新京図書館月報』第 46 号（新京図書館）に（随筆）「翻訳雑感 ロシヤ語の場合」を発表。
1941 （昭和 16・ 康德 8）	1 月、動物文学会（主宰・平岩米吉）に入会。 5 月 20 日、三男・瀏が生まれる。 11 月 21 日、株式会社満洲電影総社設立（社長・甘粕正彦）。濬は上映部巡映課長となる。 【著作】 2 月、翻訳『虎』（「偉大なる王」から改題・原著バイコフ）は満洲日日新聞社と大連日日新聞社より発行。 9 月、翻訳『偉大なる王』（原著バイコフ）を文藝春秋社より刊行。 5 月、『動物文学』第 77 輯（動物文学会）に（随筆）「虎ものがたり」を発表。 5 月、『僻土残歌・満洲浪漫叢書』（『満洲浪漫』第 7 輯・文祥堂）に（小説）「鷺」を発表。 8 月、『動物文学』第 80 輯（動物文学会）に（随筆）「続虎ものがたり」を発表。 9 月、『作文』第 51 輯（作文発行所 以下同じ）に『春聯』について」を発表。 10 月、『新天地』第 10 月号（新天地社）に（小説）「三つの世界」を発表。 11 月、「寛城子」を『作文』第 52 輯に発表。 （発行月不詳）『満洲』（満洲社）に「静かなる園」、「さくらばな」を発表（未確認）。

1942 （昭和 17・ 康德 9）	2 月、三河協和会囑託に就任し、コザックの小説の取材旅行を行う。＜マクシム・ニコライウイチ＞の名で、「或るマクシムの手記」を書き始める。 3 月、満洲芸文指導要綱が公布される。 5 月 16 日、父淑夫、杉並の自宅で死去。 12 月、雑誌『作文』五五集で終刊。 【著作】 1 月、『藝文』創刊号（藝文社）に（小説）「星雲・序章」を発表する。 3 月、『藝文』第 3 月号に（翻訳）「建国十周年を迎えて」（作者ヴェ・ア・キスリーツイン）を発表。 3 月、『作文』第 54 輯（作文社）に（紀行文）「海拉爾の宿—三河通信 1」を発表。 6 月、『満洲国各民族創作選集』第 1 卷（創元社）に「烏爾順河」が再録される。 7 月、『藝文』第 7 月号（藝文社）に（小説）「早春」を発表。 12 月、『作文』第 55 輯（作文社）に（小説）「野火」を発表。 12 月、『北窓』第 4 卷 5 号（満鉄哈爾濱図書館）に（小説）「或るマクシムの手記」を発表。
1943 （昭和 18・ 康德 10）	1 月 16 日、盟友である仲賢礼が死去。広島に出張し、木崎の遺族を実家に送り届ける。 3 月 27 日、日本出張から新京に戻る。 6 月、満映で職制改革があり調査企画局第一班長に就任する。 9 月 24 日、次女・茉莉生まれる。 【著作】 3 月、『満洲芸文通信』第 2 卷 3 号（3 月号・満洲芸文聯盟）に（評論）「木崎龍の文学精神——覚書として——」を発表。 7 月、『北窓』第 5 卷 3 号（満鉄哈爾濱図書館）に（随筆）「亡き友へ」、（小説）「耕地」を発表。 8 月、『藝文』第 8 月号（藝文社）に（随筆）「小林秀雄氏を囲む」（小林秀雄との座談会）を発表。
1944 （昭和 19・ 康德 11）	8 月 1 日、次女・茉莉没。 【著作】 2 月、『藝文』第 2 月号（満洲芸文聯盟）に（小説）「兄妹」を発表。 4 月、『藝文』第 4 月号（満洲芸文聯盟）に（随筆）「我が座右銘」を発表。 5 月、『満洲公論』第 5 月号（満洲公論社）に（小説）「凍原」を発表。 7 月、『藝文』第 7 月号（満洲文藝春秋社）に（評論）「満洲文学に欠けたもの」を

	発表。 8月、『藝文』第8月号（満洲文藝春秋社）に（小説）「札賚炭砒記」を発表。 8月、『拓友』第5巻8号（満鉄殖産局拓植課）に（小説）「日章旗」を発表。 10月、作品集『烏爾順河』が国民画報社より出版される。 10月、『宣撫月報』第71号（国務院総務庁弘報処）に（翻訳）「ソ聯に於ける農村巡映現況」（原著はデクチャーリ）、（論評）「大東亜共栄圏とスラヴ民族」を発表。 12月、『藝文』第12月号（満洲文藝春秋社）に（評論）「決戦藝文の途」（座談会）が発表。（随筆）「夏目漱石と旅」を発表。
1945 （昭和20・ 康德12）	7月10日、三女・道代生まれる。 8月9日、ソ連軍の満洲侵攻に際して、甘粕正彦から元日本共産党「赤旗」編集長・濬の友人の殺人指令を受けるが、沈黙。 8月17日より、赤川孝一、大谷隆とともに、甘粕正彦の警護にあたる。 8月20日午前六時前、甘粕正彦は服毒により死亡。 10月1日、満映は東北電影公司として改組、濬も加わる。 【著作】 1月、『藝文』新年号（満洲文藝春秋社）に（小説）「海と湖と人間と」を発表。 5月、『藝文』第5月号（満洲文藝春秋社）に（随筆）『「日ごよみ」を読んで』を発表。
1946 （昭和21）	春、三好十郎作「彦六大いに笑ふ」の公演を実現させる。 4月14日、ソビエト軍が撤兵、八路軍進軍。 5月17日で没した友人であり詩人の逸見猶吉を看取り、野原で死体を焼く。 7月23日、三女・道代死去。 8月19日、胡蘆島から帰国。一家五人で母と妹の家に落ちつく。濬き結核に罹患していた。 【著作】 12月、『文藝春秋』第24巻10号（12月号・文藝春秋社）に（随筆）「甘粕氏の死」を発表。
1947 （昭和22）	（日付不詳）徳川夢声の紹介で、・人世坐により（三角寛の映画館）雑務を行う。 機関誌『人世』の原稿とりをする。 【著作】 7月、『日本未来派』第2号（日本未来派発行所）に（随筆）「逸見猶吉の死」を発表。

1950 (昭和25)	6月、ジープ社よりバイコフ『虎』（「偉大なる王」を改題）を出版。 【著作】 6月、「訳者の言葉」をバイコフ『虎』（ジープ社）に発表。
1951 (昭和26)	3月29日、長男・満死去。
1952 (昭和27)	2月、濬訳『偉大なる王』（新潮文庫）が発行。 【著作】 2月、新潮文庫版『偉大なる王』（新潮社）に「あとがき」を発表。
1953 (昭和28)	（日付不詳）ナホトカ行き貨物船の通訳となり、沿海州、サハリン、アムール河等を往来（昭和43年まで）。
1954 (昭和29)	アート・フレンド・アソシエーション設立に参加。
1955 (昭和30)	春、ドン・コザック合唱団と巡業中に咯血。 5月、松戸の国立サナトリウムに入院（翌年一月まで）。 【著作】 12月、『私の動物たち』（著作ドウロフ 日月社）を翻訳し、出版。巻頭に「訳者のことば」を掲載。
1956 (昭和31)	ドン・コザック合唱団が公演を行う。 【著作】 1月、『歌うドン・コザック』（著作エメリヤン・クリンスキー 出版社アート・フレンド・アソシエーション）を翻訳し、出版。巻末に「訳者のことば」を掲載。
1957 (昭和32)	4月、杉並区成宗三ノ五七三に転居。 【著作】 3月、『動物文学』第134集（動物文学会）に（随筆）「猛獣と人間」を発表。 4月、『進路』第4巻4号（進路社）に（随筆）「セルゲイジャーロフのこと」を発表。 5月、『進路』第4巻5号（進路社）に（随筆）「療養記」を発表。 6月、『動物文学』（動物文学会）135集に（詩）「虎」を発表。 6月、『進路』第4巻6号（進路社）に（随筆）「療養記」を発表。 6月、『文学四季』第6月号（文学四季社）に（随筆）「逸見猶吉を焼く」を発表。 7月、『文学四季』第7月号（文学四季社）に（小説）「雪あかり」を発表。

	8月、『進路』第4巻8号（進路社）に（随筆）「療養記」を発表。 9月、『進路』第4巻9号（進路社）に（随筆）「療養記」を発表。 11月、『進路』第4巻第11号（進路社）に（随筆）「療養記」を発表。 12月、『文話』第16号（文話会）に（随筆）「黒竜江河口にて」を掲載。
1958 (昭和33)	【著作】 1月、『文学四季』第2巻1号（1月号・文学四季社）に（小説）「ペトロパヴロフスクの水夫——この一篇を同郷のK・Kに」、（コラム）「風風・雨雨」を発表。 3月、『文学四季』第2巻2号（3月号・文学四季社）に（コラム）「風風・雨雨」を発表。 4月、『進路』第5巻4号（進路社）に（随筆）「ロシヤのパン」「ドン・キホーテの映画化」を発表（未確認）。 5月、『満洲の回想』（淵上白陽・恵雅堂出版株式会社）に（詩）「ホロンバイル草原を思う」を発表。 6月、『文学四季』第2巻4号（6月号・文学四季社）に（コラム）「風風・雨雨」を発表。 9月、『文学四季』第2巻6号（9月号・文学四季社）に（詩）「白い想い」を発表。
1959 (昭和34)	【著作】 1月、『文話』第18号（文話会）に（書信）「会員動静」を発表。 6月、『文話』第21号（文話会）に（書信）「会員動静」を発表。 6月、『動物文学』第140集（動物文学会）「会員通信」に文章を発表。
1960 (昭和35)	【著作】 2月、『The Art Times』に（随筆）「チエホフ生誕百年を迎えて」を発表。 5月、『文学街』第4巻5号（5月号・文学街社）に（小説）「死者を打つなかれ」を発表。 12月、『文学街』第4巻12号（12月号・文学街社）に（小説）「象の鼻の夢」を発表。
1961 (昭和36)	4月、『文学街』第5巻4号（4月号・文学街社）に（小説）「街」（清水宏三と共同執筆）を発表。 6月、『文学街』第5巻6号（6月号・文学街社）に（小説）「アルヒーブ」を発表。 7月、『文学街』第5巻7号（7月号・文学街社）に（小説）「同心棒」を発表。 8月、『The Art Times』に（随筆）「ワーニャとゴーシャ」を発表。 8月～10月、『文学街』第5巻8号～10号（8月号～10月号・文学街社）に（翻訳）「漂白の獵人——イワン・トウルゲーネフの生涯」（原著・ボリス・ザイツェフ）を連載。
1962 (昭和37)	4月、阿佐ヶ谷の河北病院に入院。

	【著作】 1 月、『文学街』第 6 巻 1 号（1 月号・文学街社）に（小説）「サハリン航海記」を 発表。 3 月、『動物文学』第 152 集（動物文学会）に（翻訳）「虎を生捕る」（ヴェ・パニ ューコフ）を発表。 4 月、『文学街』第 6 巻 4 号（4 月号・文学街社）に（小説）「晩春の微笑」を発表。 5 月、『文学街』第 6 巻 5 号（5 月号・文学街社）に（小説）「誰も知らない」を発 表。 9 月、『動物文学』第 154 集（動物文学会）「会員通信」に文章を発表。 11 月、『宴』第 11 月号（大成社）に（翻訳・詩）「昔のうたを——妹シューラへ」 （原著・セルゲイ・エセーニン）を発表。 12 月、『宴』第 12 月号（大成社）に（随筆）「一石橋界限」を発表。
1963 （昭和 38）	【著作】 5 月、『宴』第 2 巻 2 月号（5 月号・大成社）に（詩）「少年と海」を発表。
1964 （昭和 39）	8 月、雑誌『作文』復刊号が出る。 【著作】 11 月、私家版詩集『海』を刊行。 11 月、『昭和戦争文学全集 1 ——戦火満洲に挙がる』（集英社刊）に「烏爾順河」 が再録される。 12 月、『大衆文学研究』第 12 号（南北社）に（随筆）「動物文学雑感」を発表。
1965 （昭和 40）	1 月、復刊『作文』の同人となる。この時の住所は杉並区成宗三ノ五七三。 【著作】 2 月、『作文』復刊第 3 集に（詩）「虎」を発表。 5 月、『作文』復刊第 4 集に（小説）「船肖像」を発表。 8 月、『作文』復刊第 5 集に（詩）「虎四篇」（「月に戯れる虎」、「囚はれの虎」、「死 にゆく虎」、「亜細亜野生」の 4 篇から成る）。 9 月、『動物文学』第 166 輯（動物文学会）「会員通信」に文章を発表。 11 月、『作文』復刊第 6 集（通巻第 59 集）に（詩）「ダライ・ノール幻想」、エッ セイ「ナホトカ診療所にて」を発表。 12 月、『作文』第 60 集に（小説）「風の人」を発表。 12 月、『動物文学』第 167 輯（動物文学会）に（随筆）「満洲開拓村の狼」を発表。
1966 （昭和 41）	【著作】 3 月、『作文』第 61 集に（詩）「北サハリン海景」を発表。 3 月、『動物文学』第 168 集（動物文学会）に（詩）「オラン・ウータン」を発表。

	6月、『作文』第62集に（小説）「夢遊病者の手記」を発表。 6月、『動物文学』169集（動物文学会）に（翻訳）「密林の邂逅」（原著・アルセーニエフ）を連載開始。（～昭和43年3月、176集まで8回連載）。 8月、『作文』第63集に（詩）「海二篇」（「海の扉」、「私が死んだら」）の2篇を発表。 9月、『動物文学』第170集（動物文学会）に（随筆）「雀と女房」を発表。 11月、『作文』第64集に、（詩）「三輪崎二篇」（「夢に見る海」、「三輪崎の海辺に横たわりて」）の2篇を発表。 12月、『動物文学』第171集（動物文学会）に（随筆）「ゴリラ」を発表、同誌「会員通信」に文章を発表。
1967 (昭和42)	4月～7月まで多摩動物園・佐藤清郎方に居住。 【著作】 1月、『作文』第65集に（小説）「床下のワーニヤ」、随筆「亀井さんと私」を発表。 5月、『作文』第66集に、（詩）「私の掌に」、「白鳥」、「夜のキャビンで」、（随筆）「逸見猶吉のこと」を発表。 7月、『作文』に（詩）「混沌風景——或は狼藉の庭」（「犯行」、「水兵帽」、「亡命者（エミグラント）」「眼が……」、「風」、「ECCE HOMO」、「渋谷街頭にて」、「出港」、「白いボート」、「化石」、「アルグンの鶴」、「東京無宿」、「入港」、「ホロンバイル風景」、「マヘリヤ・ジャクソンへ」、「狼」、「幼き女の子」、「VON VOYAGE!」、「俺の海」、「花へのファンタジー」、「韃靼海湾を通りて」、「刺網つくろう漁夫」、「願望」、「あの空の下に」、「豊かなる羊水に沐浴せよ」、「揺籃のうた」、「薔薇園にて」、「花は人の心のことば……」、「落ちゆく星」の29篇から成る）、（書評）「詩集「瞬間」を読む」を発表。 6月、『動物文学』第173集（動物文学会）に（随筆）「ゴリラ補記」を発表。 9月、『作文』第68集に（詩）「鳩」、「毘」、「冬眠」、「狼」、（小説）「海の女神」を発表。 9月、『動物文学』第174集（動物文学会）に（随筆）「ひばり」、（翻訳）「ブウトウ河の飢餓」（原著・アルセーニエフ）を発表。 12月、『動物文学』第175集（動物文学会）に（随筆）「多摩動物園漫歩」を発表。同誌「会員通信」に文章を掲載。
1968 (昭和43)	【著作】 1月、『作文』第69集に（詩）「おもちゃ屋の前で」、「海豹（とつかり）の歌」、「黄昏の街」、「施療院別室にて」を発表。 3月、『動物文学』第176集（動物文学会）に（随筆）「熊の胆のう」、同誌「会員

	通信」に文章を掲載。 6月、『動物文学』第177集（動物文学会）「会員通信」に文章を掲載。 8月、『作文』第70集に（詩）「ロシヤパンをかじる」を発表。 9月、『動物文学』第178集（動物文学会）に（翻訳）「兎の肢」（原著・パウストフスキイ）を発表。 12月、『動物文学』第179集（動物文学会）に（翻訳）「泥棒猫」（原著・パウストフスキイ）を発表。同誌「会員通信」に文章を掲載。 12月、『作文』第72集に（随筆）「バイコフのこと（満洲文学覚書2）」を発表。
1969 (昭和44)	1月、ニコライ学院ロシア語講師を務める（同年6月まで）。 6月、小金井市桜町病院に入院（翌年1月まで）。 【著作】 3月、『動物文学』第180集（動物文学会）に（翻訳）「葦毛の馬」（原著・ハウストフスキイ）を発表。 6月、『動物文学』第181集（動物文学会）に、（随筆）「無心」、（翻訳）「穴熊の鼻」（原著・パウストフスキイ）を発表。同誌「会員通信」に文章を掲載。 6月、『作文』第75集に（随筆）「あるグルジア画家の生涯」を発表。 8月、『作文』第76集に（随筆）『満洲浪漫』について（満洲文学覚書4）」、（短歌）（8首）「桜町通信」を発表。 9月、『動物文学』第182集（動物文学会）に（随筆）「犬をつれた奥さん」、（翻訳）「ゴムボート」（パウストフスキイ）を発表。同誌「会員通信」に文章を掲載。 10月、『作文』第77集に（随筆）「庭を眺めて」、（詩）「人生の歌」を発表。
1970 (昭和45)	【著作】 1月、『作文』第78集に（詩）「手紙」を発表。 3月、『作文』第79集に（随筆）「私の兄たち」を発表。 7月、『作文』第80集に（随筆）「富沢有為男さんのこと」を発表。 9月、『動物文学』第186集（動物文学会）に（翻訳）「最後の魔物」（原著・パウストフスキー）を発表。 10月、『作文』第81集に（詩）「足跡」、「星」（随筆）「ばあやのはなし」を発表。 12月、『作文』第82集に（随筆）「私の住んでいる成田東一の八の九という町」、（小説）「北の河の物語」を発表。
1971 (昭和46)	4月、夫妻で千葉県旭市元岩井病院に仮寓（翌年4月まで）。 【著作】 3月、『作文』第83集に（詩）「潮岬」を発表。 9月、『動物文学』第190集（動物文学会）に（随筆）「野良犬と野良猫」、翻訳「豹

	(パルス)」(原著・プリシヴィン)を発表。 10月、『作文』第85号に(随筆)「徳川夢生氏のこと」を発表。
1972 (昭和47)	5月、佼成病院入院。 6月、桜町病院に転院(同年8月まで)。 11月、桜町病院に再入院、肺性心と診断される。 【著作】 1月、『作文』第86集に(小説)「北の海の物語」を発表。 3月、『動物文学』第192集(動物文学会)に(随筆)「冬の庭」を発表。 5月、『作文』第87集に(詩)「貝殻を拾う」を発表。 6月、『動物文学』第193集(動物文学会)「会員通信」に文章を発表。 9月、『動物文学』第194集(動物文学会)「会員通信」に文章を発表。 11月、『外語文学』第10号(外語文学会)に(小説)「国境」を発表。 12月、『動物文学』第195集(動物文学会)に(翻訳)「海辺にて」(原著・アルセーニエフ)を発表(昭和48年・3月第196集、6月第197集、9月第198集、12月第199集に連載)、同誌「会員通信」に文章を発表。
1973 (昭和48)	3月、桜町病院退院。 12月16日、死去。享年六七歳。 没する十日前に大野沢緑郎に葉書を出す(「分別の底も破れし師走かな」)。 【著作】 1月、『動物文学』第196集(動物文学会)に(翻訳)「海辺にて(二)」(原著・アルセーニエフ)を発表、同誌「会員通信」に文章を発表。 7月、『作文』第92集に(随筆)「彼の人的風景印象断片——詩人・吉田一穂追悼」を発表。
1974 (昭和49)	【著作】 3月、『動物文学』第200集(動物文学会)に(翻訳)「冬の旅」(原著・アルセーニエフ)を発表。 6月、『動物文学』第201集(動物文学会)に(翻訳)「アンバ(虎)」(アルセーニエフ)が遺稿として発表される。 8月、『作文』第96集(長谷川濬追悼号)に、大野沢緑宛て私信(詩)「旅立ちのうた」を発表。
2005 (平成17)	【著作】 9月、『作文』第190集に(小説)「水泳(「北の海の物語・下」)を掲載。
2006 (平成18)	【著作】 1月、『作文』第191集に(小説)「海上浴場(「北の海の物語・下2」)を掲載。

	5 月、『作文』第 192 集に（小説）「アメリカ湾にて（「北の海の物語・下 3」）」を掲載。 9 月、『作文』第 193 集に（小説）「海郷（「北の海の物語・下 4」）」を掲載。
2007 （平成 19）	【著作】 5 月、『作文』第 194 集に（小説）「ナホトカ街にて（「北の海の物語・下 5」）」、（小説）「エリザヴェーダ岬（「北の海の物語・下 6」）」を掲載。
2010 （平成 22）	5 月、『作文』第 200 集に（小説）「或るドクトルの告白」（『咲耶』11 号 1932 年より掲載）。

初出一覧

第一部 小説から見える満洲国

第一章 満洲国における恋愛と建国 —長谷川濬「烏爾順河」をめぐって—

原題同じ。『国文論叢』（第四六号、二〇一三年三月）掲載予定。

第二章 国境線としてのアルゲン河 —長谷川濬「蘇へる花束」をめぐって—

原題「〈満洲文学〉のある一面について—長谷川濬の『蘇へる花束』における〈国境線〉—」

『阪神近代文学研究』（第二二号、二〇一一年五月）。

【発表】同題、第三九回阪神近代文学会（平成二二年七月三日、於常磐会学園大学）。

第三章 満洲国における民族協和 —長谷川濬「寛城子」をめぐって—

書き下ろし。

第二部 文学者としての歩み

第一章 長谷川濬と『偉大なる王』 —バイコフの翻訳をめぐって—

書き下ろし。

第二章 満洲国における作家生活の一側面 —長谷川濬の小説「海と湖と人間と」をめぐって—

書き下ろし。

第三部 同時代の他の作品

〈満洲文学〉のある一面について —日向伸夫「第八号転轍器」をめぐって—

原題「〈満洲文学〉のある一面について—日向伸夫『第八号転轍器』論」

『阪神近代文学研究』（第二一号、二〇一〇年五月）。

附録 長谷川濬略年譜（付・著作目録）

書き下ろし。

※ 既発表の論文に関しては、いずれの論文も加筆と修正を加えた。